

京都大学
女性研究者支援センター報告書

平成26年3月

目 次

| | |
|--|----|
| ご挨拶 | 1 |
| 運営体制 | 2 |
| 活動内容 | 3 |
| I 「広報・相談・社会連携」事業 | 5 |
| 1) シンポジウム「京都で研究する！」 | 7 |
| 2) アジア太平洋における男女共同参画推進官・リーダーセミナー | 11 |
| 3) 七大学男女共同参画特集（学士会） | 12 |
| 4) 京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞） | 13 |
| 5) ポケットゼミ「ジェンダーと科学」 | 18 |
| 6) 全学共通科目「性差を科学するⅠ・Ⅱ」 | 19 |
| 7) 女子高生・車座フォーラム 2013 | 20 |
| 8) ジュニアキャンパス 2013 | 27 |
| 9) 第8回女子中高生のための関西科学塾 | 29 |
| 10) ストレスマネジメント講座 | 32 |
| 11) 女性研究者支援センターNewsletter | 33 |
| II 「育児・介護支援」事業 | 57 |
| 1) 平成25年度「保育園入園待機乳児のための保育施設」 | 58 |
| 2) おむかえ保育 | 62 |
| 3) ベビーシッター育児利用支援 | 64 |
| 4) 京都大学広報誌「紅菡」にて活動紹介 | 65 |
| 5) 勉強会「介護のつどい」 | 66 |
| 6) 講演会「介護する家族にとってのターニングポイント」 | 68 |
| III 「病児保育」事業 | 69 |
| 1) 病児保育室「こもも」 | 70 |
| IV 「就労支援」事業 | 75 |
| 1) 「出産・育児・介護中の研究者に対する研究・実験補助者の雇用」プログラム | 76 |
| 2) 京都大学教員・研究員の生活時間に関するアンケート調査報告 | 80 |
| 資料 | |
| 1) 女性研究者支援センター関係者名簿 | 85 |
| 2) 女性研究者支援センター運営委員会・推進室会議議事 | 87 |
| 3) 女性研究者支援センター活動日誌 | 91 |
| 4) 環境への取組 | 94 |
| 5) 京都大学の教員・学生数 | 96 |
| 6) 京都大学の女性研究者・女子学生の状況 | 98 |

ご挨拶



副学長（男女共同参画担当）
京都大学女性研究者支援センター長
生命科学研究所教授 稲葉カヨ

平成 18 年に設立された女性研究者支援センターでの活動も早 8 年となりました。この間、事業開始から 3 年間は科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成事業」で、その後 3 年間は「重点アクション・プラン」で、昨年度からは大学の基盤経費で当センターは運営されています。

今年度は、実施する事業は発展させつつも、運営に携わる教員の負担を軽減するため、組織の見直しを行いました。そこで、これまで 6 つに分かれていたワーキング・グループを 4 つに再編し、広報・相談・社会連携事業、育児・介護支援事業、病児保育事業、就労支援事業としました。

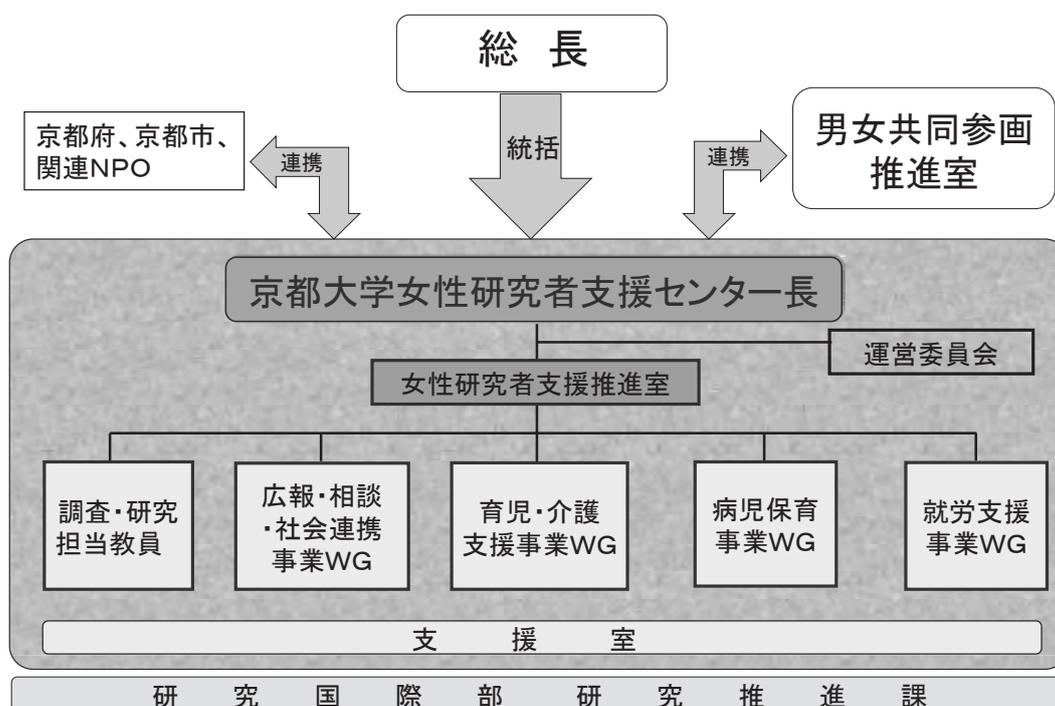
ニュースレターも本年度は 6 回発行し、多くの方々に楽しみにしていただいている「連載：研究者になる！」も 2 月には 46 人目の教員に登場していただきました。教養教育では、ポケットゼミ「ジェンダーと科学」や「性差を科学する I」「性差を科学する II」に加えて、「偏見・差別・人権」でもジェンダーの視点においては本センターの運営に関与する教員が講義を担当しています。また、「女子高生・車座フォーラム 2013（第 8 回）」は京都大学進学を目指す 99 名と保護者 36 名の参加を得て開催しました。驚くべきことに今年度は理系志望者が 6 割を越えました。さらに、男女共同参画推進室との連携で新規にベビーシッター利用育児支援を開始し、多くの方々に利用していただくことができるようになりました。

センターにとって本年度の最大のできごとは、思修館の学寮建設予定地となったため、これまでの建物を退去して「橘会館」に一時的に移転していることです。そのため、待機乳児保育室の定員を減らさざるを得ず、利用者の皆様にはご迷惑をおかけいたしました。しかし、7 月（予定）には、学寮の 1 階部分のスペースに戻るようになっております。さらに、来年度からは女性研究者支援センターの事業を総務部の中の男女共同参画推進室のもとに置き、大学として女性研究者のみならず広く教職員・学生の支援を行う予定です。これによって大学として一体化された事業推進が可能になると思われまます。

運営費交付金の減額や組織改革推進など、大学運営の厳しさも増している状況の中にはありますが、今後もなお一層のご理解、ご支援とご協力をお願い申し上げます。

運営体制

女性研究者支援センターは、京都大学の女性研究者が、研究・教育と生活を両立させるために、必要な支援を行うことを目的として、設立されました。本センターには女性研究者支援推進室をおき、そのもとに学内教員を委員とする4つのワーキンググループを設置して、それぞれの事業を企画・運営しています。



| 役職 | 氏名 |
|-------------------------|----------------------|
| 女性研究者支援センター長 | 稲葉 カヨ (生命科学研究所) |
| 女性研究者支援推進室長 | 伊藤 公雄 (文学研究科) |
| 広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ主査 | 山末 英嗣 (エネルギー科学研究科) |
| 育児・介護支援事業ワーキンググループ主査 | 山肩 洋子 (情報学研究所) |
| 病児保育事業ワーキンググループ主査 | 足立 壯一 (医学研究科) |
| 就労支援事業ワーキンググループ主査 | 押川 文子 (地域研究統合情報センター) |
| 調査・研究担当教員 | 犬塚 典子 (女性研究者支援センター) |

活動内容

センターでは、女性研究者の研究継続を容易にするための研究・教育環境の整備と改善をめざし、後継者の育成を育むための諸活動を 4 つの事業として展開しています。女性研究者だけでなく、教職員・学生をも対象として事業を運営しています。

4 つの事業内容

| 事業 | 内 容 | 期待される効果 |
|------------|---|--|
| 広報・相談・社会連携 | <p>女性研究者の増加とキャリア促進のための支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 女性研究者と学部生・院生との交流会 ◆ 高校生との交流会「車座フォーラム」実施 ◆ シンポジウムの開催 ◆ 京都大学優秀女性研究者賞の授与 <p>女性研究者支援のための啓発・広報活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 環境改善に資するための女性研究者・学生の動向調査 ◆ ニュースレターの発行 ◆ ホームページによる広報活動 ◆ 男女共同参画のための意識改革を促す企画の実施 ◆ 性差とジェンダーに関する全学共通科目とポケットゼミの提供 ◆ ジュニアキャンパスにゼミの提供 <p>女性研究者および関連する環境に対する相談窓口の運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ ストレスマネジメント講座の開講 ◆ メンター制度 ◆ 育児・介護などに対する情報提供窓口 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 研究・教育環境改善 ▶ 男女共同参画に向けた意識改革 ▶ 研究者を志望する女性の増加 ▶ 性差、ジェンダーに関する理解の促進 ▶ ロールモデルの提示 ▶ キャリア促進 ▶ 精神面のケア ▶ ロールモデルの提示 ▶ 情報の提供 |
| 育児・介護支援 | <p>育児や介護に関わる支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 保育園入園待機乳児室の運営 ◆ おむかえ保育の実施 ◆ 介護講座の実施 ◆ 保育のための施設の貸出 ◆ 女性研究者の情報交換の場の提供・施設貸出 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 育児・介護における負担軽減と研究の促進 ▶ 情報交換の場の促進 |
| 病児保育 | <p>病児保育室の運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 医学部附属病院との連携による病児の病中・後保育施設、隔離室の運営 ◆ 病児保育相談窓口の運営 | |
| 就労支援 | <p>育児・介護等で多忙な研究者のための支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 研究・実験補助者の雇用による研究支援 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 研究・教育環境の改善 ▶ 研究活動持続性の保障 |

I 「広報・相談・社会連携」事業

広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ活動報告

広報事業ではシンポジウム「京都で研究するー外国人研究者が語る京都大学での経験ー : International Researchers Talk About Their Experiences At Kyoto University」を行った。今回で7回目となるキャリアデザイン・シンポジウムであるが、初めて、英語を使用言語とした。出席者からの評価は高く、外国人学生・教員から今後も英語によるシンポジウムの開催を期待されていることが分かった。

社会連携事業としては、第8回女子中高生のための関西科学塾、ジュニアキャンパス2013、女子高生・車座フォーラム2013を学内に開催し、次世代育成のための活動を行なった。これからの社会を担う若い女子学生に対し、研究職に興味を持たせるような機会を提供するとともに、更なる工夫、改善の必要性を感じた。

相談事業としては、3月に東京大学医学系研究科島津明人准教授を招き、ストレスマネジメント講座「仕事に、学問に、恋をして(エンゲイジして)、あなたに、京都大学に、活力を！」を開催する。この講座を通し、学生や教職員に対してストレスとの上手な付き合い方、健康を維持しパフォーマンスを上げるために有効な知識・技術の習得についての情報を提供していく。

そして、センターの活動について、ホームページや全6号のニュースレターを通して、学内外に広報活動を行った。

広報・相談・社会連携事業WG主査 山末英嗣



■活動記録

- 5月10日(金) ニュースレター「たちばな」第50号発行
- 6月9日(日) 第8回女子中高生のための関西科学塾<A>を共催
- 6月12日(水) ハラスメント窓口相談員のための研修を受講:犬塚典子
- 7月19日(金) シンポジウム(シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン第7回)ー京都で研究する!~外国人研究者が語る京都大学での経験~「International researchers talk about their experiences at Kyoto university」ー
講師:Jane SINGER, Supawan JOONWICHIEEN
- 7月22日(月) 第30回女性研究者支援センター運営委員会
メンタルヘルス講習を受講
- 8月1日(木) ニュースレター「たちばな」第51号発行
- 9月14日(土) 京都大学ジュニアキャンパスに、センターポケゼミ受講者による中学生向けゼミ「大学生と語るジェンダー(「男らしさ」や「女らしさ」などの社会的性別)を提供
- 9月20日(金) ニュースレター「たちばな」第52号発行
- 9月23日(月・祝) 第8回女子中高生のための関西科学塾を共催
- 10月20日(日) 第8回女子中高生のための関西科学塾<C>を共催
- 11月9日(土) 第8回女子中高生のための関西科学塾<D>を共催
- 11月15日(金) ニュースレター「たちばな」第53号発行
- 11月17日(日) 第8回女子中高生のための関西科学塾<E>を共催
- 12月3日(火) 人権に関する研修会「セクシュアルハラスメントの判例」に参加:犬塚典子
- 12月10日(火) 女性教員懇話会第64回研究会「大学改革期における女性支援の現状と今後を考える」に協力
- 12月15日(日) 女子高生・車座フォーラム2013
- 1月15日(水) ニュースレター「たちばな」第54号発行
- 2月25日(火) ニュースレター「たちばな」第55号発行
- 3月7日(金) ストレスマネジメント講座ーワーク・エンゲイジメントに注目した個人と組織の活性化ーより健康でより高いパフォーマンスに向けて 講師:島津明人
- 3月15日(土) 第8回女子中高生のための関西科学塾<F>を共催
~16日(日)

KYOTO UNIVERSITY
CENTER FOR WOMEN RESEARCHERS

SYMPOSIUM SERIES : My Work and Career Design 7

International Researchers Talk About Their Experiences at KYOTO UNIVERSITY

Date Friday, July 19, 2013.
16:00 - 18:00 (Doors open at 15:30)

Place Shirankaikan Annex 2F,
Seminar Room 2
11-1 Ushinonriya-cho, Sakyou-ku, Yoshida, Kyoto

Event Details

International researchers speak about their studies, life, career paths, and challenges at Kyoto University to share their experiences with participants.



Supawan JOONWICHEN Researcher
Department of Materials, Physics and Energy Engineering,
Graduate School of Engineering, Nagoya University

**Studying Experience in Kyoto University:
Challenges, Lessons, and Future Perspectives**



Jane SINGER Associate Professor
Resource Governance and Participatory Development,
Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University

**Considering a Non-linear
Approach to an Academic Life**

This event is free and open to the public

Registration

Please pre-register via the online Registration Form (<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/english>)

Temporary nursery care for children of participants at Shirankaikan Annex

This center furnishes temporary child care fees of charge for children, 3 months to 3rd grade of elementary school from 15:30 to 18:30. Advance reservations are required for this nursery care and the deadline is Thursday, July 11. Please inform us about Name, Sex, Age, and Contact Information of your children when you register for the symposium.



Contact Information The Center for Women Researchers, Kyoto University

Tel: 075-753-2437 E-mail: wishien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp HP: <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/english>

Organized by The Center for Women Researchers, Kyoto University | Co-organized by Kyoto University Career Support Center, Kyoto University Gender Equality Promotion Office

シンポジウム「京都で研究する！—外国人研究者が語る京都大学での経験 International Researchers Talk About Their Experiences At Kyoto University」

日時 2013年7月19日(金) 16:00~18:00

場所 芝蘭会館別館(国際交流会館)2階研修室

第7回となるシンポジウム「シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン 京都で研究する！—外国人研究者が語る京都大学での経験—:International Researchers Talk About Their Experiences at Kyoto University」を開催しました。大学内外のグローバル化の動向を踏まえ、今回は英語で全プログラムを進めました。講演者のスパワン・ジュンウィチャン(Supawan JOONWICHEN)氏は、タイ王国出身で、本学で博士号を取得後、東北大学大学院金属材料研究所ポスドク研究員(NEDO プロジェクト)を経て、名古屋大学大学院工学研究科マテリアル理工学専攻で産官学連携研究員をされています。もう一人の講演者ジェーン・シンガー(Jane SINGER)先生は、記者、編集者を経て、京都府議会議員であったパートナーと二人のお子さんを育てながら、研究者へとキャリア形成し、2010年より京都大学大学院地球環境学コミュニティ開発論分野の准教授として勤務されています。今回のシンポジウムでは本学にゆかりのあるお二人に、これまでのキャリア、研究、本学での経験などについてお話いただきました。

司会進行は、講演者のジュンウィチャン氏の院生時代の指導者でもある山末英嗣・女性研究者支援センター広報WG 主査が行いました。はじめに、稲葉カヨ・女性研究者支援センター長より挨拶があり、センターの活動紹介と、お二人の講演者のプロフィール紹介が行われました。そして、ジュンウィチャン氏より、留学生の視点から「“Studying Experience in Kyoto University: Challenges, Lessons, and Future Perspectives” 京大で学んだこと、そしてこれから」の講演をいただきました。



ジュンウィチャン氏は、タイのブーラパー大学(Burapha University)において化学工学の分野で学士号を、カセート

サート大学(Kasetsart University)で修士号を取得し、プロクター&ギャンブル社に勤務されました。その後、研究を続けたいと考え、日本の文部科学省奨学金に応募して採択され、2008年に本学の博士課程に進学されました。研究分野は、「できるだけ少ない資源



でできるだけ豊かな暮らしを提供する為にはどうしたらよいか」ということを研究しているエネルギー社会工学の石原慶一教授の研究室に進みました。留学にあたって心配したことは、大学で友人ができるか、3年間という期限内に博士号を取得できるか、研究だけの毎日に対するプレッシャー、日本人とコミュニケーションできるか、といったことだったそうで、この時のご自身の課題に答える形で講演されました。

まず、博士課程での生活は、学生の関心を尊重する石原先生や山末先生の指導の下、コースワークが2割、自主的な研究活動が8割というバランスでした。氏は、修士課程の講義や興味のある科目を自主的に受講し、自分のペースでオリジナルな研究テーマを見つけ、3年間に国内外の9つの学会大会に参加し4本の論文を発表されました。振り返ると、1年目は、オリエンテーションと実験への着手、2年目はデータの収集と論文の発表、3年目はそれらを総合した研究と学位論文の発表というステップだったそうです。

実験でネガティブな結果が出ることに不安を感じることもありましたが、科学的手法で行われたデータですから、それも研究の一部として論文の一つの章にまとめることでクリアされました。Ph.D.取得をめざす学生はまず論文のことを考



えて、勇気をもって研究室でコミュニケーションをとることが重要です。その一方、Ph.D.取得は自分のより大きなキャリアの一部であることも忘れず、ゆとりをもった休日を過ごすことも大切であると話されました。

当初の不安とは異なり、研究室ではたくさんの友人を得られたそうです。また、研究室の他にも、本学の原子炉研究所の臨界集合体実験装置でのフィールドスタディに参加し、恵まれた環境で研究活動の幅を広げることができたと感じておられます。そして、これから研究者の道を進む人へのアドバイスとして、基礎理論に関する講義力やスーパーバイザーとしての能力なども身につける必要があるとお話されました。最後に、ネットで配信されている海外の大学のオンライン教材なども利用してグローバルな動向をキャッチする一方、留学してからは「郷に入っては郷に従え」という気持ちで留学国の文化に染まってみることも大事であると強調されました。



次に、京都大学のシンガー先生より、研究者の視点から「Considering a Non-linear Approach to an Academic Life 研究者へのノンリニア・アプローチ」の講演をいただきました。シンガー先生が、初めて日本にいらしたのは1976-77年の大学生の時、京都でのホームステイや日本語研修をし、

東京大学で学ばれました。その時印象的だったのは、高崎山の猿のヒエラルキーについて観察したことで、日本社会の男性の序列社会と似ていて興味深かったそうです。

大学卒業後は、サンフランシスコでベトナム難民の定住プログラムの仕事がされました。アジアへの関心を深められた先生は、仕事で得た貯金をもとに9ヶ月間、日本、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアに行き、また難民キャンプでのボランティア活動にも従事されました。そして、アメリカに帰国し、コロンビア大学国際公共政策大学院に入学、ジャカルタの国連開発計画で4ヶ月のインターンシップを行い、国際関係学の修士号を取得されました。大学院終了後には結婚をされ、東京で12年間、新聞記者、専門誌の編集者として活躍する一方、二人のお子さんの子育てとの両立に励まれました。この時は、両立支援のシステムがまだ整備されていなかったため、とても苦労されたそうです。

京都に移られたのは、京都府出身のパートナーが府議会議員に立候補されることがきっかけでした。家族で京都に転居するため、シンガー先生は、東京での新聞記者や雑

誌編集者の仕事を中断されました。日本女性の労働市場に占める年代別統計のM字カーブを先生もご経験されたとお話されました。

そして、1995～2007年まで、先生は「議員の妻」という新しいキャリアを辿られました。地域にとけ込み「後援会」事務所や「婦人部」のマネジメントや広報活動を行い、大勢の人々を前にして日本語でスピーチをする日々を送られました。「ジャージ姿」で奔走される後援会イベントや選挙キャンペーン、支援者の「仲人」をされているシンガー先生のお写真のスライドが紹介され、会場に暖かい笑いが満ちました。

先生はお子さんが大きくなられた頃に、教育研究活動に入れ、立命館大学、京都学園大学で教鞭をとられた後、本学の教員として着任されました。現在、大学院地球環境学堂で「環境倫理学」「環境教育学」「移住と退去」「アカデミック・ライティング」などの講義を担当されています。研究では、3つの科学研究費プロジェクトに従事し、フィールド研究を行い、二冊の本を執筆されています。また、「国際環境マネジメントプログラム」の運営もされていて、オリエンテーション、院生の論文指導、委員会業務、海外での学生募集など多岐にわたるお仕事をこなされています。

先生が代表者を務められる科学研究費プロジェクト「民族性に着目したダム開発による村落移転の影響とレジリエンス評価」では、村落移転がエスニック・マイノリティに与えるインパクトについて研究されています。ダム開発によって移住をさせられる人々は世界で年間1千万人いるとされますが、センシティブな問題に様々な配慮をしながら、ベトナム中部の4つの集落について村落移転の現状と集落の再興に関するフィールド調査をされています。

そのような活動を行う研究者に必要な能力と技術には、インタビュー、分析と総合、執筆と編集、プレゼンテーションなどがあり、教員に必要なものには、物事を明確に説明し、次世代を理解する忍耐力などがあります。管理者としては、組織やイベントの運営、コミュニケーション力などが必要です。シンガー先生は、大学教員として要求され



これらの能力と技術を 15 の項目に分類し、ご自身は、これらを「記者・編集者」、「政治家の妻」、「母親」という3つのキャリアの中でそれぞれ形成されたと振り返られました。大学院からすぐ大学教員へという直線コースではなく、さまざまな仕事と役割の中で、研究者に必要とされる能力・技術を身につける「ノンリニア」なアプローチについて具体的に説明いただき、研究者のキャリアパスの多様性について学ぶ機会となりました。

お二人の講演に続いて、伊藤公雄・女性研究者支援センター推進室長の進行により、質疑応答とディスカッションを行いました。科学の分野でも、ノンリニアなキャリア形成は可能か、また、数年間、専門以外のことをして研究に戻ることは可能かといった質問がありました。

ジュンウィチャン氏は、アカデミアのほうが研究の自由度が高く自分の研究に集中することできる環境にあり、ご自身はこのまま大学で研究を続けたいと回答されました。

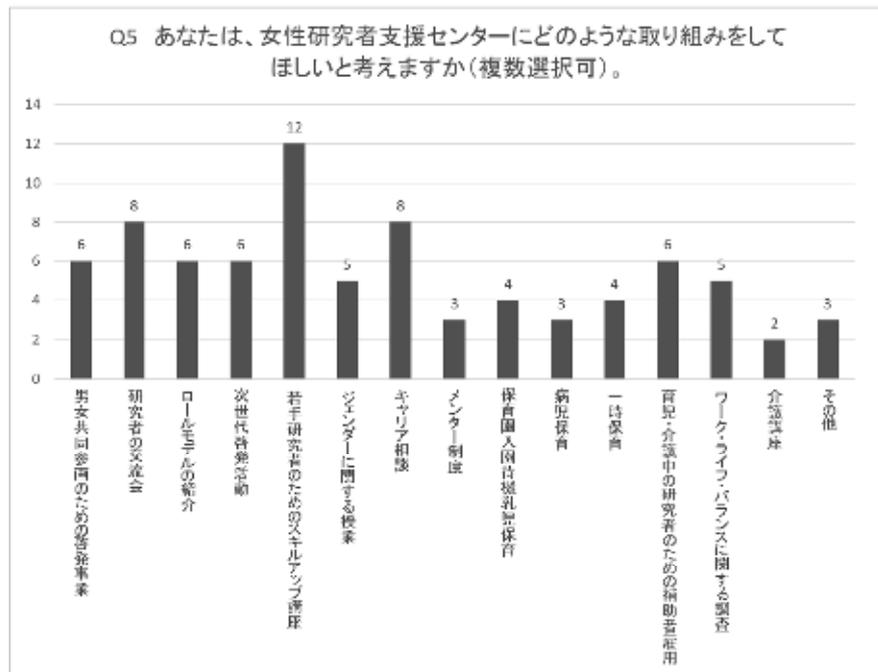
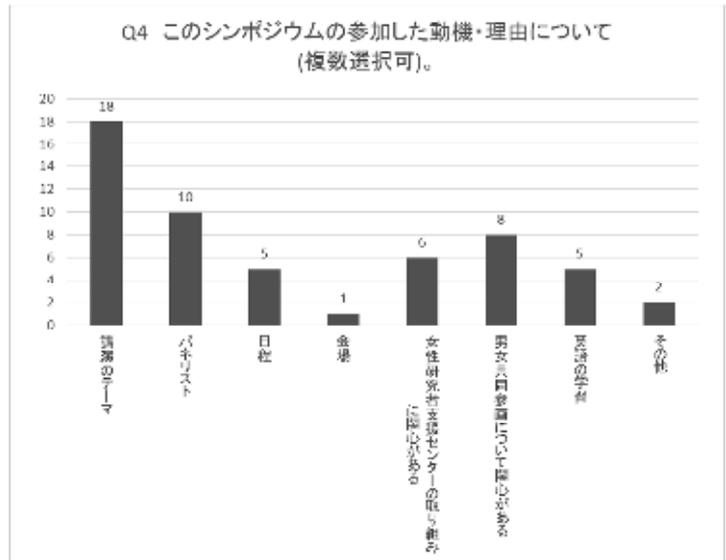
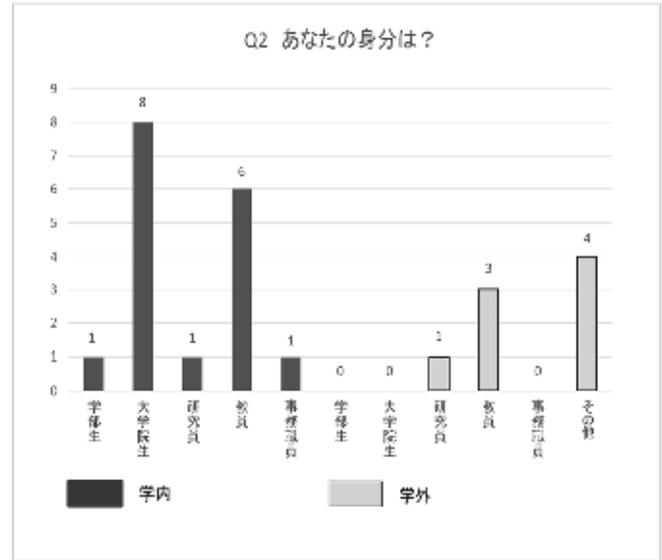
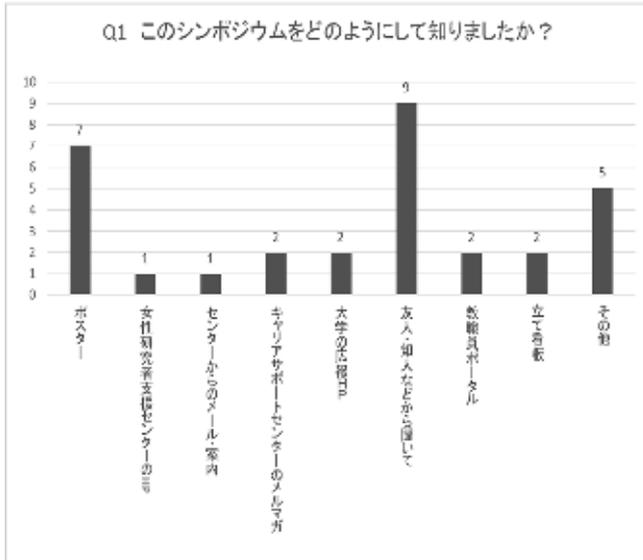


また、日本の大学で、「女性研究者であること」と「外国人研究者であること」ではどちらが大変かという質問がありました。シンガー先生は、別々に経験したことはなく、外国人研究者の場合は日本語能力や滞在期間で異なり一般化はできないが、どちらかといえば外国研究者であることより、学内に女性教員が少ない場合や、特に小さな子どもがいる場合は女性研究者であることのほうがより困難ではないかと回答されました。

女性教員であるシンガー先生を、学生はどのように捉えていると思われますか、という質問もありました。シンガー先生は、フィールドトリップなど、女性教員が引率することで、特に女子学生が安心して喜んで参加しているようだと言われました。フィールドトリップ先の環境は、時には女性には厳しく、トイレのない村に滞在することもあるそうです。メンバーに女性がいればお互いに助け合うことが出来ます。またアカデミアで女性教員が研究し、さまざまな役割を果たしている姿を示すことが、女子学生へのロールモデルとして、エンカレッジすることになるのではないかと話されました。その他にも、奨学金やポストの獲得の仕方など活発な意見交換が行われ、盛会のうちに閉会しました。



■アンケートより



国立女性教育会館国際研修プログラムに協力 「アジア太平洋における男女共同参画推進官・リーダーセミナー」

2013年10月1日「アジア太平洋における男女共同参画推進官・リーダーセミナー」(国立女性教育会館)一行が、女性研究者支援センターを視察されました。

国立女性教育会館は、開発途上国において男女共同参画の政策策定・政策提言を行う立場にある女性行政・教育担当者、NGO リーダーを対象に、女性の能力開発を目的として研修を行っています。平成25年度は、カンボジア、モンゴル、フィリピン、タイ、ベトナムから9名の女性リーダーが来日し、東京・京都で研修を受けました。

午前の楽友会館でのセミナー「日本の若い世代にとっての男女共同参画」(コーディネーター:伊藤公雄 女性研究者支援センター推進室長)に続き、センター施設の見学を行いました。

そして、犬塚典子 女性研究者支援センター特定教授が、女性研究者支援の取組みについて概要を説明しました。センターの待機乳児保育室や「グリーン・カーテン」の取組みなどについて質問も飛び交い、女性の視点での育児支援、環境問題への関心の高さがうかがえました。



七大学男女共同参画特集(学士会)に協力

2014年3月発行の学士会『U7』誌上で実施された、七大学男女共同参画特集企画に協力しました。



■病児保育室 ■待機乳児保育室 ■おむかえ保育 ■介護のつどい ■研究支援員



育児・介護中の研究者に、研究を補助する支援員を配置しています。



■女性研究者リレーエッセイ「研究者になる！」

■広報誌「たちばな」



■女子高生・車座フォーラム

「京都大学を知ろう 研究者と語る」女子高生と教員・京大生との交流会を実施しています。



■たちばな賞

「京都大学優秀女性研究者賞」優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者(研究者部門、学生部門)を顕彰しています。



■シンポジウム

キャリアデザインをテーマに、大学・研究機関・国際機関・企業等の研究者に講演をお願いしています。



京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers, Kyoto University

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
TEL 075-753-2437 FAX 075-753-2436
URL <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>



応募募集

京都大学 たちばな賞

第六回

この京都大学たちばな賞(優秀女性研究者賞)は、優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰することによって、研究意欲を高め、我が国の学術研究の将来を担う優れた女性研究者の育成を目的として創設されました。



対象

人文・社会科学又は自然科学の分野において優れた研究成果をあげた本学に所属する39歳以下(昭和49年4月2日以降生まれ)の若手の女性研究者

※ただし、出産又は子の養育及び介護のため、研究時間の確保が困難な時期が1年以上場合は、年齢制限を42歳以下(昭和46年4月2日以降生まれ)まで緩和
※なお、学生においては、受賞年度の年度末時点において、大学院博士後期課程に在学中であること。

顕彰

●たちばな賞 正賞：賞状 副賞：記念品及び賞金10万円
(研究者部門・学生部門 各1名)

●奨励賞 正賞：賞状 副賞：記念品
(該当者がいた場合のみ)



応募受付期間

平成25年11月1日(金)～12月3日(火)

【協賛】

株式会社ワコール

●応募要領などの詳細について

京都大学のHPからダウンロードしてください。 <http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/female>
お問い合わせ先：研究国際部研究推進課研究支援掛 電話：075-753-2399

第6回京都大学たちばな賞(優秀女性研究者賞)応募要領

1. 趣旨・目的

京都大学における若手の女性研究者の優れた研究成果を讃えるため、平成20年度に「たちばな賞(京都大学優秀女性研究者賞)」を創設しました。本制度は、人文・社会科学又は自然科学の各分野において、優れた研究成果を挙げた若手の女性研究者を顕彰することにより、当該若手女性研究者自身及びこれに続く多くの若手女性研究者の励みとし、ステップアップに繋がるよう研究意欲を高め、もって本学、さらには我が国の学術研究の将来を担う優れた女性研究者の育成等に資することを目的としています。

2. 応募条件

昭和49年4月2日以降生まれの本学に所属する女性の大学院生及び女性研究者(研究を職務に含んでいる者。ポストドク及び日本学術振興会特別研究員を含む。)のうち、学術上優れた研究成果を挙げたと認められる者で、以下の条件を満たす者とします。ただし、出産又は子の養育及び介護のために、研究時間の確保が困難な時期があった場合は、年齢制限を昭和46年4月2日以降生まれまで緩和することができるものとします。

【学生部門】

受賞年度の年度末時点において、大学院博士後期課程に在学中であること(医学研究科医学専攻及び薬学研究科薬学専攻にあつては博士課程、アジア・アフリカ地域研究研究科及び総合生存学館の博士課程にあつては後期に相当する課程を含む。休学中の者は除く。)

【研究者部門】

博士の学位を取得(博士の学位を取得した者と同等以上の学術研究能力を有する者を含む)していること。

3. 顕彰

受賞者は、各部門1名ずつとし、表彰状と副賞(記念品及び賞金10万円)を授与します。なお、該当者がある場合は、奨励賞を授与することがあります。

4. 提出書類

- ① 応募者リスト(様式1/Word)
- ② 応募調書(様式2/PDF)
- ③ これまでの研究の概要(様式3/PDF)
- ④ 推薦状(様式4/PDF)
- ⑤ 業績目録(A4/形式自由/PDF)
- ⑥ その他特記すべき事項(特許・書評・新聞記事などの参考資料(形式自由)/PDF)
- ⑦ 応募対象となった書籍、論文の別刷(主なもの5編以内/PDF)

上記①については、部局事務部にて作成してください。(複数名の応募者がいる場合でも、順位付けは不要です。)また、④の推薦状については、応募者の研究をよく理解している、本学に所属する常勤の研究者が作成してください。①・④以外の書類については、応募者本人が作成してください。

5. 提出方法

- (1)提出書類は、すべて、応募者の所属する部局の事務を通じてメールに添付して提出してください。
- (2)提出書類②～⑦については、PDFにして提出してください。なお、⑦については、表紙、目次及び該当部分を抜粋したPDFを提出してください。PDF fileが大容量になる場合には、大容量文書にて提出もしくはCDに焼くかUSBメモリーに入れて学内便にて提出することも可とします。

6. 応募受付期間

平成25年11月1日(金)～平成25年12月3日(火)

7. 選考及び選考結果の通知

学内に設置された選考委員会において、書面審査による第一次選考を行います。第一次選考通過者にはヒアリング審査による第二次選考を行い、受賞者を決定します。受賞決定の通知は、平成26年2月上旬頃に行い、学内外へ公表します。なお、ヒアリング審査は平成26年1月31日(金)に実施しますので、スケジュールの確保をお願いします。

また、第一次選考通過者には、決定次第、第二次選考ヒアリング審査用の資料の提出を依頼いたしますので、よろしくお願いたします。

8. 表彰式

平成26年3月3日(月)に行います。また、表彰式後に受賞対象となった研究成果の発表をしていただきます。日程等詳細については、別途、受賞者に通知します。

9. その他

- (1) 選考結果に対する問い合わせには応じかねます。
- (2) 受賞者の氏名、略歴及び受賞の対象となった研究業績等は公表されますので、予めご承知願います。
- (3) 提出書類に含まれる個人情報、厳重に管理し、本表彰の事業遂行のためのみに利用します。



第六回

京都大学

「たちばな賞」表彰式

〈受賞者による研究発表〉

たちばな賞

優秀女性研究者賞 受賞者

学生部門

片山 裕美子

(人間・環境学研究科 博士課程3年)

「グリーンフォトンクスを実現する希土類イオン
添加波長変換材料の設計と発光機構解明」

研究者部門

王 柳 蘭

(白眉センター 特定准教授)

「アジアにおける中国系ディアスポラと多多元的
共生空間の生成」

日時…2014年3月3日(月) 午前11時～12時
場所…京都大学医学部芝蘭会館 稲盛ホール

優秀女性研究者奨励賞 受賞者

学生部門

奥村 優子(文学研究科)

研究者部門

酒井 章子(生態学研究センター)

プログラム

- 11:00～11:05 開会の挨拶 吉川 潔(京都大学理事)
- 11:05～11:15 表彰式・ワコール賞贈呈
- 11:15～11:25 総長挨拶
- 11:25～11:35 来賓祝辞 安原弘展(株式会社ワコール代表取締役社長)
- 11:35～11:45 研究発表1【学生部門】片山 裕美子
- 11:45～11:55 研究発表2【研究者部門】王 柳 蘭
- 11:55～12:00 閉会の挨拶 稲葉カヨ(京都大学副学長(男女共同参画担当))

表彰式は、松本総長より、表彰状と記念楯が授与されます。
副賞として、㈱ワコール 安原代表取締役社長より、ワコール賞が授与されます。
表彰式のあと、たちばな賞受賞者による研究発表を行います。

お問い合わせ先：研究国際部研究推進課 電話 075-753-2399
URL:<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/female>



京都大学たちばな賞(優秀女性研究者賞) 受賞者略歴



【学生部門】
片山 裕美子

現 職: 人間・環境学研究科 博士課程 3年

専門分野: 無機材料化学

研究テーマ: グリーンフォトニクスを実現する希土類イオン添加波長変換材料の設計と発光機構解明

(略 歴)

2009年3月 京都大学総合人間学部 卒業

2011年3月 京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程 修了

2014年3月 京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程 修了見込み

(受賞歴)

平成 22 年度 若手研究助成奨励賞(京都大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー)

(研究概要)

環境に優しく、社会に持続性を与える光技術システム＝「グリーンフォトニクス」を実現する希土類イオン添加波長変換材料を設計し、その発光機構解明を行った。結晶シリコン太陽電池の光電変換効率を、光子数を増倍する量子切断現象によって高効率化する可能性のある希土類添加透明材料を設計した。活性希土類イオン(2種)を添加したガラスを作製し、ガラスにおいては世界で初めて量子切断現象を実験的に証明した。さらに、ガラス中にナノスケールのフッ化物結晶を析出させることで、材料の透明性を維持したまま波長変換効率を向上させることに成功した。また、太陽光の有効利用の方法として、材料作製に太陽光を用い蓄光材料の光機能性の向上を試みた。フレネルレンズを用いて太陽光を集光し 2000℃の高温を得る太陽炉を作製し、これを用いて、励起光遮断後も長時間光り続ける赤色長残光蛍光体を作製し、その残光特性向上を実現した。



【研究者部門】
王 柳蘭

現 職: 白眉センター(地域研究統合情報センター) 特定准教授

専門分野: 文化人類学・地域研究

研究テーマ: アジアにおける中国系ディアスポラと多元的共生空間の生成

(略 歴)

1994年3月 神戸女学院大学文学部英文学科 卒業

1996年3月 京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程 修了

2003年11月 京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程 退学

2003年12月 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 助教

2009年4月 日本学術振興会特別研究員 RPD

2013年4月 現職

(受賞歴)

第1回(2011年度)地域研究コンソーシアム登竜賞

(研究概要)

国境とは不思議なものである。国家にとっては管理すべき場であり主権を維持し、主張する場である。しかし民衆の目からみれば、国境地帯は、政府の管理が行き届かないその隙間を狙って、自らが主体的な領域を形成することを可能にするフロンティアでもある。タイとミャンマーの国境線にすむ中国生まれのムスリムは、国境のもつフロンティア的側面を自らの手で開拓してきた。度重なる国際情勢の変化や戦乱の影響に主体的に応答し、文化や宗教を軸にしたソフトパワーを戦略的に使い分け、他者と文化的、社会的な交渉を試み、イスラームと華人性を維持し、異境のなかにあっても自らの拠り所、文化的宗教的に回帰できる空間を再デザインしてきた。フィールドワークによる越境研究の魅力は、複数の民族が混住し、民族相互の葛藤やあらたな社会関係の創出過程、国家の枠組を組み替える「下からの共生」の力学を現場から抽出できることにある。

優秀女性研究者奨励賞 受賞者略歴



【学生部門】
奥村 優子

現 職: 文学研究科 博士課程 3 年
専門分野: 発達心理学
研究テーマ: 乳児期初期における社会的学習メカニズムの解明

(略 歴)

2008 年 3 月 京都大学文学部 卒業
2011 年 3 月 京都大学大学院文学研究科修士課程 修了
2014 年 3 月 京都大学大学院文学研究科博士課程 研究指導認定見込み

(受賞歴)

2011 年 11 月 関西心理学会第 123 回大会 研究奨励賞
2012 年 10 月 関西心理学会第 124 回大会 研究奨励賞

(研究概要)

乳児は情報に満ちあふれた環境の中から、驚くべき速さで、そして効率的に世界の仕組みを学習します。どのようにして、乳児は複雑な世界から有益な情報を獲得していくのでしょうか。私たちの研究グループでは、乳児にヒトとヒト以外のエージェント(ロボット)が視線を対象物に向ける映像刺激を見せ、それらに対する乳児の反応を分析することによって、乳児がどのような他者によって与えられる情報に着目し、学習を行っているかの検証を進めてきました。その結果、乳児はヒトから特異的に学習することがわかり、ヒトからの学習の効率性や有用性を明らかにしました。また、乳児はヒトの中においても、自身の養育環境の言語(方言)を話す他者から選択的な情報獲得を行うという結果も得られています。このような乳児の学習方略が、社会的学習場面において乳児が効果的に情報を獲得することを可能にし、文化的学習の基礎として働いているのかもしれない。



【研究者部門】
酒井 章子

現 職: 生態学研究センター 准教授
専門分野: 生態学
研究テーマ: 植物の繁殖生態学

(略 歴)

1994 年 3 月 京都大学理学部 卒業
1996 年 3 月 京都大学大学院理学研究科修士課程 修了
1999 年 3 月 京都大学大学院理学研究科博士課程 修了
1999 年 4 月 日本学術振興会海外特別研究員
2001 年 4 月 日本学術振興会特別研究員 PD
2003 年 1 月 筑波大学生物科学系 講師
2004 年 3 月 京都大学生態学研究センター 助教授
2007 年 4 月 京都大学生態学研究センター 准教授
2008 年 4 月 総合地球環境学研究所 准教授

2013 年 4 月 現職

(受賞歴)

2001 年 第 5 回日本生態学会 宮地賞
2011 年 第 19 回松下幸之助 花の万博記念奨励賞

(研究概要)

(1) 一斉開花: 東南アジアのフタバガキ林では、一斉開花と呼ばれる数年周期の「季節」が知られています。数年に一度、さまざまな植物が次々と開花し、それ以外のときにはほとんど開花しないのです。この現象を調べるため、1992 年からボルネオ島のランピルで国際共同研究が行われてきました。これまで、一斉開花にはほとんどの植物が参加すること、乾燥が開花の引き金であること、さまざまな動物が影響をうけることなどがわかってきました。

(2) 植物と送粉者の関係: 動くことのできない植物は、繁殖相手との遺伝子交換を果たすため、蜜を分泌して送粉者と呼ばれる昆虫を呼び、花粉を運んでもらいます。この取り引きは、いつもうまくいくとは限りません。植物が昆虫を騙したり、植物と送粉者の間に菌が介在したり、といった熱帯林に特殊な関係を調べ、両者の関係の進化・維持に関わる要因を明らかにしてきました。

ポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」

ジェンダーや性差についての学生の知識・理解を深めるために、自然科学と人文・社会科学の両面から講義を提供しています。ポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」は、新入生のみを対象としオムニバス形式でゼミを行っています。

| 回 | 月・日 | 講師 | テーマ |
|------|-------|-----------------------|---------------------------|
| 第1回 | 4月16日 | 伊藤 公雄(文学研究科) | ポケゼミの目的について、ジェンダー研究の歴史と意義 |
| 第2回 | 4月23日 | 奥田 昇(生態学研究センター) | 動物の性差と性淘汰 |
| 第3回 | 4月30日 | 〃 | 動物の子育てと雌雄の対立 |
| 第4回 | 5月7日 | 速水 洋子(東南アジア研究所) | ジェンダーと文化人類学 |
| 第5回 | 5月14日 | 塩田 浩平(思修館) | 性の決定メカニズムについて |
| 第6回 | 5月21日 | 瀬木(西田)恵里(薬学研究科) | 身体の性と脳の性(1) |
| 第7回 | 5月28日 | 〃 | 身体の性と脳の性(2)ーディスカッションー |
| 第8回 | 6月4日 | 栗屋 智就(医学部附属病院) | 脳の発達と性差 |
| 第9回 | 6月11日 | 田中 雅一(人文科学研究科) | セクシュアリティと文化人類学 |
| 第10回 | 6月25日 | 犬塚 典子(女性研究者支援センター) | ジェンダーと教育 |
| 第11回 | 7月2日 | 犬塚 典子(女性研究者支援センター) | 科学政策における男女共同参画 |
| 第12回 | 7月9日 | 帯谷 知可(地域研究統合情報センター) | 中央アジアの女性解放運動 |
| 第13回 | 7月16日 | 近藤 史(アジア・アフリカ地域研究研究科) | アフリカ女性の生き方から学ぶ |
| 第14回 | 7月23日 | 伊藤 公雄(文学研究科) | 総合討論 |
| 第15回 | 7月30日 | 〃 | まとめ |

火曜日 5限(16時30分～18時)



全学共通科目
「性差を科学する (I)」
「性差を科学する (II)」

性とジェンダーについての系統的な学習に主眼を置き、学部生を対象とする講義を行っています。前期の「性差を科学する (I)」は、伊藤公雄文学研究科教授による、人文社会科学的な面からのジェンダーについての講義です。後期の「性差を科学する (II)」は、全学の先生の協力を得てオムニバス形式で、主に自然科学の視点から医学的な面も含んだ性とジェンダーについての講義を提供しています。



(1)「性差を科学する (I)」

| 回(月・日) | 講師 | テーマ |
|-----------------------|--------------|--|
| 第1回(4月9日)～第15回(7月23日) | 伊藤 公雄(文学研究科) | 現在、自然科学分野も含めてさまざまな学術分野で重要な概念として使用されつつあるジェンダーについて、人文社会科学の視点から考察することを通して、ジェンダーに敏感な視点を養う。ヴィジュアルイメージ教材を用い、文化、歴史、人権問題、労働、スポーツ、セクシュアリティ、国際化とジェンダーについて学ぶ。 |

火曜 4 限(14 時 45 分～16 時 15 分)、吉田南 4 号館 4 共 21 にて

(2)「性差を科学する (II)」

| 回 | 月・日 | 講師 | テーマ |
|--------|-----------|-----------------------|---------------------------------|
| 第 1 回 | 10 月 1 日 | 伊藤 公雄(文学研究科) | オリエンテーション |
| 第 2 回 | 10 月 8 日 | 森 哲(理学研究科) | 動物の行動—性淘汰と性的二型 |
| 第 3 回 | 10 月 22 日 | 疋田 努(理学研究科) | 爬虫類の性と繁殖 |
| 第 4 回 | 10 月 29 日 | 林 美里(霊長類研究所) | 比較認知科学—チンパンジーとヒトと性差 |
| 第 5 回 | 11 月 5 日 | 川北 篤(生態学研究センター) | 植物における性の多様化と進化 |
| 第 6 回 | 11 月 12 日 | 奥田 昇(生態学研究センター) | 魚類の性転換 |
| 第 7 回 | 11 月 19 日 | 〃 | 魚類における子育てと性役割 |
| 第 8 回 | 11 月 26 日 | 栗屋 智就(医学部附属病院) | 脳の発達と性差 |
| 第 9 回 | 12 月 3 日 | 稲葉 カヨ(生命科学研究科) | 免疫反応、免疫疾患から見た性差 |
| 第 10 回 | 12 月 10 日 | 林 晶子(医・集学的がん診療学・寄附講座) | 女性に多い摂食障害について医学的、医療人類学的視点から |
| 第 11 回 | 12 月 17 日 | 加藤 寿宏(医学研究科) | 子どもの発達の性差について—自閉症スペクトラム児を通して考える |
| 第 12 回 | 1 月 7 日 | 小西 郁生(医学研究科) | 子宮頸癌からヒトの性の進化を探る |
| 第 13 回 | 1 月 14 日 | 菅沼 信彦(医学研究科) | インターセックスの診断と治療—婦人科医の立場から |
| 第 14 回 | 1 月 21 日 | 富樫 かおり(医学研究科) | 子宮をMR画像でみる |
| 第 15 回 | 1 月 28 日 | 伊藤 公雄(文学研究科) | まとめ—性差を科学する |

火曜日 4 限(14 時 45 分～16 時 15 分)、吉田南総合館(北棟)共北 25 にて

女子高生・車座フォーラム2013

京都大学を知ろう 研究者と語ろう

京都大学の受験を目指す女子高校生の皆さん!

受験の前に京大の教育・研究を知り、

研究者や大学院生・学部学生と話をしませんか?

日 程

2013年12月15日(日)

時 間

10:00~16:30

参加費
無料

会 場

●京都大学芝蘭会館、他

募集定員 女子高校生80名程度(先着順)・保護者40名程度

申し込み方法

女性研究者支援センターホームページ
(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>)をご覧いただき、
11月15日(金)までに申し込みください。

【申し込み、問い合わせ先】

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
京都大学女性研究者支援センター
「女子高生・車座フォーラム2013」担当係
メールアドレス:w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
TEL:075-753-2437

URL:<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

●主催:京都大学女性研究者支援センター



講師・グループ・会場

| G | 氏名 | 所属 | 研究分野 | 会場 |
|---|--------|-------------|---------------------|-------------|
| 1 | 伊藤 公雄 | 文学研究科 | 文化社会学、メディア研究、ジェンダー論 | 別館2階 研修室1 |
| 2 | 犬塚 典子 | 女性研究者支援センター | 教育行政学 | 女性研究者支援センター |
| 3 | 常見 俊直 | 理学研究科 | 素粒子物理学 | 別館2階 研修室2 |
| 4 | 栗屋 智就 | 医学部附属病院 | 小児神経学、発生生物学 | 本館2階 山内ホール |
| 5 | 矢野 育子 | 薬学研究科 | 医療薬学 | 別館地階 会議室 |
| 6 | 山肩 洋子 | 情報学研究科 | マルチメディア情報処理 | 別館1階 和室1 |
| 7 | 落合 久美子 | 農学研究科 | 植物栄養学、土壌学 | G棟セミナー室1 |
| 8 | 工藤 春代 | 農学研究科 | 農業経済学 | G棟セミナー室2 |
| 9 | 稲葉 カヨ | 生命科学研究科 | 免疫学 | G棟セミナー室3 |

学生スタッフ

| G | 氏名 | 所属 |
|---|--------|------------|
| 1 | 下原 直緒 | 文学部 |
| | 澤崎 拓真 | 文学部 |
| | 富野 瑞葉 | 法学部 |
| 2 | 改森 実奈 | 法学部 |
| | 及川 陽太 | 経済学部 |
| | 鈴木 慎介 | 文学部 |
| 3 | 半場 悠 | 理学部 |
| | 渡邊 達彦 | 理学部 |
| 4 | 西尾 周朗 | 医学部 |
| | 野原 静華 | 医学部 |
| 5 | 高見 理沙 | 薬学部 |
| | 土橋 泰成 | 法学部 |
| 6 | 秋津 裕 | エネルギー科学研究科 |
| | 福富 雄一 | 理学部 |
| | 井上 史嵐 | 経済学部 |
| 7 | 香月 和敬 | 農学部 |
| | 磯田 珠奈子 | 理学部 |
| 8 | 柘植 仁美 | 農学部 |
| | 中野 さゆり | 医学部 |
| | 菊地 淳彦 | 経済学部 |
| 9 | 向平 妃沙 | 医学部 |
| | 金岡 歩美 | 理学部 |

プログラム

| | |
|-------------|---------------------------------|
| 10:15-10:25 | 開会の挨拶(副学長 稲葉カヨ) |
| 10:25-10:45 | 京大生の学生生活(理事 赤松明彦) |
| 10:45-11:15 | 自分の未来をデザインする (教育学研究科教授 鈴木晶子) |
| 11:15-11:45 | 講師紹介、グループ討論用質問用紙記入 |
| 11:45-13:00 | 昼休憩 |
| 13:00-14:30 | 【高校生】グループ討論 【保護者】キャンパスツアー |
| 14:30-14:45 | 全体会場へ移動、全体会用質問用紙記入 |
| 14:45-16:05 | 全体での話し合い |
| 16:05-16:30 | アンケート記入・回収 |



京都大学を知ろう 研究者と語ろう

研究者や科学者の仕事を知ってもらおうと、12月15日(日)に、「女子高生・車座フォーラム 2013」を開催しました。



女性研究者支援センターでは、このフォーラムを年1回実施しており、今回で8回目となりました。

犬塚 典子・女性研究者支援センター特任教授による司会進行のもと、はじめに、稲葉 カヨ・副学長より、開会の挨拶がありました。

稲葉先生よりは、女性研究者支援センターが2006年に設立された経緯や、最初は、小規模に実施していた車座フォーラムを、規模を拡大して実施するようになったことの説明などがありました。



先生は、植物学を専攻したいと理学部に入学されましたが、大学院に進学されるときに、動物学教室に移られました。そして、現在のご研究分野は免疫学です。このように、大学で学び、研究を進めていく中で、やりたいことが変わってくることもあると、ご自身の研究を例に紹介されました。

そして、女子高生に向けて、「Girls, be ambitious!」「チャレンジして失敗しても、それは経験である。成長こそが、あなた方の目的である。」との言葉を贈られ、近い将来、このキャンパスで会える日を楽しみにしていると、話されました。



次に、赤松 明彦・学生・図書館担当理事・副学長より、「京大生の学生生活」についての講演がありました。

まず、京都大学の基本理念について、大きく2点の説明がありました。

1つ目は、「対話を根幹とした自学自習」です。自分の意見も言う。他人の意見も聞く。そして自ら学ぶという意味で、理事も好きな言葉だそうです。2つ目は、「地球社会の調和ある共存に寄与する」です。地球上には、人間だけでなく、多くの動植物が生きていることを認識し、環境に配慮しながら、共存していくための学問を



追究する、という願いが込められています。

京都大学に入学した学生は、教養科目である全学共通科目と専門科目である学部科目を履修します。

理事よりは、本学で特徴的な、「ポケット・ゼミ」と呼ばれる少人数制のゼミの紹介がありました。さらに、「ジョン万プログラム」など留学のためのシステムも用意して、海外の大学と協力して、優れた教育を行っていることも紹介されました。

また、学問の面だけでなく、学生生活を支援するキャリアサポートルーム、カウンセリングルーム、障害学生支援ルームなどを設置していること、芸術鑑賞の機会を用意していることなどが話されました。

学生は、自主的に種々のクラブ活動やサークル活動を行っていることにも触れ、「京都大学で充実した学生生活を送られることを願っています。」と参加者にメッセージを贈られました。

続いて、鈴木 晶子・教育学研究科 教授より「自分の未来をデザインする」の講演がありました。

はじめに、鈴木先生より参加者にいくつかの質問が投げかけられました。

参加者の中には、文系・理系の別だけでなく、入学を希望する学部が、明確に決まっている人もいれば、まだまだ迷っている人もありました。先生からは、「大いに迷って下さい」とのお言葉がありました。なぜならば、研究には、文系・理系の区別なく、多くの分野の方々と関わることが必要だからです。どの学部に入るか、文系・理系を選択するか、というのは、学問への入り口でしかなく、凝り固まっては、ユニークな研究ができないからだと思います。



先生は、高校生の時から、研究者志望だったそうです。人の集中力が日によって違うことが不思議であったこと、「ひらめき」が人に訪れる仕組みを考えたいと思ったとき、医学、心理学、哲学など、どの学問で学ぶべきか迷ったそうです。大学院生時代にドイツのケルン大学に留学し、学問を進める中で、「人の意識が、どのようにして、人を成長させるのか」を教育哲学という視点から研究することに興味を持ったそうです。

女性が研究職という専門職を続けるためには、結婚や出産・育児、親の介護など、様々な事象に出会いますが、ここでは、研究を続けていくための環境を整えるというマネジメント能力も求められます。先生は、協力者を持つこともマネジメント力の一つであると話され、自分の応援団を持つために、何が必要で、何をしなくてはならないか、考えてみましょうと話されました。

最後に、参加者に向けて、「自分たちには未来をデザインする力があると認識し、自分の心の中に流れている時間の質を高めましょう。才能は愛でることで、伸ばすことができるのだから、そのための意識を育てましょう。そして、皆さんとこのキャンパスで、様々な議論ができる日を心待ちにしている」とのメッセージをいただきました。

講演後は、午後のグループ討論に向けて、講師とアシスタントの学生の紹介を行いました。



昼休憩後、高校生は、グループ討論会場に移動し、9グループに分かれて、討論を行いました。グループ討論では、講師から、研究と育児の両立のために、時間の使い方を工夫する能力が増したという話や、研究を続けていて良かったと感じたときの話を聞いたり、学生スタッフから、受験勉強の方法や、受験学部の選択、講義の様子を聞いたりしました。高校生がグループ討論に参加している間、保護者は、学生ガイドの案内で、キャンパスツアーに参加し、京都大学の施設や、博物館の見学をしました。

グループ討論の後には、もう一度全員が集まり、伊藤 公

雄・女性研究者支援センター推進室長の司会で、全体会を行いました。まず、アシスタントの学生より各グループの討論内容について発表を行い、講師が高校生からの質問に答える形でまとめを行いました。



自分のやりたい学問は、どの学部に行けば、できるのか知りたいということに対しては、方法は複数あるので、学問を進めていく中で、研究の方向性や、研究環境を選んでいけばよい、ということが確認されました。



女性研究者に向けて、なぜ研究者になったのか、女性であるがゆえに困ったことは何か、という質問もありました。研究者を目指して学問を続けてきたというより、好きなこと、やりたいことを「もうちょっと」と続けているうちに、今の状況になったという回答が多数でした。研究者カップルは別居婚が多く、子どもがいると、パートナーや、親、周囲の協力が、より必要になってきますが、価値観を共有できるパートナー探し、ポイントになるようです。親から「娘に養ってもらうつもりはない」と言われ、自由に研究を続けられたのは、女性ゆえのメリットだったと思う、という意見もありました。

また、男性研究者に向けて、女性が育児や家事で研究を中断しなくてはならない状況をどう思うか、女性研究者は、男性からどう見えるか、という質問もありました。両立している女性は、時間の使い方がうまく、協力者に恵まれ、環境を整える力があるように思うとの回答がありました。やはり、お互いのライフスタイルを理解し合えるパートナーを選ぶことが必要なようです。

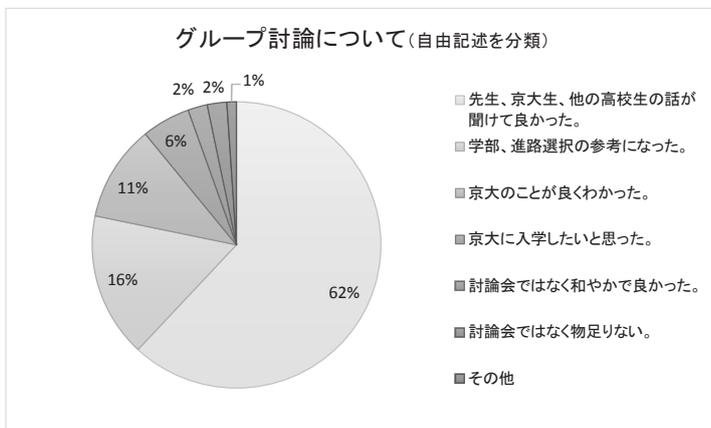
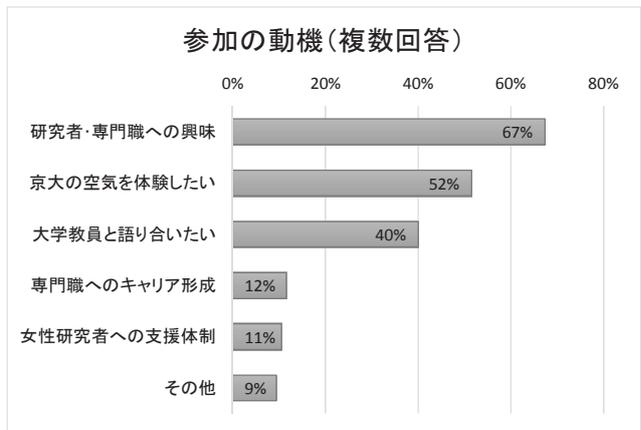
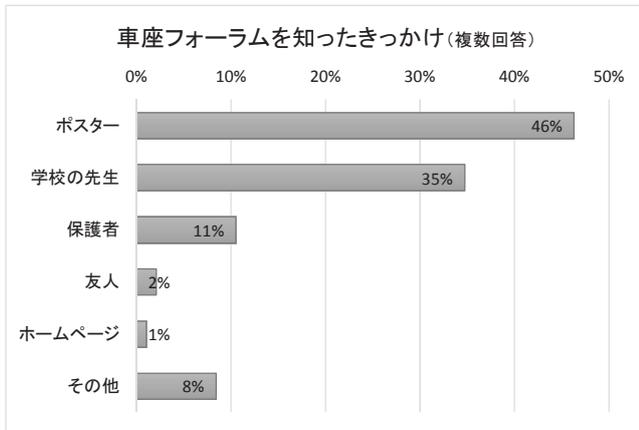
最後に、京都大学では、まだまだ女性研究者が少ないのですが、もっと、女性が活躍できる場に行きたいとの抱負が述べられました。

■グループ討論の様子



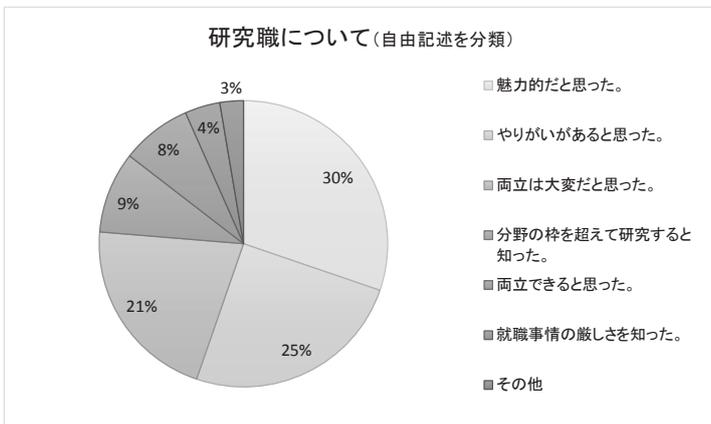
■参加者アンケートより

参加した高校生が「車座フォーラム」を知ったきっかけは、46%が「ポスター」、35%が「学校の先生」、11%が「保護者」と回答しています。また、参加の動機では、「研究者・専門職への興味」(67%)、「京大の空気を体験したい」(52%)、「大学教員と語り合いたい」(40%)となっています。



グループ討論については、「先生・京大生・他の高校生の話が聞けて良かった」(62%)という感想が最も多く、続いて、「学部、進路選択の参考になった」(16%)、「京大のことが良くわかった」(11%)となっており、「京大に入学したいと思った」(6%)という回答もありました。

研究職については、「魅力的だと思った」(30%)、「やりがいがあると思った」(25%)という声が多く寄せられました。その他、「分野の枠を超えて研究すると知った」(9%)、「就職事情の厳しさを知った」(4%)という意見もありました。また、仕事と家庭の両立については、大変だと思ったという回答も、両立できると思ったという回答もありました。フォーラムを通して、現実社会の中で、研究職を理解する視点を示すことができたこと、高校生が仕事と家庭の両立について考える機会を提供できたことが伺えます。

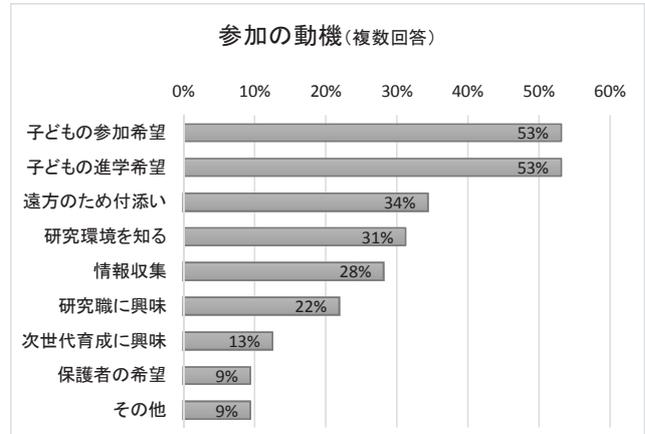
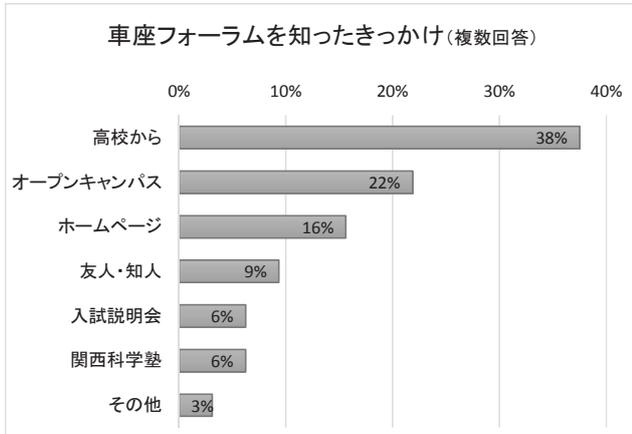


フォーラム全体に関する感想では、全体会の時間を短くしてでも、グループ討論の時間を長くして欲しい、午前中にも研究の話をして欲しいという意見もあり、研究職について、もっと知りたいという要望があることがわかりました。

また、京大までの移動時間が必要なことから、短時間の企画への変更要望や、翌日が高校休校となる日に開催して欲しいという声もあがりました。

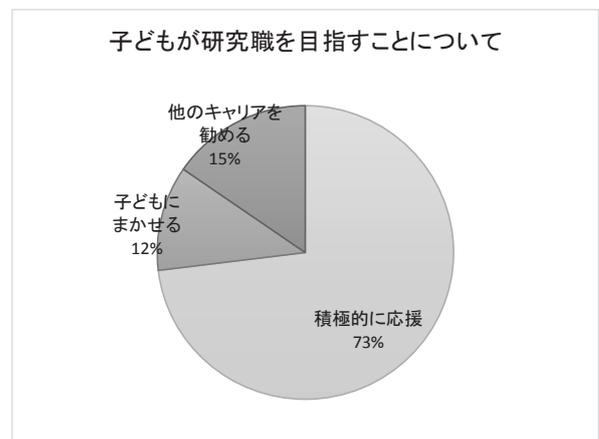
■保護者アンケートより

保護者が「車座フォーラム」を知ったきっかけは、「高校から」(38%)、「オープンキャンパス」(22%)、「ホームページ」(16%)となっています。また、参加の動機では、「子どもの参加希望」(53%)、「子どもの進学希望」(53%)となっており、「遠方のため付添い」(34%)という回答も多く寄せられました。京都大学の受験予定については、81%が「第一希望」、11%が「受験候補」と回答していることと合わせ、高校生の意思を受けて、保護者が協力参加していることがわかります。



子どもが研究職を目指すことについては、「積極的に応援」(73%)、「子どもにまかせる」(12%)、「他のキャリアを勧める」(15%)となっており、多くの保護者が研究職を目指す子どもを応援していることがわかります。

保護者向け企画のキャンパスツアーについては、「このままで良い」(73%)、「改善を希望」(15%)との回答がありました。感想では、ガイド役の京大生に、受験勉強や大学生活のことを聞くことができたことへの感謝の声が多く寄せられました。改善点としては、子どもが進学を希望する学部のある場所を見学したい、ガイド学生に直接質問したいという希望がありました。また、子どもにも、キャンパスツアーに参加させてあげたいという声もありました。



フォーラム全体に関する感想では、入試説明会では聞くことのできない、女性研究者の生の声を聞くことができ良かったということや、遠方からの参加であるため、終了時間を早めて欲しい、翌日が高校休校となる日に開催して欲しいという要望が寄せられました。



Kyoto University Junior Campus 2013

京都大学 ジュニア キャンパス 2013

ひらけ！
好奇心の玉手箱

日時 2013 (平成25) 年
9/14 (土)
15 (日)

会場 京都大学吉田キャンパス、宇治キャンパス、
桂キャンパス 他
(各講義室 実験室 実習室 研究室)

プログラム 特別講義、中学生向けゼミ、若手研究者特別ゼミ、
大学院生等によるオスターセッション、特別協賛ゼミ

参加資格 京都市及びその近郊の中学生
(その保護者や教諭等も参加できます。)

参加費 中学生：3,000円、保護者等：3,000円
※全プログラムの参加でも一部のみの参加でも同額です。

参加定員 中学生約 250名、保護者等を含め約 400名

申込方法 パンフレットに折り込んである「参加申込書」(京都大学ホームページ最新
の「参加申込書」の利用も可)に必要事項を記入のうえ、個人単位でお申し
込みください。(郵送のみ、学校単位でのお申し込みはご遠慮ください。)

申込締切 2013年 8月 9日 (金)
申込先 〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学学務部教務総務課「ジュニアキャンパス担当係」
※応募者が多数の場合、希望が叶えられないことがあります。
また、電話での申込受付はいたしません。

主催 京都大学 共催 京都市教育委員会

京都大学学務部教務総務課ジュニアキャンパス担当

TEL 075-753-2548

※詳細はホームページにも掲載しています。

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education/open/junior.htm>

大学生と語るジェンダー(「男らしさ」「女らしさ」などの社会的性別)

日時 平成25年9月14日(土) 14:30~16:00

場所 京都大学女性研究者支援センター

参加者 京都市およびその近郊の中学生

今年度も、京都市教育委員会との共催で、「京都大学ジュニアキャンパス」が開催されました。本事業は、中学生の皆さんに、学問の最先端を研究している現場に触れて、楽しさや面白さを感じてもらい、自分の興味のあることを深め、将来学びたいことを考えるきっかけを作ってもらうことをめざしています。今年度のテーマは、「ひらけ！ 好奇心の玉手箱」です。法律、言語、理学、工学、医学など様々な分野から、実験、工作、自然観察といった体験型の授業や討論を通じた授業などが行われました。

女性研究者支援センターは、伊藤 公雄教授(文学研究科)と、センターのポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」の受講生4名(文、法、経済、農学部生)が講師となり、ゼミ「大学生と語るジェンダー(「男らしさ」「女らしさ」などの社会的性別)」を実施しました。ゼミには、女子4名、男子4名の中学生が参加しました。名古屋市や倉敷市など近畿以外からの参加もありました。

はじめに、伊藤公雄先生から、女性研究者支援センターの沿革や目的について説明がありました。そして、待機乳児保育室を見学した後、一度外に出て、センターの外周をみんなで散策しました。現在、女性研究者支援センターは、建替工事のため、橘会館で活動しています。橘会館は、1911年に竣工された旧帝国大学総長官舎を改築した古い日本家屋風の施設です。庭には聖護院の森のなごりで、建屋よりさらに古い樹木が茂っています。今年度は、ワークショップも和室で行い、中学生に、より京都らしい雰囲気を感じてもらおうことが出来ました。

まず、緊張感をほぐすために、アイス・ブレイクを行いました。身振り手振りだけで意思疎通を行い、1月1日から誕生日順に並ぶアクティビティをしました。はじめて出会う中学生と大学生ですが、あっという間に打ち解けて、すぐ並ぶことができました。

自己紹介をして、なごやかな雰囲気になった後、「ジェンダー」という言葉の意味について、大学生から簡単な講義をしました。そして、2グループにわかれ、ワークショップ「メディアのなかのジェンダー」を行いました。雑誌のなかの女性像/男性像を切り抜き、模造紙に貼りつけ、完成した作品を壁に貼り、男女の表現のされ方の違いについて観察・発見したことを記録し、グループごとに討論しました。

次に、子供向けテレビ番組のキャラクターにみる男性・女性キャラクターの登場回数や特徴などを分析し意見交換しました。「アンパンマン」の大ファンで、各キャラクターに詳しい2人の女子中学生が活発な進行係になり、楽しい話題提供のもと討論が行われました。

最後は、2~3人の小グループになって、受験や進路、キャンパス・ライフなどについて中学生から質問を受けました。「特に問題意識を感じていないので、ジェンダーを勉強する意味がわからない」という質問には、農学部2年生が、「今、自分にとっては問題がなくても、ジェンダーについての問題は世界のあらゆる場面にあることなので、在学中に学んでおけば、将来役立つのではないかと」回答しました。他にも「科学研究もしたいし、企業にも行きたいがどうしたらよいか」、「女子学生で一人暮らしをしている人はいるのか」、「どうやったら勉強中の集中力を高めることができるか」などさまざまな質問がありました。大学生も過去の自分を振り返り、互いに有意義なワークショップとなりました。



第8回 女子中高生のための 関西科学塾

独立行政法人科学技術振興機構
女子中高生の理系進路選択支援プログラム

<http://kagaku-juku.jp/>



仮打ちといっしょでも、
ひとりで大丈夫!

行ってみようよ。カ・ガ・クの時間。

理科や実験が好きな女子はもちろん、文系が理系が迷っている人も大歓迎! あなたの好奇心をお待ちしています。

参加者
募集

プログラム



2013年6月9日(日) 10:00-16:00

開会式、講演会、現役大学生との
グループトークなど 京都大学



昇学の別場で活躍されている女性研究者の講演や、
ノーベル賞受賞者による座談会で科学の魅力を聞いてみよう。

2013年9月23日(月・祝)

ノーベル賞受賞者による座談会、グループワークなど
コングレコンベンションセンター (JR 大阪駅すぐ)



2013年10月20日(日) 午後

実験 大阪大学 (高校生)
大阪府立大学 (中学生)



2013年11月9日(土) (予定)

見学会 けいはんな学研都市の研究所
けいはんなの女性研究者との交流会



2013年11月17日(日) 午後

実験 神戸大学 (高校生)
奈良女子大学 (中学生、高校生)



2014年3月15日(土)・16日(日)

実験・発表会、進路相談、交流会、表彰式、開会式
京都大学 (京都トラベラーズ・イン泊)

見学

熊本女子の科学
研究所で実際に先生と
体験したりできます。

発表



「卵から体ができあがるしくみ」

京都大学 高橋 淑子教授

動物の体はどのように作られるのでしょうか?もとは
たった一つの受精卵。それが細胞分裂を繰り返すうち、
ふと気がつくと、心臓や脳みそ、そして手足が順がで
きているのです。体作りのためにせっせと働く「細胞
のドラマ」をご紹介します。



知と学びのサミット

「個性が育むサイエンス—ノーベル賞受賞者が語る」

日本が誇るノーベル賞受賞者である、下村 脩 博士と益川 敏英
博士をお招きし、サイエンスの魅力を語ってもらう講演会です。
ノーベル賞に至った業績の原点は、豊かな個性や自然に対する強い
好奇心にありました。両博士から若者へのメッセージ「ノーベル
賞は「夢」じゃない!」

参加申込みと問い合わせ

ウェブサイト: ホームページの「第8回関西科学塾申込みフォーム」から
FAX: 裏面の参加申込書(ホームページからもダウンロードできます)を送信
E-mail: 申込書の必要事項をきれなく転記し、件名を「科学塾申込」として

京都大学理学研究科社会交流室 関西科学塾運営事務局

URL: <http://kagaku-juku.jp> (最新情報をご覧いただけます)

FAX: 075-753-3645

E-mail: juku@cr.sci.kyoto-u.ac.jp

●受付後、折り返し日程や場所の詳細を
ご連絡します。

申込み締切 5月31日(金) 必着

定員: 120名(先着順)

*同伴者は、参加者の保護者または引率職員の方

参加費: A~Eは無料

Fのみ5,565円(宿泊・朝食)

*夕食代は、別途各自負担

主催: 京都大学科学塾・関西科学塾

共催: 京都大学女性研究者支援センター、神戸大学男女共同参画推進室、大阪大学女性共同参画推進ナ
ット、奈良女子大学男女共同参画推進機構、大阪府立大学、NPO 法人山梨県ネットワーク、
株式会社資生堂、日本理化学会

協力: 関西科学塾中核支援機関/日本女子科学会、日本理化学会、日本教育協会/日本教育学会
後援: 京都府教育委員会、他4団体

*本誌は独立行政法人科学技術振興機構女子中高生の理系進路選択支援プログラムの受託事業です

女子中高生のための関西科学塾 JST 女子中高生の理系進路選択支援プログラム

女子中高生のための関西科学塾は、文部科学省関連の法人、科学技術振興機構の「女子中高生の理系進路選択支援事業」から助成を受けて行われる、科学実験教室や講演会を主体としたイベントです。より多くの女子中高生が、理系の進路に興味を持ち、将来理系の職業を選ぶことを目的に開催しています。毎年関西の大学が持ち回りで主管校になり行われ

ています。今年度は、京都大学を幹事校として、関西の大学や研究機関等で開催しました。

2013年6月9日(日)、京都大学にて、開会式が行われました。参加者は、女性研究者の講演を聞き、京大生とともにグループトークを行いました。

A 京都大学(6月9日)のプログラム

- 10:00 開会あいさつ 常見 俊直 実行委員長
(京都大学理学部・理学研究科 社会交流室 講師)
- 10:15- 講演 「卵から体ができあがるしくみ」
高橋 淑子 教授(京都大学理学部・理学研究科)
- 11:15- 〈C〉日程実験テーマの班分けについてお知らせ
- 11:25- — お昼休み —
- 12:30- 〈C〉日程実験テーマの班分け
- 13:00- グループトーク
“理系大学生と一緒に語り合おう”
- 13:45- グループコミュニケーション
”アイデアと力を出し合って競ってみよう”
- 15:00- 全体会
- 15:50- 閉会あいさつ・事務連絡



ノーベル賞受賞者による座談会



9月23日(月・祝)には、JR大阪駅近くのコングレコンベンションセンターにて、第2回のプログラムが開催され、関西科学塾OBの講演、ノーベル賞受賞者による講演と座談会が行われました。

B コングレコンベンションセンター(9月23日)のプログラム

- 10:30 開会あいさつ 常見 俊直 実行委員長
(京都大学理学部・理学研究科 社会交流室 講師)
- 10:45- 講演「物理りけじよの今とこれから。」
海岸 美華 さん(奈良女子大学理学部4回生)
- 11:05- 質疑応答
- 11:15- グループワーク”グループ対抗りけじよ王は誰だ?”
- 12:00- — お昼休み —
- 14:00- 講演・対談 知と学びのサミット
”個性が育むサイエンス—ノーベル賞受賞者が語る”
下村 脩 博士
「緑色蛍光たんぱく質の発見—決してあきらめない」
益川敏英 博士
「夢をつかむ『好奇心』に迫る」
- 15:55- 閉会のことば
- 16:00- 終了



ストレスマネジメント講座



仕事に、学問に、
恋をして(エンゲイジして)、
あなたに、京都大学に、活力を!

ストレスマネジメント講座

日時:平成26年3月7日(金) 13時から15時
場所:文学部第6講義室(文学部新館2階)

対象:京都大学の教職員、学生



「ワーク・エンゲイジメントに注目した個人と組織の活性化:
より健康で高いパフォーマンスに向けて」

講師:島津明人(東京大学医学系研究科・准教授)

内容:①ストレスとの上手な付き合い方

②健康を維持し、パフォーマンスを上げるために有効な知識、技術

申込方法

女性研究者支援センターホームページ(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>)のストレスマネジメント講座
申込入力フォームよりお申込みください。

主催:京都大学女性研究支援センター 共催:京都大学男女共同参画推進室
問合せ先:女性研究者支援センター(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>) TEL:075-753-2437 E-mail:w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

講演会「介護は何をもたらすのか — 一家族・地域・社会で生きる知恵」



介護に関する講演会シリーズ第3回「介護は何をもたらすのか一家族・地域・社会で生きる知恵」を、3月2日（土）、楽友会館にて開催しました。これは、育児介護支援事業ワーキンググループ

推進員の鈴木和代 医学研究科 助教による企画で、誰もが直面する「老い」を安心して迎え、過ぎしていくために、立場に関係なく考える場を提供することを目的とし、男女共同参画推進室との共催で事業を行いました。

鈴木推進員の司会進行により、はじめに、稲葉カヨ 女性研究者支援センター長より講師の紹介と開会の挨拶がありました。そして、波平恵美子 お茶の水女子大学 名誉教授より「介護は何をもたらすのか一家族・地域・社会で生きる知恵」の講演がありました。

はじめに、先生のご専門とされる文化人類学の特徴について、社会学と比較して説明がありました。人類学の手法は、フィールドワークを第一とし、具体的な人間のデータを集めることを重視するものです。波平先生の場合は、大学教員時代また退職後も含めて30年以上、一つの同じ地域を訪問して調査研究を続けてこられました。医療人類学の分野で、1960年代に先生が研究を始められた頃、「国民皆保険制度」が始まりました。その恩恵が全国津々浦々まで広がりました。しかし、先生が調査される地方では、望む医療を受けられるようになるのに20年かかったそうです。2000年に始まった介護保険制度は、12年経っただけですが、国の方針は確実に個人の生き方を変えていくので、しっかりこの制度を使って育てていく必要があると述べられました。

講演のテーマである「介護は何をもたらすのか」という問いについては、「生き物」として存在するための知恵と、「社会的存在」としての知恵の二つを受けると説明されました。人間の身体的特徴は介護、介助のために発達したかのように作られています。人の身体を支えた

り、抱え上げたり、体全体を拭ったりできるのは、人間の特徴です。大型霊長類も子どもを抱きしめる、抱えるなど似た行為はできますが、自分と同じ大きさの他の個体に、人間が行うような行為はできません。人間は集団内での相互扶助と、老いたもの、病むものを排除しない制度を作り、地球上のほぼあらゆる地域で生存することを可能にしました。先生が調査された地域では、村人は「よその家の誰に〇〇してもらった」という詳細な記録をつけていたとのことで、そのお返しの行為は、時には何十年も経ってから行われていたそうです。短期間に完了する相互扶助だけではなく、世代を超えて、長期間の中で行なわれる相互扶助は、人間が生存していくための必然的な行為だったのではないかと説明されました。

また、日本中を調査した結果、「姥捨て山」の言い伝えのある場所で人骨が発見されたことはないそうです。しかも、言い伝えの内容は、正しくは「親を捨てなかった家が、その年寄りの知恵に助けられた」という話で伝承されているそうです。小説や映画のせいで「親を捨てる」という行為が実話のように、海外に伝わったことは問題であると述べられました。

現在は、家族の規模が小さくなり、家庭や親族のネットワーク、また地域社会だけに頼って世代を越えた相互扶助をすることはできなくなりました。介護保険制度が成立する過程での議論は、介護・介助とは何かということ、日本全体が考えるきっかけとなりました。介護保険制度は、家庭内で行なわれている介護という行為であっても、それを日本社会全体で支えるという発想に基づいています。人間は誰にも世話にならずに自分の遺体を処理することはできないのだから、目を反らさず問題に向き合い、より成熟した人間社会と一緒に構築していきましょうと、波平先生は力強く語られました。

講演会に続いて、円座になり、講演者と参加者の交流会「介護を語るカフェ」を開催しました。教職員、学生、またその家族の方々が、さまざまな角度から、介護の体験やこれからの制度のあり方などについて、話題提供・意見交換を行いました。



京都大学優秀女性研究者賞「たちばな賞」表彰式と研究発表



優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰する制度である、京都大学優秀女性研究者賞（たちばな賞）の第5回の表彰式が、3月1日（金）、京都大学医学部芝蘭会館 稲盛ホールにて開催されました。

最初に、林信夫 副学長（男女共同参画担当）より、選考経緯に関する報告を交えた開会の挨拶がありました。本学の理事・教員で構成された12名の選考委員による一次審査（書面審査）を経て、二次審査での口頭発表を評価し、受賞者を決定したとのことでした。受賞者の二人には、更なる活躍を期待していると話されました。

そして、松本紘 総長より、学生部門受賞者の飯間麻美 医学研究科博士課程3回生、研究者部門受賞者の今井（佐藤）薫 理学研究科 日本学術振興会特別研究員に、それぞれ表彰状と記念楯が授与されました。続いて、副賞の「ワコール賞」が安原弘展 ワコール株式会社代表取締役社長から贈呈されました。

その後、松本総長から、受賞者への祝福の言葉と更なる活躍を期待するエールが送られました。京都大学は諸外国の大学と比較しても女性研究者が少ない現状を何とか改善したいと考えており、この「たちばな賞」で学生部門、研究者部門ともに、もっと多くの女性研究者を表彰したいと話されました。さらに、優秀な女性研究者を輩出するためには、「たちばな賞」の推薦公募に対して、多くの学内応募が必要であるとも話され、「たちばな賞」

を活性化していく方向を示されました。

また、安原代表取締役社長から、受賞者への祝辞が述べられました。ワコール株式会社の研究部門である人間科学研究所では、人間工学、造型などの分野で、大学との連携を模索しておられるとのことでした。

引き続き受賞者による研究発表を行いました。まず、飯間氏より「拡散MRIを用いた新たな非侵襲的乳癌診断法の開発」の発表がありました。

女性が罹患する癌のトップは乳癌です。社会的に多様な役割を担う40～50代女性の罹患率が高いことが特徴的です。しかし従来の画像診断では、治療法の決定に役立つ情報が十分得られない状況がありました。これを克服する、新たな診断法を開発したいと考えたことが、この研究テーマに取り組むきっかけだったそうです。

乳がん検診の1つ「マンモグラフィー検診」の普及によって、小さな病変も見つかるようになりました。これに伴いDCIS（非浸潤性乳管癌）の患者数が急増しています。DCISの中には、IDC（浸潤性乳管癌）とは異なる比較的悪性度の低いものが含まれており、その点を考慮した適切なマネジメントが必要ではという議論があります。ただし現段階においてはこれらを非侵襲的に診断する事は難しく、新たな診断法の確立が望まれています。

飯間氏は、患者負担の大きい外科的手法や薬剤の投与によらない、拡散強調MRIによる非侵襲的な悪性度の

2013年3月1日（金） 芝蘭会館稲盛ホールにて

評価や、腫瘍灌流の評価をはじめとする新たな診断手法を研究しています。

そして、個々の乳癌の特徴に応じた、適切な治療につながる様な新たな乳癌診断法の確立に向けて検証を行い、臨床応用を目指しているそうです。

次に、今井（佐藤）研究員による「ホヤ胚を用いた遺伝子調節ネットワークの研究」についての発表がありました。

動物の発生では、受精卵から体がつくられていく過程で、様々な遺伝子が働き、個々の遺伝子は調節遺伝子と呼ばれる遺伝子によって制御されます。発生において細胞間の違いを作る要因には、転写因子（遺伝子を ON/OFF するスイッチ）とシグナル分子（細胞間の相互作用）があり、これらの組み合わせで細胞が筋肉になったり、神経になったりするのです。

今井氏が研究対象としているホヤは、脊椎動物と共通の体のつくりでありながら、体のつくりが単純、ゲノムが単純なことから、脊椎動物の進化を知るために適しています。

ホヤと脊椎動物の背腹の領域化には、共通のメカニズムが存在しており、脊椎動物では、BMP シグナル分子の濃度で、背側、腹側の区別が発生します。ホヤでも同様に BMP の一種である ADMP が腹側を規定します。

これには、Pinhead が深く関わっていて、Pinhead タンパク質が ADMP タンパク質に結合して、ADMP タンパク質の働きを抑制することで、背と腹が決まります。ADMP と Pinhead 遺伝子はゲノム上で隣接して存在しますが、その両者の間に両方の遺伝子発現に必要な共通の DNA 配列（エンハンサー配列）を持っており、それがスイッチのように働くことで、1つの細胞ではどちらか片方の遺伝子だけが発現するようになっています。

脊椎動物であるメダカでも同じようなメカニズムが働いていることがわかっています。ホヤとメダカのように進化的にはなれた生き物で、ゲノム上での遺伝子の並びが保存されていることは稀です。

進化的に遺伝子ネットワークが保存されていたり、ゲノム上の遺伝子の並びが保存されているのは理由があることから、今井氏は、保存されているところに着目して研究を進めているそうです。

最後に、吉川 潔 理事・副学長より閉会の挨拶があり、盛況のうちに閉幕しました。



全学共通科目、ポケットゼミを開講

平成 25 年度の全学共通科目「性差を科学する 1」と、ポケットゼミ「ジェンダーと科学」を開講しました。

第 1 回ポケットゼミでは、伊藤 公雄（文学研究科）教授の案内で、ゼミ生がセンターの庭、建物を見学した後、「ポケットゼミの目的について、ジェンダー研究の歴史と意義」をテーマにゼミが進められました。



女性研究者支援センターの建て替え

女性研究者支援センター建て替え工事のため、5月下旬より「橘会館」（場所：鞠小路通近衛上る）にて業務を実施します。住所、電話番号の変更はありませんが、来室の際はお電話いただき、場所をご確認下さい。

新施設の竣工は、平成 26 年 3 月を予定しています。本年度中はご不便おかけしますが、女性研究者支援のリーディング・センターとして発展する今後の活動展開にご期待下さい。

連載：研究者になる！－第42回－

旅と子育てとフィールドワーク

アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
平野（野元）美佐

私はなぜか小さい頃から日本を出てみたい気持ちが強く、小学校の文集に将来は旅行家になると書いたほどで、大学生になるとアルバイトをしては海外に行くことを繰り返した。中国シルクロードの旅、シベリア鉄道でのソ連横断、東西ヨーロッパ、イスラエル、エジプトなどいろいろな国に行った。さらには、サハラ以南のアフリカへも足を踏み入れた。しかしそのアフリカの旅が、これまで行った他の地域とは違っていった。百聞は一見に如かずとはいうものの、ただ見てもアフリカのことは全くわからないという気持ちが残った。もちろん、それまでの旅行でもその土地土地を理解できていたとは言い難い。しかし、アフリカは旅行者としての自分がとくになじまない気がしたのである。



アフリカを理解するには旅行ではなく滞在しなければと思い、アフリカを研究しようと大学院に進んだ私は、最初は社会学、後に文化人類学と専攻を変え、アフリカ中西部の小国カメルーンと関わることになった。奨学金などをいただき、長期では2年、短期も合わせると合計3年ほどカメルーンに滞在し、フィールドワークを行った。

私はアフリカの都市社会に興味があり、カメルーンの商業民とされるバミレケというエスニック・グループが、いかに都市で暮らしをたてているのかを、彼らと一緒にいろいろな活動に参加させてもらいながら調査をした。とくに、彼らがどのようにカネを稼ぎ、貯蓄し、投資するのか、という貨幣の動きと意味に注目した。バミレケ実業家の多くはたたき上げで、小規模な商売から出発し、頼母子講で貯蓄しながら商売や不動産に投資し、事業を拡大していく。また彼らに特徴的なのは村とつながり続けることで、都市に暮らしていても故郷に家を建て、同郷会に参加し、故郷の開発に携わっていた。彼らのアフリカ的な都市の生き方から、それまで考えもつかなかった生きる知恵、生き甲斐、創意工夫をたくさん知

ることができた。これはまさしく、アフリカに長期滞在したことで可能になったことである。しかし、「アフリカは知れば知るほどわからなくなる」とは恩師の言葉であるが、まだまだわからないことだらけというのが本当である。

博士論文を書いた後、非常勤講師や研究員などを経て、幸運にも常勤の職を得ることができた。大学院から今日まで、それぞれの過程で、良き先生、先輩、仲間にも恵まれたおかげだと思っている。

ここ最近では子育てをしており、カメルーンにまでフィールドワークに行くことが難しくなっている。かわりに頼母子講つながりで、沖縄の模合（もあい）と呼ばれる頼母子講について調査している。日本では沖縄だけが、今も広く活発に頼母子講が行われているのである。沖縄でフィールドワークをしていると、「フィールドワークは大変だけどおもしろい！」と改めて思う。文化人類学者や地域研究者は、フィールドワークへ行かなければはじまらないのである。だから子育てをしていると、子育てとフィールドワークをどのように両立させていけるかが難しい課題となる。普段の仕事は保育園の時間になんとかこなせても、フィールドワークはそうはいかない。誰もが長期のフィールドワーク中、子どもをずっとみてる家族がいるわけではなく、フィールドに連れて行くこともできないことが多い。これは私だけの問題ではなく、子育てフィールドワーカー（男女問わず）が必ずぶち当たる壁である。自助努力だけでは限界があると思うが、今のところ、個人でやりくりする問題とされている。

しかし一方で、子どもは、子育てをしなければ出会えなかったフィールドや人びととたくさん出会わせてくれた。フィールドワークは、フィールドの人びとの生活に踏み込んで行くと同時に、自分の人生をむこうにさらけ出すことでもある。その関係は一回きりでは終わらず、長期にわたって続くのが文化人類学のフィールドワークである。そういう意味では、子どもをもっているいろいろ苦労することは、研究や調査にとってはマイナスばかりではないと思うのである。



Center for Women Researchers

〒 606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

たろばな 京都大学女性研究者支援センター Center for Women Researchers

シンポジウム シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン 7 「京都で研究する！—外国人研究者が語る京都大学での経験」

第7回となるシンポジウム「シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン 京都で研究する！—外国人研究者が語る京都大学での経験—: International Researchers Talk About Their Experiences at Kyoto University」を開催しました。大学内外のグローバル化の動向を踏まえ、今回は英語で全プログラムを進めました。講演者のスパワン・ジュンウィチャン (Supawan JOONWICHEN) 氏は、タイ王国出身で、本学で博士号を取得後、東北大学大学院金属材料研究所ポスドク研究員 (NEDO プロジェクト) を経て、名古屋大学大学院工学研究科マテリアル理工学専攻で産官学連携研究員をされています。もう一人の講演者ジェーン・シンガー (Jane SINGER) 先生は、記者、編集者を経て、京都府議会議員であったパートナーと二人のお子さんを育てながら、研究者へとキャリア形成し、2010年より京都大学大学院地球環境学堂コミュニティ開発論分野の准教授として勤務されています。今回のシンポジウムでは本学にゆかりのあるお二人に、これまでのキャリア、研究、本学での経験などについてお話いただきました。

司会進行は、講演者のジュンウィチャン氏の院生時代の指導者でもある山末英嗣・女性研究者支援センター広報WG主査が行いました。はじめに、稲葉カヨ・女性研究者支援センター長より挨拶があり、センターの活動紹介と、お二人の講演者のプロフィール



紹介が行われました。そして、ジュンウィチャン氏より、留学生の視点から「Studying Experience in Kyoto University: Challenges, Lessons, and Future Perspectives」京大で学んだこと、そしてこれから」の講演をいただきました。

ジュンウィチャン氏は、タイのブーラーパー大学 (Burapha University) において化学工学の分野で学士号を、カセートサート大学 (Kasetsart University) で修士号を取得し、プロクター&ギャンブル社に勤務されました。その後、研究を続けたいと考え、日本の文部科学省奨学金に応募して採択され、2008年に本学の博士課程に進学されました。研究分野は、「できるだけ少ない資源でできるだけ豊かな暮らしを提供する為にはどうしたらよいか」ということを研究しているエネルギー社会工学の石原慶一教授の研究室に進みました。留学にあたって心配したことは、大学で友人ができるか、3年間という期限内に博士号を取得できるか、研究だけの毎日に対するプレッシャー、日本人とコミュニケーションできるか、といったことだったそうで、この時で自身の課題に答える形で講演されました。

まず、博士課程での生活は、学生の関心を尊重する石原先生や山末先生の指導の下、コースワークが2割、自主的な研究活動が8割というバランスでした。氏は、修士課程の講義や興味のある科目を自主的に受講し、自分のペースでオリジナルな研究テーマを見つけ、3年間に国内外の9つの学会大会に参加し4本の論文を発表されました。振り返ると、1年目は、オリエンテーション

KYOTO UNIVERSITY
Center for Women Researchers

SYMPOSIUM SERIES: My Work and Career Design 7

**International Researchers
Talk About Their Experiences
at KYOTO UNIVERSITY**

Friday, July 19, 2013.
14:00 - 18:00 (Doors open at 14:30)

Shirankalkin Annex 2F,
Seminar Room 2
1-1 Yamamoto-cho, Sakyo-ku, Kyoto, Kyoto

Event Details
International researchers speak about their studies, the career paths, and challenges at Kyoto University to share their experiences with participants.

Supawan JOONWICHEN, Researcher
Department of Materials, Physics and Mining Engineering,
Graduate School of Engineering, Nagoya University
Studying Experience in Kyoto University:
Challenges, Lessons, and Future Perspectives

Jane SINGER, Associate Professor
Research Governance and Technology Management,
Executive School of Global Environmental Studies, Kyoto University
Considering a Non-linear
Approach to an Academic Life

This event is free and open to the public.

Registration Fee: 0
Please pre-register via the online Registration Form (PDF) (<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/eng/013>)

Responsible person: Center for Women Researchers, Kyoto University
The center provides temporary child care for children 3 months to 3rd grade of elementary school from 15:30 to 18:30. Advance reservations are required for the nursery care and the deadline is December 31. Please inform us about Name, Sex, Age, and Contact Information of your children when you register for the symposium.

The Center for Women Researchers, Kyoto University
Tel: 075-753-2477, E-mail: cmr@international.adm.kyoto-u.ac.jp, HP: <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/eng/>

Organized by the Center for Women Researchers, Kyoto University. Co-organized by Kyoto University Center for Gender Studies, Kyoto University Gender Equity Research Office.

International Researchers Talk About Their Experiences at

と実験への着手、2年目はデータの収集と論文の発表、3年目はそれらを総合した研究と学位論文の発表というステップだったそうです。

実験でネガティブな結果が出ることに不安を感じることもありました。科学的手法で行われたデータで

すから、それも研究の一部として論文の一つの章にまとめることでクリアされました。Ph.D.取得をめざす学生はまず論文のことを考えて、勇気をもって研究室でコミュニケーションをとることが重要です。その一方、Ph.D.取得は自分のより大きなキャリアの一部であることも忘れず、ゆとりをもった休日を過ごすことも大切であると話されました。

当初の不安とは異なり、研究室ではたくさんの友人を得られたそうです。また、研究室の他にも、本学の原子炉研究所の臨界集合体実験装置でのフィールドスタディに参加し、恵まれた環境で研究活動の幅を広げることができたと感じておられます。そして、これから研究者の道を進む人へのアドバイスとして、基礎理論に関する講義力やスーパーバイザーとしての能力なども身につける必要があるとお話されました。最後に、ネットで配信されている海外の大学のオンライン教材なども利用してグローバルな動向をキャッチする一方、留学してからは「郷に入っては郷に従え」という気持ちで留学国の文化に染まってみることも大事であると強調されました。

次に、京都大学のシンガー先生より、研究者の視点から「Considering a Non-linear Approach to an Academic Life 研究者へのノンリニア・アプローチ」の講演をいただきました。シンガー先生が、初めて日本にいらしたのは1976-77年の大学生の時で、京都でのホームステイや日本語研修をし、東京大学で学ばれました。その時印象



的だったのは、高崎山の猿のヒエラルキーについて観察したことで、日本社会の男性の序列社会と似ていて興味深かったそうです。

大学卒業後は、サンフランシスコでベトナム難民の定住プログラムの仕事をされました。アジアへの関心を深

められた先生は、仕事で得た貯金をもとに9ヶ月間、日本、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアに行き、また難民キャンプでのボランティア活動にも従事されました。そして、アメリカに帰国し、コロンビア大学国際公共政策大学院に入学、ジャカルタの国連開発計画で4ヶ月のインターンシップを行い、国際関係学の修士号を取得されました。大学院終了後には結婚をされ、東京で12年間、新聞記者、専門誌の編集者として活躍する一方、二人のお子さんの子育てとの両立に励まれました。この時は、両立支援のシステムがまだ整備されていなかったため、とても苦労されたそうです。

京都に移られたのは、京都府出身のパートナーが府議会議員に立候補されることがきっかけでした。家族で京都に転居するため、シンガー先生は、東京での新聞記者や雑誌編集者の仕事を中断されました。日本女性の労働市場に占める年代別統計のM字カーブを先生もご経験されたとお話されました。

そして、1995～2007年まで、先生は「議員の妻」という新しいキャリアを辿られました。地域にとけ込み「後援会」事務所や「婦人部」のマネジメントや広報活動を行い、大勢の人々を前にして日本語でスピーチをする日々を送られました。「ジャージ姿」で奔走される後援会イベントや選挙キャンペーン、支援者の「仲人」をされているシンガー先生のお写真のスライドが紹介され、会場に暖かい笑いが満ちました。



先生はお子さんが大きくなられた頃に、教育研究活動に入られ、立命館大学、京都学園大学で教鞭をとられた後、本学の教員として着任されました。現在、大学院地球環境学堂で「環境倫理学」「環境教育学」「移住と退去」「アカデミック・ライティング」などの講義を担当されています。研究では、3つの科学研究費プロジェクトに従事し、フィールド研究を行い、二冊の本を執筆されています。また、「国際環境マネジメントプログラム」の運営もされていて、オリエンテーション、院生の論文指導、委員会業務、海外での学生募集など多岐にわたるお仕事をこなされています。

先生が代表者を務められる科学研究費プロジェクト「民族性に着目したダム開発による村落移転の影響とレジリエンス評価」では、村落移転がエスニック・マイノリティに与えるインパクトについて研究されています。ダム開発によって移住をさせられる人々は世界で年間1千万人いるとされますが、センシティブな問題に様々な配慮をしながら、ベトナム中部の4つの集落について村落移転の現状と集落の再興に関するフィールド調査がされています。

そのような活動を行う研究者に必要とされる能力と技術には、インタビュー、分析と総合、執筆と編集、プレゼンテーションなどがあり、教員に必要とされるものには、物事を明確に説明し、次世代を理解する忍耐力などがあります。管理者としては、組織やイベントの運営、コミュニケーション力などが重要です。シンガー先生は、大学教員として要求されるこれらの能力と技術を15の項目に分類し、ご自身は、これらを「記者・編集者」、「政治家の妻」、「母親」という3つのキャリアの中でそれぞれ形成されたと振り返られました。大学院からすぐ大学教員へという直線コースではなく、さまざまな仕事と役割の中で、研究者に必要とされる能力・技術を身につける「ノンリニア」なアプローチについて具体的に説明いただき、研究者のキャリアパスの多様性について学ぶ機会となりました。

お二人の講演に続いて、伊藤公雄・女性研究者支援センター推進室長の進行により、質疑応答とディスカッションを行いました。科学の分野でも、ノンリニアなキャリア形成は可能か、また、数年間、専門以外のことをして研究に戻ることは可能かといった質問がありました。ジュンウィチャン氏は、アカデミアのほうが研究の自由度が高く自分の研究に集中することのできる環境にあり、ご自身はこのまま大学で研究を続けたいと回答されました。

また、日本の大学で、「女性研究者であること」と「外国人研究者であること」ではどちらが大変かという質問がありました。シンガー先生は、別々に経験したことはなく、外国人研究者の場合は日本語能力や滞在期間で異なり一般化はでき



ないが、どちらかといえば外国研究者であることより、学内に女性教員が少ない場合や、特に小さな子どもがいる場合は女性研究者であることのほうがより困難ではないかと回答されました。

女性教員であるシンガー先生を、学生はどのように捉えていると思われますか、という質問もありました。シンガー先生は、フィールドトリップなど、女性教員が引率することで、特に女子学生が安心して喜んで参加しているようだとは回答されました。フィールドトリップ先の環境は、時には女性には厳しく、トイレのない村に滞在することもあるそうです。メンバーに女性がいればお互いに助け合うことが出来ます。またアカデミアで女性教員が研究し、さまざまな役割を果たしている姿を示すことが、女子学生へのロールモデルとして、エンカレッジすることになるのではないかとお話されました。その他にも、奨学金やポストの獲得の仕方など活発な意見交換が行われ、盛会のうちに閉会しました。

(支援室)



女性研究者支援センターは移転しました

女性研究者支援センターは、建替え工事のため、橘会館に移転しました。新施設が完成する平成26年3月まで、橘会館にて業務を行います。旧施設より2棟南にあります。近くにお越しの際は、お立ち寄りください。



保育園入園待機乳児のための保育室

保育園入園待機乳児 保育室

2014年9月1日開室 産後1年以上経過

- 開室期間：平成25年9月1日～平成26年3月31日
- 開室日時：月曜日～金曜日 午前9時～午後6時
(時間外保育は、午前8時から9時/午後6時から8時)
- 保育場所：京都大学女性研究者支援センター
- 利用資格：京都大学に所属する女子学生・女性研究者
- 対象乳児：生後9週目～15ヶ月未満(満年齢)の健康な乳児
- 定員：9名

詳細は女性研究者支援センターホームページで！

女子学生、女性研究者の研究と育児の両立を支援することを目的とし、女性研究者支援センター内に、「平成25年度保育園入園待機乳児のための保育施設」を設けます。この保育施設は、自治体に保育園入園申請をおこなったが、入園待ちを余儀なくされている女性研究者等を対象とします。運営は、民間企業に委託し、大学が一部費用を負担して実施します。

<概要>

開室期間 平成25年9月1日から平成26年3月31日

開室日時 月曜日から金曜日、9時から18時

(時間外保育は、8時から9時、18時から20時)

利用資格 原則として京都大学に所属する女子学生・女性研究者

対象乳児 生後9週目から15ヶ月未満の健康な乳児、9名
(15カ月になる月の前月まで利用できます。)

今年度は、センター建替による仮施設での実施のため、スペースの制限上、最大9名の保育となります。

詳しくは、女性研究者支援センターのWebサイトをご覧ください。登録は出産前でも可能ですが、申請は自治体保育園に申し込み後です。



Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>



京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

介護のつどい（一緒にお話しませんか）

日時 2013年7月27日（土）13時から15時

場所 女性研究者支援センター

京都大学の教職員、学生、そのご家族を対象として、介護のつどい（一緒にお話しませんか）を開催しました。

自己紹介の後、介護経験のある方の体験談を聞きました。夫の介護をされている参加者からは、有料施設を利用したこともあるが、現在は夫婦2人で色々なサービスを利用しながら自宅で生活しており、健康に気を使い頑張っているというお話がありました。20年近く実母を一人で介護している方からは、ストレスがたまると、母に優しく接することができなくなるという悩みが出されました。とにかく自分が孤独で、誰か一人でも身近なところにいてほしいと思うとのことでした。また、介護サービスのスタッフにも、改善をお願いしたいこともあるという意見も出されました。

現状の制度や仕組みでは、身内に介護が必要になった場合、仕事と介護の両立は困難なので、仕事を辞めるしかないという結論に達しがちですが、子どもを親や保育園に預けて仕事を続ける女性が、介護となると『自分が仕事を辞めなくてはいけない』と思うのはなぜか？ということを考えてみました。やはり、一人で抱え込みすぎではないか？という考えが出されました。

介護はする側・される側の相互作用で、お互いの信頼関係が大切であること、介護者は軽い運動や歌を歌うなどのストレス解消法をもつとよいなど、介護のための知識や技術を互いに確認しました。

最後に、育児介護WG推進員の鈴木和代助教より、介助時に便利なグッズの紹介もありました。

介護のつどい (一緒にお話しませんか)

介護のなやみや知恵を共有したいな

腰を痛めない介助方法を知りたいな

介護サービスの悩みを聞いてほしいな

日時：2013年7月27日（土）
13:00～15:00（12:30受付開始）

場所：女性研究者支援センター
参加対象：京都大学の教職員、学生、そのご家族
(介護中の方以外のご参加も可) 15名

プログラム

- ・ほっと一息つきましょー ほっこりタイム
- ・介護の経験を語ろうー ほのほのつながろう
- ・介護の悩み、工夫や知恵を交換しよう
- ・腰を痛めない介助法をちょっと紹介 など

申込方法：女性研究者支援センターホームページ
(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>)
介護のつどい申込入力フォームより、お申し込みください。
締切：2013年7月17日（水）
問合せ先：京都大学女性研究者支援センター
TEL：075-753-2437 E-mail：w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp



ポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」

ジェンダーや性差について、学生の理解・知識を深めるために、ポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」を開講しました。全15回を11人の講師で担当し、オムニバス形式で講義を進めました。



女子高生・車座フォーラム2013



女性研究者支援センターでは、高校生の皆さんに研究者や科学者の仕事を知ってもらうために「女子高生・車座フォーラム2013 京都大学を知ろう・研究者と語ろう」を実施します。フォーラムでは、理系・文系それぞれにどんな研究分野や領域があるのかといった大学進学に関わる話をはじめ、研究の面白さや苦労、専門職や研究職など大学卒業後の将来設計のための心得、研究論文の執筆や学会発表といった研究者の仕事内容、子育てや介護と研究生活の両立方法など、さまざまなテーマについて、教員や大学院生、学生が疑問にお答えいたします。

京都大学がどんなところなのか、大学ではどんな勉強や研究をするのか、また大学卒業後の進路にはどんなものがあるのか、など、色々な疑問をお持ちのみなさん、京都大学の企画する「女子高生・車座フォーラム」にいらっしやいませんか？保護者の方々の参加も募集します。ホームページより、申し込んでください。

- ・日時 2013年12月15日(日) 10時から16時30分
- ・場所 京都大学 芝蘭会館他
- ・募集定員 女子高校生80名程度(先着順)・保護者40名程度
- ・申込期限 2013年11月15日(金)

ジュニア・キャンパスにゼミを提供

日時 平成 2013 年 9 月 14 日 (土) 14:30 ~ 16:00
 場所 京都大学女性研究者支援センター
 参加者 京都市およびその近郊の中学生

今年度も、京都市教育委員会との共催で、「京都大学ジュニアキャンパス」が開催されました。本事業は、中学生の皆さんに、学問の最先端を研究している現場に触れて、楽しさや面白さを感じてもらい、自分の興味のあることを深め、将来学びたいことを考えるきっかけを作ってもらおうことをめざしています。今年度のテーマは、「ひらけ！ 好奇心の玉手箱」です。法律、言語、理学、工学、医学など様々な分野から、実験、工作、自然観察といった体験型の授業や討論を通じた授業などが行われました。

女性研究者支援センターは、伊藤 公雄教授（文学研究科）と、センターのポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」の受講生 4 名（文、法、経済、農学部生）が講師となり、ゼミ「大学生と語るジェンダー（「男らしさ」「女らしさ」などの社会的性別）」を実施しました。ゼミには、女子 4 名、男子 4 名の中学生が参加しました。名古屋市や倉敷市など近畿以外からの参加もありました。

はじめに、伊藤公雄先生から、女性研究者支援センターの沿革や目的について説明がありました。そして、待機乳児保育室を見学した後、一度外に出て、センターの外周をみんなで散策しました。現在、女性研究者支援センターは、建替工事のため、橘会館で活動しています。橘会館は、1911 年に竣工された旧帝国大学総長官舎を改築した古い日本家屋風の施設です。庭には聖護院の森のなごりで、建屋よりさらに古い樹木が茂っています。今年度は、ワークショップも和室で行い、中学生に、より京都らしい雰囲気を感じてもらおうことが出来ました。

まず、緊張感をほぐすために、アイス・ブレイクを行いました。身振り手振りだけで意思疎通を行い、1 月 1

日から誕生日順に並ぶアクティビティをしました。はじめて出会う中学生と大学生ですが、あっという間に打ち解けて、すぐ並ぶことができました。

自己紹介をして、なごやかな雰囲気になった後、「ジェンダー」という言葉の意味について、大学生から簡単な講義をしました。そして、2 グループにわかれ、ワークショップ「メディアのなかのジェンダー」を行いました。雑誌のなかの女性像／男性像を切り抜き、模造紙に貼りつけ、完成した作品を壁に貼り、男女の表現のされ方の違いについて観察・発見したことを記録し、グループごとに討論しました。

次に、子供向けテレビ番組のキャラクターにみる男性・女性キャラクターの登場回数や特徴などを分析し意見交換しました。「アンパンマン」の大ファンで、各キャラクターに詳しい 2 人の女子中学生が活発な進行係になり、楽しい話題提供のもと討論が行われました。

最後は、2～3 人の小グループになって、受験や進路、キャンパス・ライフなどについて中学生から質問を受けました。「特に問題意識を感じていないので、ジェンダーを勉強する意味がわからない」という質問には、農学部の学生が、「今、自分にとっては問題がなくても、ジェンダーについての問題は世界のあらゆる場面にあることなので、在学中に学んでおけば、将来役立つのではないかと回答しました。他にも「科学研究もしたいし、企業にも行きたいがどうしたらよいか」、「女子学生で一人暮らしをしている人はいるのか」、「どうやったら勉強中の集中力を高めることができるか」などさまざまな質問がありました。大学生も過去の自分を振り返り、互いに有意義なワークショップとなりました。

今後も、女性研究者支援センターは、次世代向けの活動を続けていきます。12 月 15 日に開催する「女子高生・車座フォーラム 2013」においても、ポケット・ゼミ生がファシリテーションを行います。



連載：研究者になる！－第43回－

興味のおもむくままに

化学研究所・助教
今西 未来



「研究者になる！」というほど強い動機を意識したことがなく、何を書こうか、本当に悩んでしまいました。私の現在に至るまでの体験談になってしまい、気恥ずかしいのですが、女性研究者や博士課程進学者は実際まだ少なく、少しでも参考になれば嬉しいです。

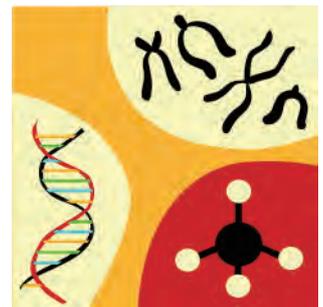
実験への憧れと、遺伝子への漠然とした興味から薬学部に入りましたが、学部時代は大学の“自由な気風”の中で、全く「学問」を意識しない生活を送ってしまい、将来のことは考えていませんでした。大学院を選ぶときは、何か、生命科学の根幹に関係がありそうなDNAへの興味から、宇治キャンパスの化研にあった研究室を選びました。

大学院では、科学への関心が高いメンバーが多く、また、かなり自由に実験をさせてもらえる環境でした。そのため、実験が楽しく、自然と博士課程への進学を決めました。「先のことはわからないので、面白いと思えることをやってみたい」と楽天的に考えていました。父が数学者で、心から数学を楽しんでいる様子を見て育ったので、研究者としての生活への不安がなかったことも大きな要因だとは思いますが、ただし、お金もかからず頭の中でできる数学と、研究費や人の協力、実験設備なしには進まない実験系との生活様式の違いに後になって気がつきました。一口に「研究者」といっても、その生活様式は様々です。でも、研究内容に何の制約もなく自由に考えられるということが、大学での研究職の最大の特権であり、興味に逆らえないのも、研究者としては仕方がないことではないでしょうか。

博士課程修了後は海外に出てみたいと、興味ある論文を出しているアメリカの研究者にメールし、乏しい英会話力ながら面接に出向きました。今となっては、英語力をはじめ、紹介や奨学金の有無を気にせず、大した度胸だと思いますが、答が出そうにない問題には、あまり悩まずに興味の方向に進んで行けば何とかなるように思います。また、婚約するでも別れるでもなく、留学後の

状況もわからない状態で応援してくれた今の主人の理解もあっての留学だったと思います。（女性研究者に限りませんが、仕事を続ける上で、理解あるパートナーを選ぶことは重要です！）ただ、1年たたないうちに、帰国の話があがりました。まだ、後につながる何かを得たという実感が無い時期で、かなり迷いましたが、留学後は日本で職を得たいと考えていましたし、その時に研究環境の整った常勤の職に巡り合えるかは賭けだと思いました。「遅かれ早かれ、自分の研究をするのだから」というアドバイスに後押しされ、結局、1年3ヶ月のアメリカ生活後、京都に帰りました。

結婚し、また仕事では、大学院時代の研究をベースにDNA結合タンパク質に関する研究をスタートさせました。新しい興味から、当時全く素人であった「体内時計」の研究への提案書を出したところ、私にとっては大きな研究プロジェクトに採択されました。興味中心に直感で行動し、楽天的に進んできた人生だったのですが、その時は、大きなプロジェクトという不安も大きく、子どもは5年間ちょっと無理・・・と、研究中心の生活を送ることにしました。それまで、周りに子育て中の研究者がいなかったため、全く、そのような生活が考えられなかったのです。そのプロジェクトの中で、子育て中の女性研究者に出会い「何とかなるもんだ」と実感し、また、「長い目で見てトータルとして理想にかなう生活ができれば」という意見を伺いました。子育てへのハードルは下がり、また、研究にゴールや目星がつくことはないということをややく悟り、出産に踏切りしました。運良く、現在は3歳と0歳の2人の子どもに恵まれ、保育園と実家から通ってくれる母に助けをもらいながらの生活です。時間の制約や睡眠不足は予想以上に大きく、何とかなっているのか今は正直わかりません。でも、これからも続けたい長い研究生活のほんの数年と割り切り、研究生活も家庭生活も豊かにしたいというわがまを叶えるべく、奮闘中です。家族やラボのメンバーには感謝しきれませんが、周囲に感謝の気持ちを持って、研究には集中力と独創性を大切にしたいと思っています。



Center for Women Researchers

〒 606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

保育園入園待機乳児保育室利用者の交流会

平成25年度保育園入園待機乳児のための保育室を9月1日より開室しました。この保育施設は、自治体に保育園入園申請をおこなったが、入園待ちを余儀なくされている女性研究者等を対象としています。運営は、民間企業に委託し、大学が一部費用を負担して実施しています。今年度は、センター建替え工事のため、仮施設での実施ですが、みんな元気よく過ごしてくれています。

そして、保育室利用者の交流会を10月29日(火)12時から13時の昼休み時間を利用して行いました。司会進行は、育児・介護WG主査の山肩洋子先生で、保育士から利用児の保育室での様子、鴨川への散歩、食事風景などの説明を聞いた後、育児のことなどを話題に保護者同士の交流を深めました。



ベビーシッター利用育児支援（男女共同参画推進室にて実施）



京都大学男女共同参画推進室（総務部人事課労務管理室）では、教職員の仕事と子育ての両立を支援するため、「ベビーシッター育児支援割引券」を発行して、ベビーシッターによる在宅保育サービス事業を行う者（以下「ベビーシッター事業者」という。）が提供するサービスを利用した場合に、その利用料金の一部を助成しています。

利用を希望される方は、男女共同参画推進室のサイト（<http://geco.adm.kyoto-u.ac.jp/>）をごらんいただき、申請を行ってください。



■概要

| | |
|----------|---|
| 利用対象者 | 原則として、配偶者も就労している本学教職員（本学で社会保険に加入している非常勤教職員を含む） |
| 対象児年齢 | 0歳～小学校3年生、その他健全育成上の世話を必要とする小学校6年生までの児童 |
| 割引金額 | 1日につき1家庭 1,700円 |
| 利用時の注意事項 | (1) 就労のためにベビーシッターサービスを利用する場合があります。 (2) 利用者の家庭内での保育あるいは保育所等への送迎を依頼する場合があります。 (ベビーシッター宅等利用者の家庭以外での保育には使用できません。) (3) 割引券の利用可能枚数は1日1枚、1ヶ月24枚、1年間280枚まで *詳細はこども未来財団のサイトをご参照ください。 |

女子中高生のための関西科学塾



第8回 女子中高生のための関西科学塾 <http://kagaku-juku.jp/>

「卵から体ができあがるしくみ」
行ってみようよ。カ・ガ・ク。の時間。

参加者募集

プログラム

- A** 2013年6月9日(日) 10:00-16:00
開会式、講演会、理系大学生とのグループトークなど 京都大学
- B** 2013年9月23日(月・祝)
ノーベル賞受賞者による座談会、グループワークなど
コングレコンベンションセンター (R 大阪駅すぐ)
- C** 2013年10月20日(日) 午後
東映 大阪大学(高校生)
大阪府立大学(中学生)
- D** 2013年11月9日(土) (予定)
見学会 けいほんな学研都市の研究所
けいほんな女性研究者との交流会
- E** 2014年11月17日(日) 午後
東映 神戸大学(高校生)
奈良女子大学(中学生、高校生)
- F** 2014年3月15日(土)・16日(日)
東映、身衣会、遊説科展、交流会、表彰式、閉会式
京都大学(京都トラバラーズ・イン泊)

「卵から体ができあがるしくみ」
京都大学 高橋淑子教授
動物の体はどのように作られるのでしょうか。それはたった一つの受精卵、それが細胞分裂を繰り返すうちに広がります。心臓や脳みそ、そして手足ができてくるのです。体作りのためにせっせと働く「細胞のドラマ」まで紹介します。

知と学びのサミット
「個性が輝くサイエンスノーベル賞受賞者が語る」
日本が誇るノーベル賞受賞者である、下村 博(博士)！細胞博士をお迎えし、サイエンスの魅力をたっぷりお話します。ノーベル賞にまつる感動の瞬間、貴方が想像もしていない好奇心に満ちました。先輩士から若者へのメッセージ「ノーベル賞は夢じゃない！」

参加申込みと問い合わせ

ウェブサイト：ホームページの「参加申込み科学塾申込みフォーム」から
FAX：裏面の参加申込書（ホームページからダウンロード可）を送信
E-mail：申込書の必要事項を忘れなく転記し、件名を「科学塾申込」として

京都大学理学部理学系 関西科学塾運営事務局
URL: <http://kagaku-juku.jp> (最新情報をご覧いただけます)
FAX: 075-753-3645
E-mail: juku@rcsl.kyoto-u.ac.jp

申込み締切 5月31日(金) 必着
定員：120名(先着順)
参加費：A～Eは無料
Fのみ5,565円(税込・前席)
※学費は、別途色別表

女子中高生のための関西科学塾は、文部科学省関連の法人、科学技術振興機構の「女子中高生の理系進路選択支援事業」から助成を受けて行われる、科学実験教室や講演会を主体としたイベントです。より多くの女子中高生が、理系の進路に興味を持ち、将来理系の職業を選ぶことを目的に開催しています。毎年関西の大学が持ち回りで主管校になり行われています。今年度は、京都大学を幹事校として、関西の大学や研究機関等で開催中です。

2013年6月9日(日)、京都大学にて、開会式が行われました。参加者は、女性研究者の講演を聴き、京大生とともにグループトークを行いました。

【A】プログラム

- 10:00 開会あいさつ 常見 俊直 実行委員長
(京都大学理学部・理学研究科 社会交流室 講師)
- 10:15- 講演 「卵から体ができあがるしくみ」
高橋 淑子 教授 (京都大学理学部・理学研究科)
- 11:15- <C> 日程実験テーマの班分けについてお知らせ
- 11:25- ー お昼休み ー
- 12:30- <C> 日程実験テーマの班分け
- 13:00- グループトーク
"理系大学生と一緒に語り合おう"
- 13:45- グループコミュニケーション
"アイデアと力を出し合って競ってみよう"
- 15:00- 全体会
- 15:50- 閉会あいさつ・事務連絡



JST 女子中高生の理系進路選択支援プログラム

9月23日(月・祝)には、JR大阪駅近くのコングレ
コンベンションセンターにて、第2回のプログラムが
開催され、関西科学塾OBの講演、ノーベル賞受賞者による講演と座談会が行われました。

【B】プログラム

- 10:30 開会あいさつ 常見 俊直 実行委員長
(京都大学理学部・理学研究科 社会交流室 講師)
- 10:45- 講演 「物理りけじよの今とこれから。」
海岸 美華 さん(奈良女子大学理学部4回生)
- 11:05- 質疑応答
- 11:15- " グループ対抗りけじよ王は誰だ? "
- 12:00- — お昼休み —
- 14:00- 講演・対談 知と学びのサミット
" 個性が育むサイエンス—ノーベル賞受賞者が語る "
下村 脩 博士
「緑色蛍光たんぱく質の発見—決してあきらめない」
益川敏英 博士
「夢をつかむ『好奇心』に迫る」
- 15:55- 閉会のことば
- 16:00- 終了



国立女性教育会館「国際研修プログラム」に協力

2013年10月1日「アジア太平洋における男女共同参画推進官・リーダーセミナー」(国立女性教育会館)一行が、女性研究者支援センターを視察されました。

国立女性教育会館は、開発途上国において男女共同参画の政策策定・政策提言を行う立場にある女性行政・教育担当者、NGO リーダーを対象に、女性の能力開発を目的として研修を行っています。平成25年度は、カンボジア、モンゴル、フィリピン、タイ、ベトナムから9名の女性リーダーが来日し、東京・京都で研修を受けました。

午前の楽友会館でのセミナー「日本の若い世代にとっての男女共同参画」(コーディネーター：伊藤公雄 女性研究者支援センター推進室長)に続き、センター施設の見学を行いました。

そして、犬塚典子 女性研究者支援センター特定教授が、女性研究者支援の取組みについて概要を説明しました。センターの待機乳児保育室や「グリーン・カーテン」の取組みなどについて質問も飛び交い、女性の視点での育児支援、環境問題への関心の高さがうかがえました。



連載：研究者になる！－第44回－

芋虫と私

農学研究科・助教
吉永 直子



昆虫の研究をしていると、昔から昆虫少女だったのかとよく訊かれますが、むしろ逆です。子供の頃、マンシヨンの階段に蛾が止まっていると、息を止めて壁伝いに忍び足で駆け下りていました。芋虫・毛虫は見るのもおぞましいと思っていました。その芋虫が実はかなりのベビーフェイスで撫でるとふにゃふにゃ気持ちいいなんて、研究で、自分で育てるようになるまで知りませんでした。なら何で昆虫の研究室を選んだのか。今思い返しても、何となく面白そうだったから、としか言いようがありません。その対象が好きかどうかと、自分がのめり込むかどうかはあまり関係ないようです。

「知りたい」という動機を持つこと、疑問を自分のものとするのが研究の本質だと、文化人類学の福井勝義先生が熱く語っておられたのを最近になって思い出します。2回生で選択したこの一般教養の演習には当初30名近い履修者がいましたが、フィールドワークのテーマを自分で見つけるという最初の関門でほとんどが脱落しました。その頃、私は別に履修していた地図学演習で「消えゆく銭湯」について実地調査する課題が出ていたので、銭湯文化をテーマを選びました。一石二鳥を狙ったわけです。当然ながら、それを選んだ理由を先生に訊かれました。最初は下調べで得た知識でそれなりに答えていましたが、すぐに魂胆がばれてしまい、「研究は時間もエネルギーも使う。生半可な気持ちでは続かない」と言われました。結局、与えられたテーマを取っ掛かりとして夏休みに始めた湖西農村でのフィールドワークは4回生の秋頃まで続いたと記憶しています。調査地の方々のご厚意と励ましに支えられたおかげでした。単位はもう関係なく、何とか形にして恩返しをしたい一心で、友人と共著で冊子に纏めるところまで先生に指導して頂きました。けれども、達成感があったものの、どこかで「借り物」の研究だった感が拭えません。疑問を自分のものにしたという実感がなく、そもそも何故文化人類学に興味

をもったのか、自分の中で掘り下げることができませんでした。

その淡い敗北感があったからかもしれません。研究室に入った時には、今度はとにかく本気を出したくて、与えられた課題「イネに誘導抵抗性を引き起こす昆虫由来エリシター」を何が何でも見つけてみせると意気込んでいました。芋虫が気持ち悪かろうが、有機化学が苦手だろうが関係ない。私の本気を出しさえすれば何がしかの結果は出るはず、と。ところが、やってもやっても、あと少しというところで結果がするりと逃げていく感じでした。ここまでムキになったのは初めてというぐらい遮二無二のめり込んだ卒論研究で、得られた結論は「この世の摂理は私の努力と無関係である」すなわち no data でした。思えばこの時初めて、深みに嵌るという感覚を味わった気がします。博士課程進学覚悟を決めたのもこの頃でした。

今、教員側の立場になってもどかしく感じるのは、こうした自分の中の「知りたい」欲求・執着がどういふものかをうまく伝えることができない点です。私も学生時代はそうでしたが、いい発見をすることが目的だと思いついてしまっ、周りが次々と結果を出すことに焦ったり、自分には才能が無いと落ち込んだりしがちです。せめて大学にいる間だけでも、成果は二の次にして、まずは何かに食いついて自分で考え研究を進める醍醐味と、やるだけ無駄だと耳で囁く悪魔にうち勝って「これを解くのは私だ」という執念を味わってみたいのです。それが研究者の原点となり、研究を続ける原動力になると思います。

とはいえ、これまでに私も一度だけ、ぼっかりと執着が失せた時期がありました。いろいろと自分のことが思うように行かないのに、何で芋虫のことなんかで悩まなければいけないのかと。研究のどうでもよさに、ふと気づいて我に返った瞬間でした。幸か不幸かそんな精神状態は長く続かなくて、いつの間にかまた無心に葉っぱを食べる芋虫を眺めて和みながら「何でこいつらは……」と考えるようになって今に至ります。対象が好きではなくても研究にのめり込むことはできますが、一旦のめり込めば自然と愛着が湧くのかもかもしれません。



Center for Women Researchers

〒 606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

女子高生・車座フォーラム 2014



研究者や科学者の仕事を知ってもらおうと、12月15日(日)に、「女子高生・車座フォーラム2013」を開催しました。女性研究者支援センターでは、このフォーラムを年1回実施しており、今回で8回目となりました。

犬塚 典子・女性研究者支援センター特任教授による司会進行のもと、はじめに、稲葉 カヨ・副学長より、開会の挨拶がありました。

稲葉先生よりは、女性研究者支援センターが2006年に設立された経緯や、最初は、小規模に実施していた車座フォーラムを、規模を拡大して実施するようになったことの説明などがありました。



先生は、植物学を専攻したいと理学部に入学されましたが、大学院に進学される時に、動物学教室に移られました。そして、現在のご研究分野は免疫学です。このように、大学で学び、研究を進めていく中で、やりたいことが変わってくることもあると、ご自身の研究を例に紹介されました。

そして、女子高生に向けて、「Girls, be ambitious!」「チャレンジして失敗しても、それは経験である。成長こそが、あなた方の目的である。」との言葉を贈られ、近い将来、このキャンパスで会える日を楽しみにしていると、話されました。



次に、赤松 明彦・学生・図書館担当理事・副学長より、「京大生の学生生活」についての講演がありました。

まず、京都大学の基本理念について、大きく2点の説明がありました。

1つ目は、「対話を根幹とした自学自習」です。自分の意見も言う。他人の意見も聞く。そして自ら学ぶという意味で、理事も好きな言葉だそうです。2つ目は、「地球社会の調和ある共存に寄与する」です。地球上には、人間だけでなく、多くの動植物が生きていることを認識し、環境に配慮しながら、共存していくための学問を追究する、という願いが込められています。

京都大学に入学した学生は、教養科目である全学共通科目と専門科目である学部科目を履修します。



理事よりは、本学で特徴的な、「ポケット・ゼミ」と呼ばれる少人数制のゼミの紹介がありました。さらに、「ジョン万プログラム」など留学のためのシステムも用意して、海外の大学と協力して、優れた教育を行っていることも紹介されました。

また、学問の面だけでなく、学生生活を支援するキャリアサポートルーム、カウンセリングルーム、障害学生支援ルームなどを設置していること、芸術鑑賞の機会を用意していることなどが話されました。

学生は、自主的に種々のクラブ活動やサークル活動を行っていることにも触れ、「京都大学で充実した学生生活を送られることを願っています。」と参加者にメッセージを贈られました。

続いて、鈴木 晶子・教育学研究科 教授より「自分の未来をデザインする」の講演がありました。



はじめに、鈴木先生より参加者にいくつかの質問が投げかけられました。

参加者の中には、文系・理系の別だけでなく、入学を希望する学部が、明確に決まっている人もいれば、まだまだ迷っている人もありました。先生からは、「大いに迷って下さい」とのお言葉がありました。なぜならば、研究には、文系・理系の区別なく、多くの分野の方々と関わる必要があるからです。どの学部に入るか、文系・理系を選択するか、というのは、学問への入り口でしかなく、凝り固まっては、ユニークな研究ができないからだそうです。

先生は、高校生の時から、研究者志望だったそうです。人の集中力が日によって違うことが不思議であったこと、「ひらめき」が人に訪れる仕組みを考えたいと思ったとき、医学、心理学、哲学など、どの学問で学ぶべきか迷ったそうです。大学院生時代にドイツのケルン大学

京都大学を知ろう 研究者と語ろう

に留学し、学問を進める中で、「人の意識が、どのようにして、人を成長させるのか」を教育哲学という視点から研究することに興味を持ったそうです。

女性が研究職という専門職を続けるためには、結婚や出産・育児、親の介護など、様々な事象に出会いますが、そこでは、研究を続けていくための環境を整えるというマネジメント能力も求められます。先生は、協力者を持つこともマネジメント力の一つであると話され、自分の応援団を持つために、何が必要で、何をしなければならぬか、考えてみましょうと話されました。

最後に、参加者に向けて、「自分たちには未来をデザインする力があると認識し、自分の心の中に流れている時間の質を高めましょう。才能は愛でること、伸ばすことができるのだから、そのための意識を育てましょう。そして、皆さんと、このキャンパスで、様々な議論ができる日を心待ちにしている」とのメッセージをいただきました。

講演後は、午後のグループ討論に向けて、講師とアシスタントの学生の紹介を行いました。

昼休憩後、高校生は、グループ討論会場に移動し、9グループに分かれて、討論を行いました。グループ討論では、講師から、研究と育児の両立のために、時間の使い方を工夫する能力が増したという話や、研究を続けていて良かったと感じたときの話を聞いたり、学生スタッフから、受験勉強の方法や、受験学部の選択、講義の様



子を聞いたりしました。高校生がグループ討論に参加している間、保護者は、学生ガイドの案内で、キャンパスツアーに参加し、京都大学の施設や、博物館の見学をしました。



2013年12月15日（日）芝蘭会館、他

グループ討論の後には、もう一度全員が集まり、伊藤 公雄・女性研究者支援センター推進室長の司会で、全体会を行いました。まず、アシスタントの学生より各グループの討論内容について発表を行い、講師が高校生からの質問に答える形でまとめを行いました。



自分のやりたい学問は、どの学部に行けば、できるのか知りたいということに対しては、方法は複数あるので、学問を進めていく中で、研究の方向性や、研究環境を選んでいけばよい、ということが確認されました。

女性研究者に向けて、なぜ研究者になったのか、女性であるがゆえに困ったことは何か、という質問もありました。研究者を目指して学問を続けてきたというより、好きなこと、やりたいことを「もうちょっと」と続けて

いるうちに、今の状況になったという回答が多数でした。研究者カップルは別居婚が多く、子どもがいると、パートナーや、親、周囲の協力が、より必要になってきますが、価値観を共有できるパートナー探しが、ポイントになるようです。親から「娘に養ってもらおうつもりはない」と言われ、自由に研究を続けられたのは、女性ゆえのメリットだったと思う、という意見もありました。

また、男性研究者に向けて、女性が育児や家事で研究を中断しなくてはならない状況をどう思うか、女性研究者は、男性からどう見えるか、という質問もありました。両立している女性は、時間の使い方がうまく、協力者に恵まれ、環境を整える力があるように思うとの回答がありました。やはり、お互いのライフスタイルを理解し合えるパートナーを選ぶことが必要なようです。

最後に、京都大学では、まだまだ女性研究者が少ないのですが、もっと、女性が活躍できる場にして行きたいとの抱負が述べられました。（支援室）

講師・グループ・グループ討論会場

| | 氏名 | 所属 | 研究分野 | 会場 |
|---|--------|-------------|---------------------|-------------|
| 1 | 伊藤 公雄 | 文学研究科 | 文化社会学、メディア研究、ジェンダー論 | 別館2階 研修室1 |
| 2 | 犬塚 典子 | 女性研究者支援センター | 教育行政学 | 女性研究者支援センター |
| 3 | 常見 俊直 | 理学研究科 | 素粒子物理学 | 別館2階 研修室2 |
| 4 | 粟屋 智就 | 医学部附属病院 | 小児神経学、発生生物学 | 本館2階 山内ホール |
| 5 | 矢野 育子 | 薬学研究科 | 医療薬学 | 別館地階 会議室 |
| 6 | 山肩 洋子 | 情報学研究科 | マルチメディア情報処理 | 別館1階 和室1 |
| 7 | 落合 久美子 | 農学研究科 | 植物栄養学、土壌学 | G棟セミナー室1 |
| 8 | 工藤 春代 | 農学研究科 | 農業経済学 | G棟セミナー室2 |
| 9 | 稲葉 カヨ | 生命科学研究科 | 免疫学 | G棟セミナー室3 |

学生スタッフ

| | 氏名 | 所属 |
|---|--------|------------|
| 1 | 下原 直緒 | 文学部 |
| | 澤崎 拓真 | 文学部 |
| | 富野 瑞葉 | 法学部 |
| 2 | 改森 実奈 | 法学部 |
| | 及川 陽太 | 経済学部 |
| | 鈴木 慎介 | 文学部 |
| 3 | 半場 悠 | 理学部 |
| | 渡邊 達彦 | 理学部 |
| 4 | 西尾 周朗 | 医学部 |
| | 野原 静華 | 医学部 |
| 5 | 高見 理沙 | 薬学部 |
| | 土橋 泰成 | 法学部 |
| 6 | 秋津 裕 | エネルギー科学研究科 |
| | 福富 雄一 | 理学部 |
| | 井上 史嵐 | 経済学部 |
| 7 | 香月 和敬 | 農学部 |
| | 磯田 珠奈子 | 理学部 |
| 8 | 柘植 仁美 | 農学部 |
| | 中野 さゆり | 医学部 |
| | 菊地 淳彦 | 経済学部 |
| 9 | 向平 妃沙 | 医学部 |
| | 金岡 歩美 | 理学部 |



プログラム

| | |
|-------------|---------------------------------|
| 10:15-10:25 | 開会の挨拶（副学長 稲葉カヨ） |
| 10:25-10:45 | 京大生の学生生活（理事 赤松明彦） |
| 10:45-11:15 | 自分の未来をデザインする （教育学研究科教授 鈴木晶子） |
| 11:15-11:45 | 講師紹介、グループ討論用質問用紙記入 |
| 11:45-13:00 | 昼休憩 |
| 13:00-14:30 | 【高校生】グループ討論 【保護者】キャンパスツアー |
| 14:30-14:45 | 全体会会場へ移動、全体会用質問用紙記入 |
| 14:45-16:05 | 全体での話し合い |
| 16:05-16:30 | アンケート記入・回収 |
| 16:30 | 解散 |

連載：研究者になる！－第45回－

夢中になるとは

地球環境学堂・助教
落合 知帆



アメリカの大学で社会学を専攻し卒業後、アルバイトとして開発コンサルタントで働く機会を頂いた。初めは英語が話せる雑用から始まり、ベトナムやブラジルでの下水道整備事業のコーディネーターとして採用していただき、現在の防災研究につながるプロジェクトに携わった。7年間弱、コンサルタントでの業務で海外経験を積んでいくが、次第に専門性が問われるようになり、また、その頃から社会配慮がプロジェクトの中に取り込まれるようになり社会的専門性が必要となってきた。社会分野を担当するものの、その手法や結果に不満と不安を感じていた。「もっと専門的な知識を得なければ」そんな気持ちから、30歳を機に地球環境学堂の修士課程に入学することにした。修士課程を終えたら会社に戻るつもりが、もう少し学びたい、専門性を身に付けたい、もっと深く考えてみたいという気持ちから博士課程に進んだ。

博士課程では、途上国支援の現場で行われているワークショップ型の防災教育に疑問を持ち、日本の伝統的な自主防災を研究した。漁師町や山間部集落の人々の生活を見聞きし、消防団を追っかけ、漁師たちの納屋でお酒を飲みながら祭りを観察し、ご親切にも宿舎を提供して下さる住民の方の家でつるぐ生活を、それ以来過ごしている。博士論文をまとめるに当たっては、既に現在の職に就いていたので研究室所属の学生たちの生活や論文のお手伝いをしながらではなかなか集中して分析作業や執筆に取り組めず、論文の不採用通知を受け取る日々の中で精神的に落ち込んだり、涙が出たり、食べ過ぎたり食べな過ぎたりで体重が大きく変化するときもあった。そんな時に私を支えてくれたのがフィールドでお世話になるおじさんやおばさんたちだった。漁師の親方は人の上に立つことの難しさや、運命・宿命について話してくれたこともあった。フィールドのお母さんがおいしい太刀魚の梅干煮とおかゆを作って癒してくれたこともあった。そんな皆さんの支えがあって、私は今でもこの研究を続けていられる。

私も未だに「研究者とは」何かがよく分からない。ただ、お世話になった皆さんにどのような恩返しができるのかを考えるようにしている。私を指導して下さった教授の先生は、私が論文執筆で足踏みをしている時に、「自分が文章を作ろうとするから進まない。彼らが言ってくれた言葉を素直に書けばいい」とよく言ってくれました。私は、私が知り合った普通の、しかし喜びと楽しみと問題とに溢れた人達の生活を記録し、そこに日常と災害との関わりや防災の学びを見出していくことが研究だと考えている。京都大学で知り合ったある教授の先生が、小さな貝やら虫をたくさん集めていて、それを「見てください、こんなにいろんな種類があるんですよ」と見せてくれた。私はその先生に「研究ってどうしたらいいんですかね?」と問いかけると、その先生は「夢中になることでしょ」と教えてくれた。私はそこに住む様々な個性あふれる人間に夢中なんだと思う。そしてその人達がどのように地域で生活し、そして災害と関わりを持ちながら、また影響されながら生きているのかを少しでも理解したいと思っている。

現在、京都大学若手人材海外派遣事業「ジョン万プログラム」に採用していただき、カリフォルニア大学バークレー校に客員研究員として席を置いている。約20年前前に起きた火災後のコミュニティ再建と自治会の役割についてこの1年をかけて調査研究する予定だ。個人的な経験をインタビューしたり、図書館にファイルされた過去の新聞記事の一つひとつ読みだりと貴重な時間を過ごしている。また、定期的に行われる諸外国からの研究者の研究発表や議論を聞くのも大変勉強になる。1年という長いようで短い期間で自分に何ができるのかを悩みつつ、学際的な環境の中で何か方向性を見出したいと考えている。

最後に、私は京都大学内で女性研究者採用促進に関わった諸先輩・諸先生方の理解と努力のお陰でこの職に就くことができた。アメリカの大学は女性教員の比率が高く、また男性教員の女性教員に対する意識も協力的で尊重されていると感じる。京都大学においてもこのような環境が築かれることを望む。



Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>



講演会「介護する家族にとってのターニングポイント」

介護に関する講演会シリーズ 第4回「介護する家族にとってのターニングポイント」
 日時 2014年3月1日(土) 13:30から15:00 講演 (13:00 受付開始)
 15:00から16:30 交流会
 場所 南部総合研究1号館・再生研西館 共同セミナー室1
 講演者 川口有美子(日本ALS協会理事)

ある日突然、家族が病いに倒れ、介護が自分の問題となったら…。介護は突然やってきて、長期に及ぶこともあります。ALSという難病を抱えて生きる実母を介護した経験から、素晴らしい著作を生み出した川口有美子さんをお迎えして、介護のある日常とはどんな日々だったのかを語っていただきます。病いを生きる日々を支えるのはケアする人や家族です。介護する家族は様々な決断を迫られます。介護を経験した人もそうでない人も、それぞれの立場から、一緒に介護を考えてみませんか。講演会後には講演者と参加者の交流会も予定しています。



ストレスマネジメント講座「仕事に、学問に、恋をして(エンゲイジして)、あなたに、京都大学に、活力を！」



ワーク・エンゲイジメントに注目した個人と組織の活性化
 :より健康でより高いパフォーマンスに向けて

日時 2014年3月7日(金) 13:00から15:00
 場所 文学部校舎2階 第6講義室
 講師 島津 明人(東京大学医学系研究科・准教授)
 対象 京都大学の教職員、学生(60名、先着順)
 内容 ①ストレスとの上手な付き合い方
 ②健康を維持し、パフォーマンスを上げるために有効な知識、技術
 ※講演の他、ワークショップを行います。

東京大学医学系研究科 島津明人先生のご講演、ワークショップを通して、ストレスとの上手な付き合い方や、健康を維持し、パフォーマンスを上げるために有効な知識・技術を習得しませんか。

たちばな賞(京都大学優秀女性研究者賞)表彰式と研究発表

第6回京都大学たちばな賞(優秀女性研究者賞)の表彰式と研究発表、優秀女性研究者奨励賞の表彰を行います。

日時 2014年3月3日(月) 11:00から12:00
 場所 医学部芝蘭会館 稲盛ホール

◆たちばな賞(優秀女性研究者賞)受賞者

- 【学生部門】 片山 裕美子(人間・環境学研究科)
 「グリーンフォトニクスを実現する希土類イオン添加波長変換材料の設計と発光機構解明」
- 【研究者部門】 王 柳蘭(白眉センター(地域研究統合情報センター))
 「アジアにおける中国系ディアスポラと多元的共生空間の生成」

◆優秀女性研究者奨励賞 受賞者

- 【学生部門】 奥村 優子(文学研究科)
- 【研究者部門】 酒井 章子(生態学研究センター)



広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ活動報告



主査 山末 英嗣
(エネルギー科学研究科)

平成 25 年度の活動として、広報事業では、シンポジウム「京都で研究するー外国人研究者が語る京都大学での経験ー: International Researchers Talk About Their Experiences At Kyoto University」を行った。今回で 7 回目となるキャリアデザイン・シンポジウムであるが、初めて、英語を使用言語とした。出席者からの評価は高く、外国人学生・教員から今後も英語によるシンポジウムの開催を期待されていることが分かった。

社会連携事業としては、第 8 回女子中高生のための

関西科学塾、ジュニアキャンパス 2013、女子高生・

車座フォーラム 2013 を学内にて開催し、次世代育成のための活動を行なった。これからの社会を担う若い女子学生に対し、研究職に興味を持たせるような機会を提供するとともに、更なる工夫、改善の必要性を感じた。

相談事業としては、3月に東京大学医学系研究科島津明人准教授を招き、ストレスマネジメント講座「仕事に、学問に、恋をして(エンゲイジして)、あなたに、京都大学に、活力を！」を開催する。この講座を通し、学生や教職員に対してストレスとの上手な付き合い方、健康を維持しパフォーマンスを上げるために有効な知識・技術の習得についての情報を提供していく。

そして、センターの活動について、ホームページや全 6 号のニュースレターを通して、学内外に広報活動を行った。



育児・介護支援事業ワーキンググループ活動報告



主査 山肩 洋子
(情報学研究科)

当ワーキンググループは、京都大学の女性研究者および女子学生の育児と介護に関する支援活動を行っている。今年度はまず 2013 年 7 月 21 日に、「介護のつどい」を行った。

参加者は実際に介護に携わっている方が過半数で、介護に関する悩みを打ち明け、互いに共感しあうことで心が軽くなったという声が寄せられた。

次に 2013 年 9 月 1 日から、待機乳児保育室を開室した。今年度は仮住まいである橘会館での開室であるため、昨年度 12 名であった定員が 9 名へと削減されている。利用希望者数は一昨年ごろから、定員 12 名をかるうじて超えない程度で推移していたため、定員が 3 名減った今年度は、希望者が定員を超えることが懸念されたが、2 月 4 日現在までに事前登録されたもので考慮すれば、定員以内に収まる予定である。来年度以降は、保育室として設計された新しい施設を開室を予定しており、より充実した内容で保育が可能であると期待している。

また、2014 年 3 月 1 日に、「介護の集い」を予定している。招待講演者として、ALS に罹患した実母の介護に

13 年間携わり、著書が第 41 回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞された川口有美子氏をお呼びする。これまで当 WG が行ってきた介護のイベントは、参加者を京大関係者とその家族に限定してきたが、今回初めて定員を設けて一般の参加者を受け入れることにより、社会貢献の役割も果たしたいと考えている。

最後に、本 WG 事業については、推進員の多大な協力により実施できたことを報告するとともに、この場を借りて、御礼を申し上げたい。



病児保育事業ワーキンググループ活動報告



主査 足立 壮一
(医学研究科)

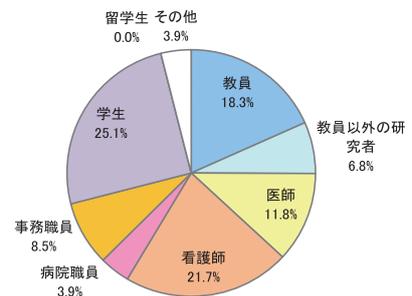
京都大学女性研究者支援センター・病児保育室「こもも」(以下、病児保育室)は、京都大学に在籍する全ての教職員・学生の子供(生後6ヶ月から小学校3年生)を対象とし、急な疾病に

より保育園/幼稚園、小学校などに通うことの出来ない病中病後児の保育を行っている。事前登録制による運用で、登録者数はのべ636名、うち平成25年度の新規登録者は74名と年々増加している(平成26年1月末現在)。定員5名(感染隔離室1名を含む)であり、平成25年度は287名の利用があった(平成26年1月末現在)。利用状況は感染症の流行に大きく左右されており、今年度は例年に比してやや利用率が少ない傾向にあるが、利用者の感想としては、概ね良好である。また、京大病院オープンホスピタルやホームページ等を通じての広報活動も継続して行った。

今年度は現時点での利用率が、やや低くとどまっているにも関わらず、保育人数の増加や保育許可基準の引き下げを求める要望がある。また予約や利用の手続き上の問題点への指摘もみられた。感染対策上、困難な点もあ

るが、育児を行いつつ研究活動を継続することの可能な環境を実現するため、よりよい運営方法を検討する必要がある。

利用者の職種別分布



1日平均利用者数(2013年1月~12月)



就労支援事業ワーキンググループ活動報告



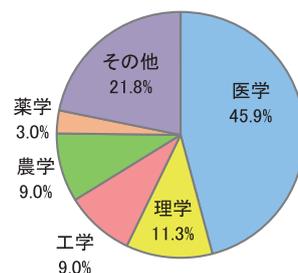
主査 押川 文子
(地域研究統合情報センター)

本WGの主要活動である「研究・実験補助者雇用制度」については、育児や介護期にある研究者の研究継続支援という目的に即して応募しやすく、また審査過程の透明性と成果検証を確実なものとするために、募集要領・

様式の一部改訂、利用後のアンケート質問事項改定、利用者の声のホームページ掲載など改良を加えた。昨年度から審査委員会も改組し、多様な分野の申請を審査する体制を整えている。

本年度中の利用者数は、第1期(4月~9月)18名、第2期16名、また応募者数は平成24年度第2期32名、平成25年度第1期22名と、ここ数年増加傾向にある。利用者アンケートにもみるように、本制度は育児・子育て期の研究者支援として大きな役割を果たしているが、必要性が認められても支援できない事例の増加、半期単

利用者の研究分野



位の制度運用等、今後更なる拡充と改善の取組が必要であることも明らかになっている。この点も含めて、ワークライフバランス向上に資する取組を今後も継続したいと考えている。

連載：研究者になる！－第46回－

「国際取引法」と私

法学研究科・准教授

増田 史子

私の専攻である「国際取引法」は、伝統的な法解釈学とは違って法典より商取引の方を基点に法学をやるという領域で、研究分野としては未成熟である。しかも、私自身は、どちらかという成り行きでこれを専攻することになった。京大法学部4



回生だったときに、当時この科目の担当であった教授から助手に誘われて、お給料つきだし何かよくわからないけれど面白そうだ、という程度の認識でこの世界に入ったのである。だから、これから研究者になろうと真摯に考えている方のお役に立つようなところはあまりないか、あるとしても反面教師としてではないかと思う。

さて、大学4年時にお誘いにはのってみたいものの、その時点ではこの分野の詳細を知らなかったから、助手の間に取り組む研究テーマは、先生と相談しながら決めるような形になった。選んだのは、運送法の中で国際的に見れば比較的ホットであった「複合運送契約」である。運送法や海商法は、日本ではかなりマイナーというかマニアックな分野だが、この先生は重要な領域とお考えで、また私もなぜか気に入ったので、これは案外すんなり決まった。ただ、この先生は私の卒業と同時に定年を迎えられることになっていたため、正式な指導教授は隣接分野の別の先生にお願いし、また別の隣接分野の先生方からも、実際には、ある程度の指導を受けられるような形にした上で、京大を去って行かれた。そしていよいよ研究を始めたときに直面したのは、国内における研究の乏しさである。法学では、外国法を調査して、そこから日本法にとっての何らかの示唆を得る、という比較法的な研究手法が一般的である。他に良い方法も知らないの、周囲を見習いつつ同様の手法でテーマに挑んだのだが、どうも何十年も前の現実を前提にしているらしい日本の議論と、現代の話をしている諸外国の議論とはうまくかみ合わない。このギャップは、議論の前提になっている法律自体がそもそも国によってかなり違うこと、日本にも似たような国際取引は存在するのに、法学研究の対象としてあまり取り上げられてこなかったことに由来する。当時はそう認識し、多少なりともこうしたギャッ

プを縮め、現代日本の商取引にとって意味のあるものにしたくて、最初はかなり長大な論文を書いた。

こうして国際的な取引を法学研究の対象とすることの難しさを薄々感じながらも、助手論文は何とか書き上げ、2003年に助教授になったのだが、そこからは隘路にはまってしまう。元々自信の持てない性質である上に、「国際取引法」という名称によって表される対象の広さに比べて、自身が知っていることはごく限られているから、京大で公式にこういう看板を掲げるのはとにかく不安である。とりえず知見を広げる必要があると思って、学外の研究会等にも積極的に参加するようにしてみた。そこで気づいたのは、純粋な研究者で、この看板の下で取引法を研究している方はほとんどいない、という事実である。多くは実務家出身で、経験の一つの拠り所に研究されているか、純粋な研究者であれば、実質的には隣接分野に属する方で、国際的な事案への法の適用の問題に特化して研究しておられる。しかも、それぞれやっていることはてんでばらばらである。私自身は、後者はさほど好きになれないし、正直これを取引法と呼ぶのはどうかと思うのだが、さりとて前者側に立とうとすると実務を知らないという壁にぶつかる。肩書きは役には立って人脈は広がったものの、専門分野の突っ込んだ話ができる同志は見つけられず、看板に対する責任感から不安と焦りばかり募って、仕舞にはほとんど書けない状態に陥ってしまった。国際取引では英米法のプレゼンスがとても高いので、一時イギリスに留学し大変勉強にはなったのだが、研究の方向性については明確な答えを見出せずに帰ってきた。

幸いこういう状態は比較的最近になって解消され、今は研究が楽しい。主な理由は、運送法を改正する話が出てきて、この分野の数少ない研究者や実務家と接する機会が格段に増えたことにあると思う。結局、ここ10年程の苦悩は、研究のスタート地点でやや覚悟が足りず、自分にとっての専門家が集う場を選ばなかったこと、過剰適応気味になって自身の方向性を見失ってしまったことであつた気がする。研究は孤独になりがちだし、専門家を目指すのだから、最初はその道の師匠の下で学ぶのがよい。そして迷ったときは自分自身にきいてみるしかない。結局、そういう当たり前のことが大事なのかなと改めて感じている。



Center for Women Researchers

〒 606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

Ⅱ 「育児・介護支援」事業

育児・介護支援事業ワーキンググループ活動報告

当ワーキンググループは、京都大学の女性研究者および女子学生の育児と介護に関する支援活動を行っている。今年度はまず2013年7月21日に、「介護のつどい」を行った。参加者は実際に介護に携わっている方が過半数で、介護に関する悩みを打ち明け、互いに共感しあうことで心が軽くなったという声が寄せられた。



次に2013年9月1日から、待機乳児保育室を開室した。今年度は仮住まいである橘会館での開室であるため、昨年度12名であった定員が9名へと削減されている。利用希望者数は一昨年ごろから、定員12名をかるうじて超えない程度で推移していたため、定員が3名減った今年度は、希望者が定員を超えることが懸念されたが、2月4日現在までに事前登録されたもので考慮すれば、定員以内に収まる予定である。来年度以降は、保育室として設計された新しい施設で開室を予定しており、より充実した内容で保育が可能であると期待している。

また、2014年3月1日に、「介護の集い」を予定している。招待講演者として、ALSに罹患した実母の介護に13年間携わり、著書が第41回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞された川口有美子氏をお呼びする。これまで当WGが行ってきた介護のイベントは、参加者を京大関係者とその家族に限定してきたが、今回初めて定員を設けて一般の参加者を受け入れることにより、社会貢献の役割も果たしたいと考えている。

最後に、本WG事業については、推進員の多大な協力により実施できたことを報告するとともに、この場を借りて、御礼を申し上げたい。

育児・介護支援事業WG主査 山肩洋子

■活動記録

- 9月2日(月) 平成25年度保育園入園待機乳児保育室を開室
- 9月9日(月) 男女共同参画推進室にてベビーシッター利用育児支援事業を開始し、その広報を行った
- 10月29日(火) 待機乳児保育室利用者懇談会

京都大学女性研究者支援センター 平成 25 年度「保育園入園待機乳児のための保育施設」利用案内

京都大学女性研究者支援センターでは、女子学生、女性研究者の研究と育児の両立を支援することを目的とし、女性研究者支援センター内に、「平成 25 年度保育園入園待機乳児のための保育施設」を設けます。この保育施設は、自治体に保育園入園申請をおこなったが、入園待ちを余儀なくされている女性研究者等を対象とします。運営は、民間企業に委託し、大学が一部費用を負担して実施します。

◇保育施設の概要

施設の名称: 京都大学女性研究者支援センター保育園入園待機乳児保育室
 施設の所在地: 京都市左京区吉田橋町 京都大学女性研究者支援センター内
 受入定員: 9 名まで

◇保育の概要

開室期間: 平成 25 年 9 月 1 日から平成 26 年 3 月 31 日
 開室日: 月曜日～金曜日 (国民の祝日に関する法律に定める休日、12 月 29 日～翌年 1 月 3 日、及びその他の事情により京都大学女性研究者支援センター長が開室しないと判断した日を除く。)
 開室時間: 9 時～18 時
 時間外保育は、8 時～9 時及び 18 時～20 時までとし、別途利用料が必要です。
 対象乳児: 原則として入室時生後 9 週目～平成 21 年 3 月末時点で 15 ヶ月未満の健康な乳児 (15 カ月になる月の前月まで利用できます。)
 運営体制: 運営を保育業者に委託します。
 ※保育時に必要なもの等についての詳細は、別紙4「平成 25 年度京都大学の女性研究者等を対象とした保育園入園待機乳児保育室利用の手引き」(以下「保育室利用の手引き」という。)をご覧ください。



保育園入園待機乳児 保育室



2013 年 9 月 1 日開室 愛称: ゆりかご

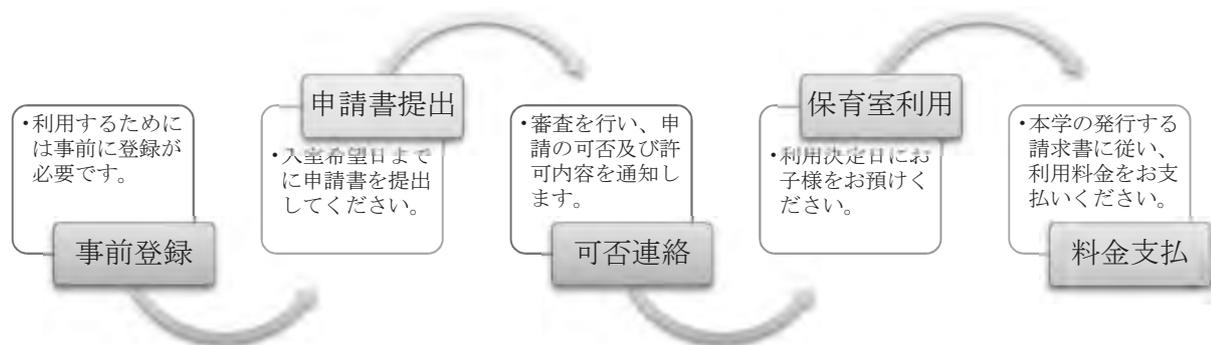
- ・開室期間: 平成 25 年 9 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日
- ・開室日時: 月曜日～金曜日 午前 9 時～午後 6 時
(時間外保育は、午前 8 時から 9 時 / 午後 6 時から 8 時)
- ・保育場所: 京都大学女性研究者支援センター
- ・利用資格: 京都大学に所属する女子学生・女性研究者
- ・対象乳児: 生後 9 週目～15 ヶ月未満 (退室時) の健康な乳児
- ・定員: 9 名

詳細は女性研究者支援センターのホームページで!

◇利用条件

利用資格: 原則として京都大学に所属する女子学生・女性研究者
 利用料金 (税込、乳児 1 人あたり):
 週 5 日利用: 50,000 円/月、学生 40,000 円/月
 週 3 日利用: 35,000 円/月、学生 28,000 円/月
 週 2 日利用: 25,000 円/月、学生 20,000 円/月
 ※1) 週 3 日、週 2 日の利用は、あらかじめ曜日を指定して、利用するものとします。
 ※2) 月の途中の入・退室は日割り (1 日 2,500 円/学生 2,000 円 (税込)) 計算も可能です。
 ※3) 時間外保育料金は、30 分 1,000 円/学生 800 円 (税込、乳児 1 人あたり) です。
 ※4) 紙おむつ、ミルク、おやつ、食事等は利用料金に含まれませんので保護者が持参してください。
 ※5) 双子等の複数の乳児が利用する場合の利用料金は、乳児 1 人当たりについて、所定の利用料金に 80/100 を乗じた額とします。
 入室申込: 1 ヶ月単位での申込みとします。但し、入・退室の月はこの限りではありません。

◇利用方法



1. 事前登録

利用希望の方は、別紙 1「事前登録票」に必要事項を記入のうえ、事前登録を行ってください。事前登録票は、ホームページ (<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp>) からダウンロードし、メールで送付することもできます。

送付先:京都市左京区吉田橋町

京都大学女性研究者支援センター保育室利用係

メールアドレス:w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

2. 保育室利用申請書提出

原則として、入室希望日の 1 ヶ月前までに、別紙 2「利用申請書」を提出してください。送付先・方法は事前登録と同様です。ただし、特別な事由のある場合は、事前登録票と合わせて、入室希望日の 1 ヶ月以内の提出も受け付けます。なお、申請事項に変更が生じた場合は、別紙 3「利用変更申請書」に変更内容を記載し提出してください。

なお、保育室入室までに自治体が発行する利用不可通知の控えを提出する必要があります。

3. 申請結果通知書の交付

受入の可否については書類審査を行って決定し、女性研

究者支援センターから申請者に「申請結果通知書」によりお知らせします。

4. 保育室の利用

保育室の利用については、別紙 4「保育室利用の手引き」及び「京都大学女性研究者支援センター保育園入園待機乳児保育室利用規程」を遵守し、利用してください。

5. 料金の支払い

利用者は、所定の方法で定められた期日までに、本学が発行する請求書によりお支払いください。

*利用登録・申請において得た個人に関わる各種情報は、保育室の各業務及びそれらの業務に関する連絡・問い合わせのために利用します。

別紙一覧(省略)

別紙 1:「保育園入園待機乳児保育室」利用の事前登録票

別紙 2:「保育園入園待機乳児保育室」利用申請書

別紙 3:「保育園入園待機乳児保育室」利用変更申請書

別紙 4:「保育園入園待機乳児保育室」利用の手引き



■保護者交流会



女性研究者支援センター待機乳児保育室 保護者懇談会開催日のお知らせ

2013年10月29日(火)
12:00~13:00

(コアタイム 12:15~12:45)

※ご飯を食べながら行いますのでお昼ご飯をご持参ください。
※途中参加・途中退席も可能です。

- ▼ 実際に保育してくださっている保育士さんによる
保育の様子を紹介およびスライドショー
- ▼ 保護者座談会
- ▼ センターからのお願い

司会：育児・介護WG主査 山肩洋子



◇第1回◇

日時：2013年10月29日 12:00~13:00

場所：女性研究者支援センター会議室

参加者：保護者6名、保育士(小林先生、福田先生)、
育児・介護WG主査(山肩洋子先生)

■利用者からの感想



約2年前に第1子も利用させていただき、今回は2回目の利用となりました。産後3ヶ月を過ぎると精神的に少し余裕が出てくるとともに、今後のこと、特に出産前に行った実験データを早く形にしたいという一種の焦燥感が少しずつ出てきました。上の子のときと違い、研究データもそれなりに積み上げてきていた状況でしたので、その焦燥感は前よりも少し強かったように思います。上の子のときと同様に生後半年をめどに復帰したいと考えましたが、上の子を預けている保育所では0歳児は入所できず、、、再度この待機乳児保育室に利用申請、無事入室することがで

きました。おかげで実験結果の解析や今後の方針など上司としっかり discussion することができほっとしています。上の子のときにも感じておりましたが、こちらの保育室では非常にアットホームな雰囲気、いつ行っても子供はニコニコしています。これはきっと保育士さんが子供と丁寧に関わってくれているからだと思います。前回同様、子供と私をこれ以上望みようがないという理想的な環境に置いていただけて、私は安心して研究に集中することができ、とても感謝しています。(医学研究科 学生)



産後休暇の取得後、母に週3回ほど手伝いに来てもらったり、家族で休みを交代で取ったりしながら、なんとか職場復帰を果たしました。しかし、高齢で遠方に住む母の体力を考えると、そんな生活も3カ月が限界で育児休暇を取得しなければいけないのかなと思い悩んでいたころ、待機乳児保育室に入室することができました。認可保育所への年度途中からの入所が本当に難しい昨今、年度途中から職場復帰ができたのは、職場にこのような保育室があった御蔭です。待機乳児保育室では、保育士さんた



私には現在、6歳の長女、3歳の長男、2歳の次女、そして現在待機乳児保育室でお世話になっております5ヶ月の次男の4人の子供がおります。大学院博士課程在学中に長男と次女の産産を経験いたしました。長男は幸いすぐに長女の通う保育園に入れていただくことができましたのですが、次女は同じようには行かず、3ヶ月ほど待機乳児保育室にお世話になりました。そして現在次男が生後2ヶ月の頃よりお世話になっております。2年前と現在とで、保育場所(女性研究者支援センターの建て替えのため)や保育士の方々も異なりますが、どちらも大変きめ細やかに



京都市の認可保育所は年度半ばには入る余地がなく、また、無認可の保育所は場所・保育料などの問題から通わせるのが難しく困っていました。指導教官から知らせて頂き、この保育室に申請しました。保育室がなければ、研究の再開は難しかったと思います。大学に近く安心でしたし、授乳室も準備されていて助かりました。ある程度研究のリズムを考慮して頂けたことや、女性研究者支援センターの雰囲気も含めて、心強く感じました。少人数でのん



今回、待機乳児保育室を利用させていただき、研究への復帰が早くでき、大変助かりました。ブランクの期間が長くなってしまうと、復帰へのハードルが高くなってしまいますが、早期に復帰できたことで、業務に参加することもできました。大学から近く、急な発熱の時もすぐに行け、その日の出来事もしっかり記載していただいているので、今日あったことがわかり、不安なことがあっても、保育士と色々相談できる点でも安心でした。認可の保育所に入った時の

ちから育児のアドバイスがもらえ、多様な視点から子供の成長を見守って頂けたので、不慣れな初めての育児を1人でこなすより、私にとっては良かったのではないかと思います。加えて、子供も毎日散歩に連れて行ってもらえたり、お友達との関わりが持てたりと刺激的で楽しい毎日を送ったのではないかと思います。年度途中から利用できたこと、そして職場の中にある保育室なので安心して子供を預けられた御蔭で順調に研究に精進できたことに、とても感謝しております。ありがとうございました。(理学研究科 教員)

保育をしていただき、感謝しております。授乳のタイミングなどについても、保育士さんと連絡を取りながら調整させていただいたのでとても助かりました。年々保育園への入所が厳しくなる中、余儀なく待機乳児となった場合に待機乳児保育室の存在は大変ありがたいものです。私も待機乳児保育室がなければ、予定通り復帰することもままならなかったと思います。制度として、まだ改善すべき点があるとは思いますが、是非とも続けていっていただきたい女性研究者支援であると思っております。(医学研究科 研究員)

びり過ごせたことも、子どもには良かったと思います。制度上難しいかもしれませんが、離乳食の対応や、月齢制限を緩やかにして頂けたら、より利用しやすくなるのではと思います。乳児がいると色々制限もありますが、このような制度がより一層充実し、子育てをしながら研究を続けることが当たり前になればと願っています。どうもありがとうございました。(文学研究科 研究員)

事を考え、家庭と保育室でトータルして子どもの生活リズムを整えていこうとさせていただきます点もよかったです。避難訓練も定期的に行い、危機管理もしっかりされているのも安心でした。保育時間は長い方だと思いますが、8時から勤務の場合があり、7時半から保育していただけると、もっとよかったです。最後になりましたが、運営して下さった女性研究者支援センターの皆様、保育士の皆様に深謝いたします。(医学研究科 学生)

おむかえ保育

■利用案内

決まった曜日だけ子どもを保育園に迎えに行けない。急遽夕方に打合せが入り、保育園のお迎えに間に合わない…などで、困っていませんか。そんな女性研究者・女子学生のために、女性研究者支援センターでは「おむかえ保育」を開設します。この保育は、研究等仕事の都合で子どもを保育機関に迎えに行けない保護者に代わり、保育者が子どもを迎えに行き、女性研究者支援センターで一時保育を行うものです。運営については、保育業者に委託して実施します。ご利用を希望される方は、下記の内容を熟読のうえ、お申し込みください。

◇利用条件

利用資格:

原則として京都大学に所属する女子学生・女性研究者

保育対象:

生後2カ月から小学3年生までの利用資格者の子ども

利用定員:

子ども5人程度(兄弟、年齢構成により異なる場合があります)

利用料金:

①保育料金 920円(税込)/30分～1,360円(税込)/30分(時間帯により異なる)

* 子ども1人についての料金です。

* 利用は2時間以上、30分単位で受け付けます。

* 学生は保育料金のみ、大学が半額を負担します。

②その他利用手数料(状況により異なる)

※交通費・夕食等は別途実費が必要です。

※詳細については別紙3「おむかえ保育利用料金表」をご覧ください。

1. 事前登録(無料)

別紙1「おむかえ保育事前登録票」に必要事項を記入のうえ、利用希望日の2日前の15時までに事前登録を行ってください。登録事項に変更が生じた場合は、再提出してください。

2. 利用方法

(1) 利用申込(FAX)

利用希望日の2日前の15時までに、別紙2「おむかえ保育申込票」を、センターにFAX(075-753-2436)にて申込みをしてください。

事前登録票を2日前までに提出済みで、特別な事由のある場合は、利用希望当日の15時までで申込を受付けます。ただし、利用希望当日の申込みの場合は、保育者手配の都合によりご希望に添えない場合がありますのであらかじめご了承ください。

(2) 利用申込受付連絡



おむかえに行つて

女性研究者支援センターで保育します

子どもを保育機関に迎えに行けないうえに、研究者に代わってセンターが子どもを迎えに行き、センターの保育室にて保育を行います。

利用日時: 日曜日から金曜日 午後5時から10時
利用資格: 原則として本学に所属する女子学生、女性研究者
利用定員: 生後2カ月から小学3年生までの子ども、5名

登録と申込が必要です。有料です。1学期学生・学年は半額減額が適応されます。

詳細は、女性研究者支援センターのホームページを参照してください。
(URL) <http://www.uwakiyobu-u.ac.jp/> (TEL) 753-2437

おむかえ保育

別紙2の申込票の受信を確認後、センターから、指定された連絡先に受付確認の連絡をします。

(3) 利用可否連絡

申込日の翌開室日に、センターから利用の可否を電話連絡します。当日申込の場合は、16:30までに利用の可否を電話連絡します。

(4) 保育者との打合せ

保育者手配が可能な場合、利用前日(当日申込の場合は当日)に保育者から保護者に電話がありますので、迎えに行く保育機関の場所、方法、夕食の有無、実費支払いの金額等について、トラブルにならないよう詳細に打ち合わせを行ってください。

子どもの夕食は、保護者が用意するか、保育者に購入を希望

する場合は、コンビニエンスストア等で購入できるもの(おにぎり、パン等簡易なものに限る)を指定してください。

乳児のミルク、離乳食(レトルト食品など)、哺乳瓶、おむつ、着替え等は保護者が用意してください。

(5)利用

利用にあたっては、「京都大学女性研究者支援センターおむかえ保育利用規程」を遵守してください。

お子様が当日熱のある場合や、伝染病疾病の疑いのある場合は利用できません。この場合、キャンセル料が発生しますので、あらかじめご了承ください。

3. 料金の支払い

保護者は、所定の方法で定められた期日までに、本学が発行する請求書によりお支払いください。振込手数料は、保護者負担となります。

利用料金①、②に掲げる以外の料金(交通費、夕食費等)については、子どもをセンターに迎えに行った際、実費額を保育者へお支払いください。

◇保育について

保育場所：京都市左京区吉田橋町 京都大学女性研究者支援センター保育室

◇補償制度について

万一の事故の場合には、施設に起因する損害は国立大学法人総合損害保険、業務に起因する損害は保育委託業者の賠償責任保険が適用されます。

○事前登録票、申込票は、ホームページ

(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp>)からダウンロードできます。

○事前登録及び利用申込において得た個人に関わる各種情報は、おむかえ保育の各業務及びそれらの業務に関する連絡・問い合わせのために利用します。

別紙一覧(省略)

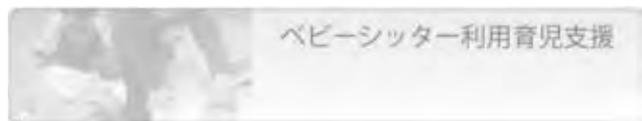
別紙1:「おむかえ保育事前登録票」

別紙2:「おむかえ保育申込票」

別紙3:「おむかえ保育利用料金表」

ベビーシッター利用育児支援

京都大学男女共同参画推進室が実施する「ベビーシッター利用育児支援」の情報をセンターHPに掲載し、協力を行いました。



京都大学の教職員の仕事と子育ての両立を支援するため、「ベビーシッター育児支援割引券」を発行して、ベビーシッターによる在宅保育サービス事業を行う者(以下「ベビーシッター事業者」という。)が提供するサービスを利用した場合に、その利用料金の一部を助成しています。

■ベビーシッター利用育児支援の概要

| | |
|----------|---|
| 利用対象者 | 原則として、配偶者も就労している本学教職員(本学で社会保険に加入している非常勤教職員を含む) |
| 対象児年齢 | 0歳～小学校3年生、その他健全育成上の世話を必要とする小学校6年生までの児童 |
| 割引金額 | 1日につき1家庭 1,700円 |
| 利用時の注意事項 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 就労のためにベビーシッターサービスを利用する場合があります。 2. 利用者の家庭内での保育あるいは保育所等への送迎を依頼する場合があります。(ベビーシッター宅等利用者の家庭以外での保育には使用できません。) 3. 割引券の利用可能枚数は1日1枚、1ヶ月24枚、1年間280枚まで <p>*詳細 とも未来財団(Web サイト)</p> |

■最初の利用方法

1. ベビーシッター事業者(Web サイト)から選んだベビーシッター事業者と事前に利用契約・利用申込みをしてください。
2. 下記の必要書類を男女共同参画推進室まで直接お持ちいただくか、学内便等でお送りください。
 - 1) ベビーシッター利用育児支援事業初回利用申込書
 - 2) ベビーシッター事業者との利用契約書(利用申込書の写し

※以下のことが明記されているかご確認ください。

- ・ベビーシッター事業者の住所・名称・代表者氏名
- ・利用者の住所・氏名
- ・サービス内容・料金
- ・その他必要な事項



- 3) 配偶者の在職証明書等
3. 学内便等で割引券が届きましたら、利用者記入欄に記入の上、利用時にベビーシッターに割引券を渡してください。ベビーシッターが「報告用半券」を返却しますので、必ず受け取ってください。(利用料金から、1,700円が差し引かれます。)
4. 割引券利用後の「報告用半券」及び未使用の割引券は、翌月5日までに男女共同参画推進室へ学内便等で提出してください。

■2回目以降の利用方法

1. 割引券の発行依頼をEメールにて、男女共同参画推進室までお送りください。

ベビーシッター育児支援割引券発行依頼(2回目以降)

所属・職名
氏 名
利 用 月 平成 年 月
希 望 枚 数 枚

2. 割引券が届いた以降は、最初の利用方法3、4と同じです。

■利用するベビーシッター事業者を変更した場合

ベビーシッター事業者変更届を、Eメールに添付して、男女共同参画推進室までお送りください。なお、変更届の提出と割引券の発行依頼を同時に行う場合は、変更届に発行希望枚数等を記載してください。

担当:男女共同参画推進室(総務部人事課労務管理室)

(内)吉田 2059、2235

E-mail fm@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp



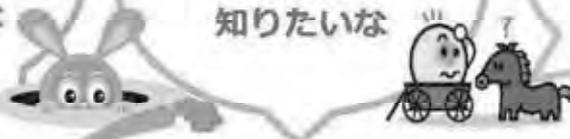
介護のつどい

(一緒にお話しませんか)

介護のなやみや
知恵を
共有したいな

腰を痛めない
介助方法を
知りたいな

介護サービスの
悩みを聞いて
ほしいな



日時：2013年7月27日(土)

13:00～15:00 (12:30受付開始)

場所：女性研究者支援センター

参加対象：京都大学の教職員、学生、そのご家族
(介護中の方以外のご参加も可) 15名

プログラム

- ・ほっと一息つきましょー ほっこりタイム
- ・介護の経験を語ろー ほのほのつながろう
- ・介護の悩み、工夫や知恵を交換しよう
- ・腰を痛めない介助法をちょっと紹介 など

申込方法：女性研究者支援センターホームページ

(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>)

介護のつどい申込入力フォームより、お申し込みください。

締切：2013年7月17日(水)

問合せ先：京都大学女性研究者支援センター

TEL：075-753-2437 E-mail：w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

介護のつどい「一緒にお話しませんか」

日時 2013年7月27日(土)13時から15時

場所 女性研究者支援センター

京都大学の教職員、学生、そのご家族を対象として、介護のつどい(一緒にお話しませんか)を開催しました。

自己紹介の後、介護経験のある方の体験談を聞きました。夫の介護をされている参加者からは、有料施設を利用したこともあるが、現在は夫婦2人で色々なサービスを利用しながら自宅で生活しており、健康に気を使い頑張っているというお話がありました。20年近く実母を一人で介護している方からは、ストレスがたまる、母に優しく接することができなくなるという悩みが出されました。とにかく自分が孤独で、誰か一人でも身近なところにいてほしいと思うとのことでした。また、介護サービスのスタッフにも、改善をお願いしたいこと

もあるという意見も出されました。

現状の制度や仕組みでは、身内に介護が必要になった場合、仕事と介護の両立は困難なので、仕事を辞めるしかないという結論に達しがちですが、子どもを親や保育園に預けて仕事を続ける女性が、介護となると『自分が仕事を辞めなくてはいけない』と思うのはなぜか?ということを考えてみました。やはり、一人で抱え込みすぎではないか?という考えが出されました。

介護はする側・される側の相互作用で、お互いの信頼関係が大切であること、介護者は軽い運動や歌を歌うなどのストレス解消法をもつとよいなど、介護のための知識や技術を互いに確認しました。

最後に、育児介護WG推進員の鈴木和代助教より、介助時に便利なグッズの紹介もありました。



京都大学女性研究者支援センター 介護に関する講演会シリーズ 第4回

介護する家族にとってのターニングポイント

ある日突然、家族が病いに倒れ、介護が自分の問題となったら…。介護は突然やってきて、長期に及ぶこともあります。ALSという難病を抱えて生きる実母を介護した経験から、素晴らしい著作を生み出した川口有美子さんをお迎えして、介護のある日常とはどんな日々だったのかを語っていただきます。介護する家族は様々な決断を迫られます。介護を経験した人もそうでない人も、それぞれの立場から、一緒に介護を考えてみませんか。講演会後には講演者と参加者の交流会も予定しています。ぜひお気軽にご参加下さい。多くの方々のご参加をお待ちしております。

講演者

川口 有美子



1962年生まれ。
1995年に実母がALSに罹患し、実家での介護が始まる。
以後13年間の介護生活を綴った「逝かない身体-ALS的日常生活を生きる」(2009年、医学書院)は、第41回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。2003年に訪問介護事業所ケアサポートモモ、NPO法人ALS/MND国際同盟会理事就任。日本ALS協会理事。

日時 2014年3月1日(土)

13:30～15:00 講演 (13:00 受付開始)
15:00～16:30 交流会

参加費 無料

保育あり

場所 京都大学南部総合研究1号館・再生研西館
共同セミナー室1

対象者：京都大学に所属する学生・教職員、その家族、一般の方

定員：60名(先着順、うち一般の方は30名まで)

申込方法：京都大学女性研究者支援センターのホームページ
(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>) の介護講演会
申込み入力フォームより、お申込みください。

問合せ先：京都大学女性研究者支援センター

TEL：075-753-2437

E-mail:w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp



～学内参加者のお子さんの保育室を隣室に開設します～

保育をご希望の方は、2月20日未までに、講演会参加申込時に、お子様の
名前(よみがな)・性別・年齢・連絡先をお知らせください。

◆対象年齢：生後3ヶ月～小学校3年生 ◆保育時間：13:00～17:00



※駐車場はございません。当日は公共交通機関をご利用ください。

主催：京都大学女性研究者支援センター 共催：京都大学男女共同参画推進室

Ⅲ 「病児保育」事業

病児保育事業ワーキンググループ活動報告

京都大学女性研究者支援センター・病児保育室「こもも」(以下、病児保育室)は、京都大学に在籍する全ての教職員・学生の子供(生後6ヶ月から小学校3年生)を対象とし、急な疾病により保育園／幼稚園、小学校などに通うことの出来ない病中病後児の保育を行っている。事前登録制による運用で、登録者数はのべ636名、うち平成25年度の新規登録者は74名と年々増加している(平成26年1月末現在)。定員5名(感染隔離室1名を含む)であり平成25年度は287名の利用があった(平成26年1月末現在)。利用状況は感染症の流行に大きく左右されており、今年度は例年に比してやや利用率が少ない傾向にあるが、利用者の感想としては別記の通り概ね良好である。また、京大病院オープンホスピタルやホームページ等を通じての広報活動も継続して行った。



今年度は現時点での利用率がやや低くとどまっているにもかかわらず、保育人数の増加や保育許可基準の引き下げを求める要望がある。また予約や利用の手続き上の問題点への指摘もみられた。感染対策上、困難な点もあるが、育児を行いつつ研究活動を継続することの可能な環境を実現するため、よりよい運営方法を検討する必要がある。

病児保育事業WG主査 足立壮一

■活動記録

- 7月13日(土) 京大病院オープンホスピタルにポスター参加
- 1月14日(火) 病児保育室にて、インフルエンザウィルス流行期の特別対応を開始
- 3月21日(金) 病児保育室の床補修
～23日(日)

病児保育室「こもも」

病児保育室は、2006年2月に附属病院内に開室しました。

2007年3月には、病児保育室登録者に対して利用者の声を聞くためのアンケート調査を行い、その結果出された意見に基づいて、2008年より、学生割引(半額)を導入、病児保育相談窓口の開設、お昼の食事メニューを増やす、ホームページに病児保育室のスタッフの紹介や保育室の紹介を写真入りで行うといった改善を行ってきました。

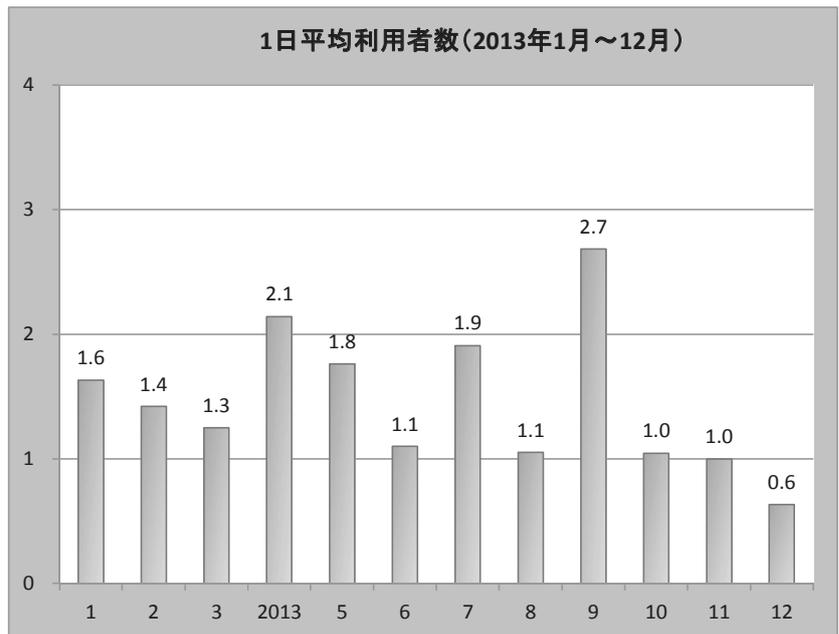
また、2009年2月には、感染隔離室の設置について、アンケートによる学内のニーズ調査を行い、2009年12月に病児保育室内に、感染隔離室を設置しました。

■病児保育室利用状況

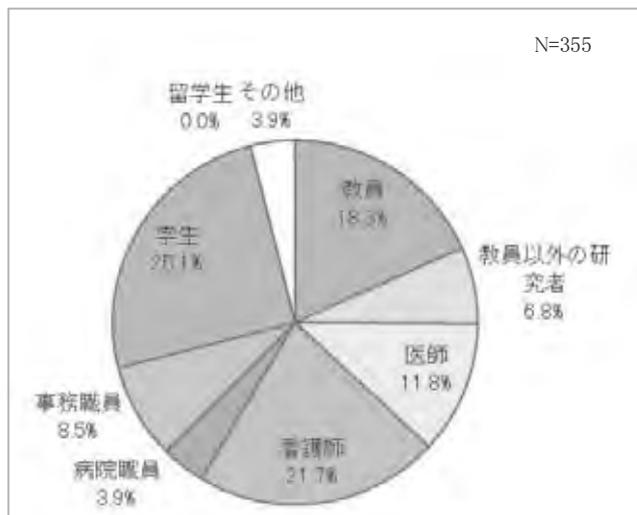
1.利用実績(2013年1月～2013年12月)

1)利用者数

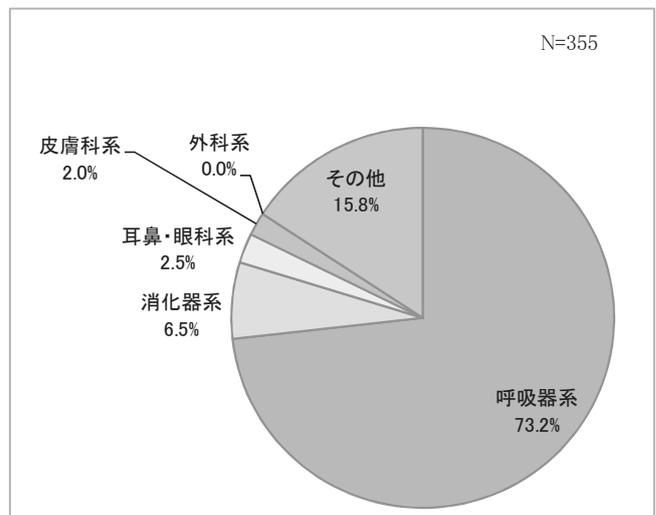
| 月 | 人数 | うち隔離室利用者 |
|-----|----|----------|
| 1月 | 31 | 1 |
| 2月 | 27 | 3 |
| 3月 | 25 | 2 |
| 4月 | 45 | 10 |
| 5月 | 37 | 5 |
| 6月 | 22 | 2 |
| 7月 | 42 | 4 |
| 8月 | 20 | 2 |
| 9月 | 51 | 9 |
| 10月 | 23 | 2 |
| 11月 | 20 | 1 |
| 12月 | 12 | 0 |



2)利用者の職種別分布



3)利用疾患別延べ人数



■こもも日記

病児保育室の様子をお知らせする「こもも日記」を、ホームページに掲載しました。

新生活がスタートしました。(2013年4月30日)

この時期、体調を崩す子どもが増えています。規則正しい生活をこころがけ、休みの日にはしっかり体をやすめるようにしましょう。

そして『こもも』にも新しいスタッフが加わりました。



保育士の佐野由佳です。今まで、保育園・学童保育・小・中学校で働いていました。その経験を活かして頑張りますのでよろしくお願いいたします。



正しい手洗いを身につけて(2013年6月24日)

食中毒は、温度と気温が上がるこの季節には要注意です。食中毒予防の基本の「手洗い」を忘れずに行いましょう！

保育室では洗面所に手洗いの順番が分かるように手順を貼っています。手洗いの順番を見ながら手洗いをしてくれている子どももたくさんいます。

いろいろな手洗い歌があります。歌いながら手を洗うと楽しく手洗いができます。時間の目安は約40秒、『ハッピーバースデー』の歌や『赤とんぼ』を2回歌うぐらいの長さです。他にも、『あわあわ手洗い歌』や『きれいきれい手洗い歌』があります。

子供は大人をよく見ている。大人が手洗いの習慣をもつことで、子どもたちの健康を守ると考えていきたいですね。



新年を迎えて(2014年1月6日)

明けましておめでとうございます。いよいよ新しい年となりました。
ご家庭では、年末年始はどのようにお過ごしになりましたか？
本年も、子どもたちにとって楽しく安心して過ごせる場所であるよう、職員一同協力して努めて参りたいと思います。
本年も宜しくお願い致します



鼻のかみ方を練習しよう(2014年2月6日)

寒い季節、鼻水が気になる子が増えてきます。鼻水を貯めたままにしていると鼻腔内の細菌が繁殖して、鼻や耳の病気の原因となることがあります。鼻はすすらず、できるだけ出すようにしましょう。鼻をかませようと「ふんっ！」して」と子どもに教えることがあります。大人は鼻をかむことができるので簡単に考えていますが、かめない子どもにとってみればうまくいかないのは当然です。鼻のかみ方の基本から、遊び感覚で鼻のかみ方のコツがつかめる方法を説明します。



◇鼻のかみ方の基本◇

1. 片方ずつかむ。片方の鼻をきちんと押さえる。
2. 鼻をかむ前には、口から大きく息を吸う。
3. ゆっくり少しずつかむ。

※鼻がつかまってかめない時は、温かいタオルを鼻の付け根に5分くらいあてたり、鼻の近くで蒸したタオルの蒸気をすったりすると鼻のとおりがよくなることがあります。

◇こんなかみ方はダメ◇

1. 両方の鼻を一度にかむ。
2. 力まかせにかむ。
3. 鼻をほる。



☆鼻のかみ方の楽しい教え方☆

《方法1》

1. テーブルの上に小さくちぎったティッシュを数個置きます。
2. 大きく息を吸って、口を開きます。
3. 片鼻を押さえ、押さえていない鼻の鼻息で「ふんっ！」とティッシュを飛ばします。



《方法2》

1. 小さく丸めたティッシュを片鼻に軽く入れて反対の鼻を押さえて飛ばします。

ティッシュ飛ばしゲームを親子で競争してみてもいいかもしれません。遊び感覚で鼻のかみ方のコツがつかめることもあります。鼻かみ上手になって風邪を早く治しましょう。

■利用者からの感想



病児保育室にはいつもお世話になっております。上の子供達(6歳、3歳、2歳)はもうほとんどお世話になることがなくなりましたが、しょっちゅう熱を出す保育園に通い始める頃は、本当に助かりました。きめ細やかに対応してくだり、ゆったりと保育をしていただけるおかげで子供達も安心して過ごせているようでした。病児保育室がなければ、研究の遂行はままならなかったと思っております。今後も末っ子(5ヶ月)がお世話になると思います。どうぞよろしく願いいたします。欲を言えば、もう少し保育可能人数が増えるといいと思っています。京都大学全体をまかなうには少し少ないように思いました。(医学研究科 研究員)



息子(2歳)が大変お世話になりありがとうございます。大変手厚い保育をいただいております。体調不良の際でもとても機嫌よく過ごさせていただきました。要望を一つ挙げるとすると保育不可となる基準がもう少し緩和されると大変ありがたいと思います。以前に手足口病に罹患した際には他院の病児保育にしました。できれば雰囲気などに慣れた京大病院でできるだけお願いできればと思います。看護面や小児科診療面で大変なことは存じますがご検討いただければ幸いです。(医学部附属病院 医師)



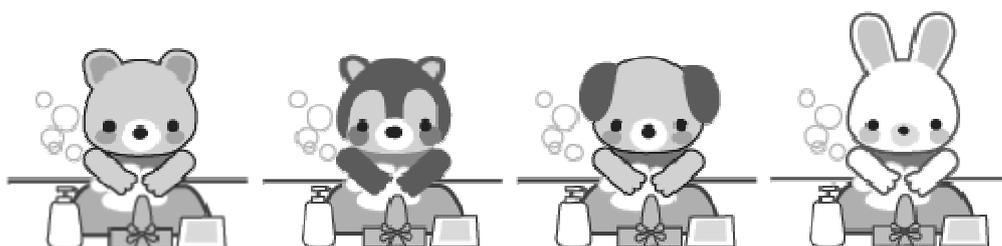
気持ちよく利用させていただいています。室内も清潔で保育士さんも親切です。ただ、少し利用料が高いのと、当日受付が8時なので、受けられるかどうか分からないまま待機しているのが、少し不便です。(医学部附属病院 病院職員)



当院の病児保育室には、留学先から帰国し京大病院に就職したその月から3年近くお世話になっております。当時2歳の息子は2歳児の時には月に1、2度は何らかの風邪等の感染症にかかっており、たびたびお世話になりました。3歳半のときに実母が自身の病気により子どもの面倒をみるのが困難になってからは、病児保育室頼りです。保育室のスタッフの方々には大変良くいただき、息子も嫌がることもなく保育室ですごしてくれています。子どもの熱や感染症でどうしてもやすまざるを得ない場合は、代行をお願いしますが、学会・研究会発表等、代行が難しい業務もあります。病児保育室をお願いして研究会に出席ということも過去には経験しました。4歳半をすぎた今でも数か月に1回はお世話になっています。子供の病気で仕事を休むときは、仕事への意欲や自信が最もゆらぐ時でもありました。病児保育のおかげで「これなら何とか仕事を続けていけるのでは」と、思え、「子供に迷惑をかけて無理して仕事をしているのでは。」という自責の念も軽減されました。

当科では、大学院生では女性が3割、うち半数は子持ちです。女性スタッフは半数以上が子持ち。さらに、男性の大学院生・スタッフも共働きで子育ての場合が少なくありません。子供の病気時の対策は科としても避けて通れない問題です。病児保育というサポートがあるおかげで、仕事を続ける意欲が保っている面もかなりあります(具体的な数値は把握していませんが、利用頻度は高いようです)。加えて、私の場合は自分の研究グループに至っては、自分もふくめ子持ち女性が majority です。したがって子育て中の女性がいかにキャリアをあきらめず自分の力を発揮していけるかは、研究グループの死活問題です。病院として病児保育のようなサポートをしていただけることは大変ありがたく、仕事をあきらめるリスクが最も高いとおもわれる復帰直後1、2年の危機を乗り越える大きな助けになっているようです。

最近の入局状況を見るに、女性医師や共働き家庭は増加傾向にありますので、そうした人々が意欲をもって仕事にとりくめる環境をととのえるためにも、今後とも、ぜひとも本制度の継続・拡充をお願いいたします。(医学研究科 教員)



■オープンホスピタル 2013

7月13日(土)、2013 京大病院オープンホスピタルに、ポスター参加を行いました。



IV 「就労支援」事業

就労支援事業ワーキンググループ活動報告

本 WG の主要活動である「研究・実験補助者雇用制度」については、育児や介護期にある研究者の研究継続支援という目的に即して応募しやすく、また審査過程の透明性と成果検証を確実なものとするために、募集要領・様式の一部改訂、利用後のアンケート質問事項改定、利用者の声のホームページ掲載など改良を加えた。昨年度から審査委員会も改組し、多様な分野の申請を審査しうる体制を整えている。

本年度中の利用者数は、第1期(4月～9月)18名、第2期16名、また応募者数は平成24年度第2期32名、平成25年度第1期22名と、ここ数年増加傾向にある。利用者アンケートにもみるように、本制度は育児・子育て期の研究者支援として大きな役割を果たしているが、必要性が認められても支援できない事例の増加、半期単位の制度運用等、今後更なる拡充と改善の取組が必要であることも明らかになっている。この点も含めて、ワークライフバランス向上に資する取組を今後も継続したいと考えている。



就労支援事業WG主査 押川文子

■活動記録

- | | |
|-----------|-----------------------------|
| 5月23日(木) | 第29回就労支援事業ワーキンググループ会議 |
| 6月3日(月) | 平成25年度2期 就労支援事業による支援希望者募集開始 |
| 7月17日(水) | 第30回就労支援事業ワーキンググループ会議 |
| 11月14日(木) | 第31回就労支援事業ワーキンググループ会議 |
| 12月13日(金) | 平成26年度1期 就労支援事業による支援希望者募集開始 |
| 1月30日(木) | 第32回就労支援事業ワーキンググループ会議 |

「出産・育児・介護中の研究者に対する研究・実験補助者の雇用」プログラム (研究・実験補助者雇用制度)

■平成 26 年度 1 期募集について

申請資格: 本学に雇用される研究者(教員、研究員、医員等)であって、育児・介護等に携わる者(出産予定の者を含む。)。ただし、次のことに留意して下さい。

- ・研究分野は、理系・文系を問いません。
- ・「育児」とは、原則として、小学校 3 年生までの子どもを対象とします。
- ・時間雇用教職員の場合は、その者の雇用時間数を超えない範囲内で、補助者雇用の申請が可能です。
- ・日本学術振興会特別研究員(DC を除く)は、申請資格を有する研究員として扱います。
- ・なお、過去 6 期以上(3 カ年以上)連続してこの制度の適用を受けてこられた場合は、今期は応募できません。応募者が多数となっておりますので、ご了承ください。

採用人数: 10 名程度(予定)

技術補佐員(時間雇用教職員(1 週の勤務時間は 20 時間以内))※学部学生、大学院生は、オフィス・アシスタント(技術)として雇用。

補助者要件: 申請者の研究・実験を補助する者で、勤務場所への通勤に支障がない者

雇用期間: 平成 26 年 4 月から平成 26 年 9 月末までの間

選考方法: 女性研究者支援センターに設置される選考委員会において候補者の選考を行います。選考は、原則として、以下の点に着目し、該当する者を優先します。

- ・育児・介護等に起因する研究困難度の高い者
- ・補助者雇用経費について他の資金による代替の可能性が低い者

・本制度の利用が1年未満の者

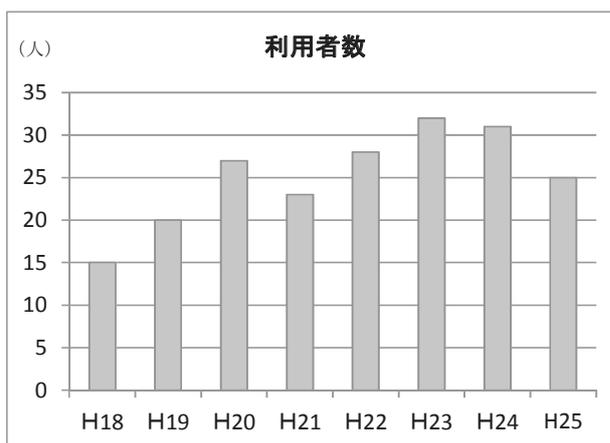
申請方法: 申請に当たっては、補助者を受け入れる所属研究室等の教員等とも十分相談の上、次の書類を部局長(部局事務)を通じ、担当宛にメールにてご提出願います。

- ・平成 26 年度 1 期研究・実験補助者雇用制度利用申請書
- ・補助候補者の略歴書

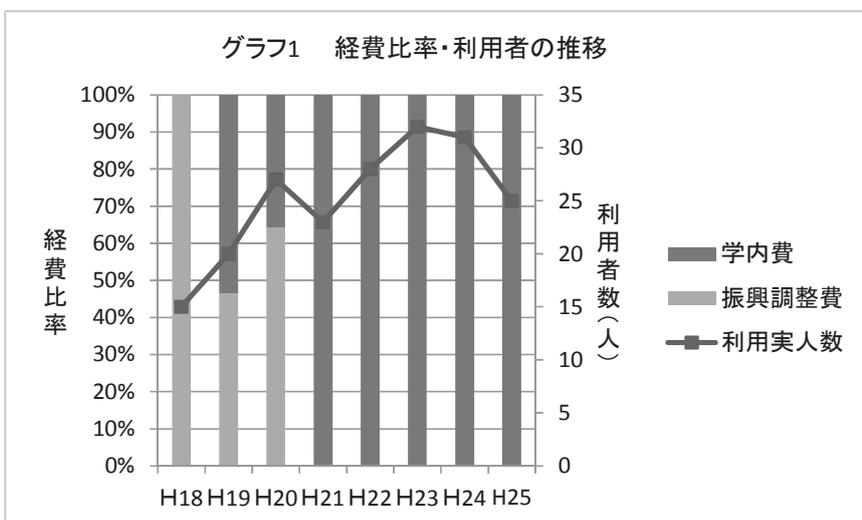
応募締切: 平成 26 年 1 月 17 日(金)17 時(必着)

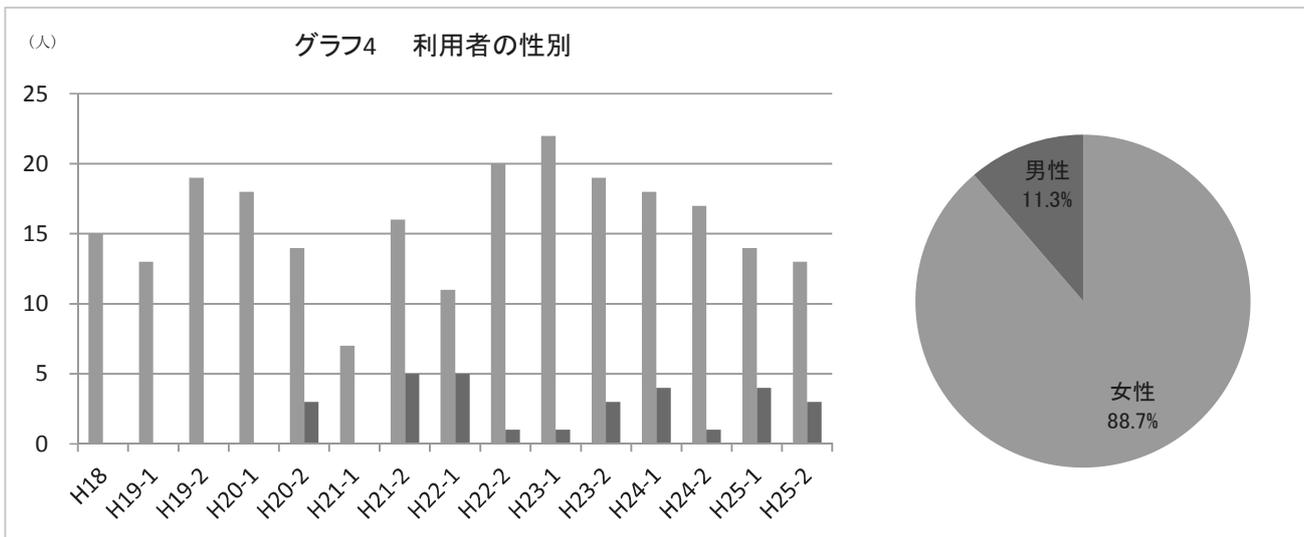
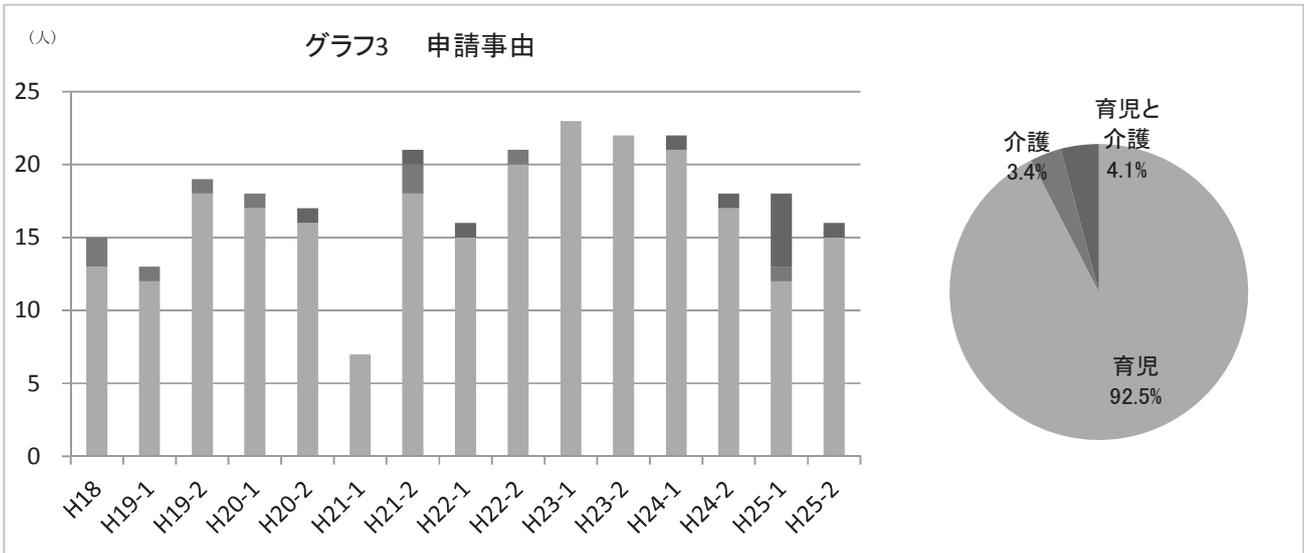
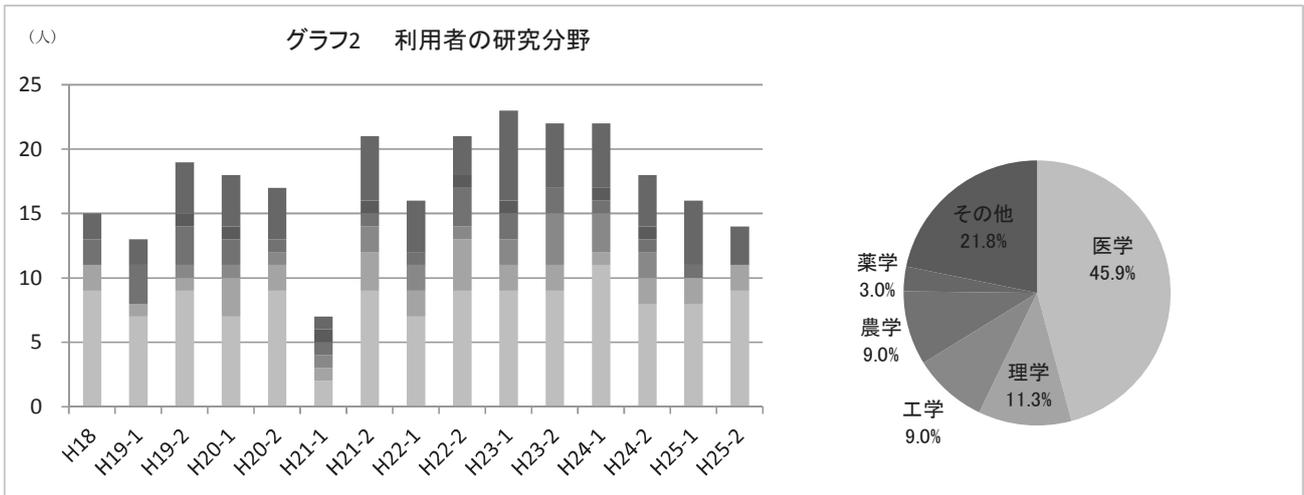
成果報告: 採択者には、利用期間終了後、研究活動への本制度利用の効果等について、利用実態を報告していただきます。なお、一部調査結果については、女性研究者支援センターのホームページ等へ掲載されることがありますので、予め、ご了承願います。

※申請様式は、ホームページに掲載



■「出産・育児・介護中の研究者に対する研究・実験補助者の雇用」プログラム利用状況





■研究・実験補助者雇用制度 アンケート報告

対象者:平成24年度第2期～平成25年度第1期 研究・実験補助者雇用制度利用者 36名

形式:実績報告と同時にメールにて依頼。

回答率:95%

1.「研究・実験補助者雇用制度」を利用することで、どのようなことが可能になったか

- ・私自身が育児の都合で動けないときに研究補助してもらえたことによって、研究が停滞することなくスムーズに進められた。
- ・データ整理作業に関して、自分の分野知識に活かせる、非常に効率良く実験が進められた。異分野の方との接触により、申請者自身も勉強になった。
- ・子供が小さい上に、夫が単身赴任のため平日は一人で育てなければならず、思うように研究の時間が確保できていない一方で、年齢も上がり、学会活動ではリーダーシップを求められる場面も多くなってきた。現実的には何かをあきらめる必要があったと思うが、本制度により実験補助者を雇用できたおかげで、何とか乗り切ることができた。
- ・教育活動、子供の看病、通院、病児保育通いなど、とても負担の多い時期だったが、技術補助者の方がいてくれたおかげで、無事、論文を投稿できた。また新たな研究費への申請も3件できた。
- ・子供ができてから手を付けられなかったフィールド調査の資料整理が済み、文献資料も分類整理が進んだことで、こうした資料を研究と講義のために容易に利用できるようになった。また、自分の研究活動のなかでも人に依頼できる作業とそうでないものを分けて考えるようになったことで、仕事にメリハリが生まれたように思う。
- ・私には利用当時1, 3, 4歳の子どもがおり、フルタイムで勤務する妻一人では食事、入浴等の世話が困難であったため、夕方一旦帰宅し、子どもが寝てから再度職場に戻るといった生活を送っていた。本制度を利用させていただいたことで、多くの作業を実験補助者に依頼でき、育児と研究の両立ができた。
- ・まだ一歳に満たない時期に子供を保育園に入れたこともあり、熱だ、病気だ、入院だとしょっちゅう仕事に集中しづらい時期があったが、手伝ってくださる人が一人いるだけで、気持ち的に助かった。論文作成や事務的作業はできるだけ自宅で夜に行うようにはしたが、それでも絶対的に時間が足りないことも多く、実験補助の方のおかげで救われた。
- ・家族との時間が増えた。通勤に片道1時間程度かかるが、19時過ぎに帰宅することができ、子供と過ごす時間を作れるようになった。朝は子供の起床より先に家を発つことが多いため、大変貴重な時間だと思っている。

2.「研究・実験補助者雇用制度」を利用した感想

- ・私が動けないときに補助してくれる人がいると、研究が停滞することなくスムーズに進められるという感覚があった。補助者の方も関連する研究をしているので、うまくすれば若手研究者の育成にも一役買うのではないかと思う。
- ・今回は本制度を使って、学部生をアルバイトとして研究現場での仕事を実験補助の形で実現できた。研究面だけではなく教育面でも大きな収穫があったと思う。学生は意欲的に研究を進めて大学院に進学することを決意した。京都大学から受けた支援をこのような形で京都大学の学生の教育に還元できたことを嬉しく思う。
- ・他の研究者仲間に比べ、子育てにかかる時間が長く、研究にかけられる時間が絶対的に少なかったが、その分の補助をしていただけて大変助かった。
- ・研究とは無関係なことに忙殺されている間も、補助者の方が作業を進めてくれていると思うと気持ちが救われた。わたしの場合、まずは自分の研究継続を支援してくれる機関、制度、そして人がいることによる心理的効果が大きいように思う。
- ・24時間対応の託児所、ベビーシッター、病児保育制度などを組み合わせて利用すれば、長時間勤務することは可能だと思うが、育児はできない。子供と向き合う時間を確保しつつ、研究を効率的に進めることができるという点が本制度の魅力だと思う。
- ・本制度を利用させていただいたことで育児と研究の両立が可能となり、子どもとの時間を持てたことで、親子関係構築においても良い影響があったと感じている。
- ・今回の期間は、一番上の子どもの小学校入学の時期であっただけでなく、その本人が、入学後体調を崩して約2ヶ月間自宅療養を余儀なくされるというアクシデントがあり、本制度を利用していなかったら、研究遂行に多大な影響があったと思う。想定外の出来事があったにもかかわらず、ほぼ予定通りに研究が進められたのは、ひとえに補助者の伴走があったからで、大変感謝している。
- ・育児期間には、それまでの研究業績の蓄積がある場合を除いて、なかなか実験補佐員を自ら雇うだけの研究費をとれないことが多いと思う。この段階でのこの制度は、本当に有意義であり、研究面で相当大きな役割を果たしてくれたと思う。今後も、是非とも存続をお願いしたいと思う。

・まずは、研究と子育ての両立において心にゆとりができた。家族よりも研究に比重を置きがちだが、この補助のおかげで積極的に子育てに参加することを自らに課していることを実感する。つまり、この補助を受けていない場合は、子育てをある程度ないがしろにしていたと思われる。

3. この制度を利用する上で、困ったこと、改善した方がよいと思うことがあるか

- ・半年しか支援できないことにより、適切な方が見つかりにくい欠点があると感じている。
- ・強いて言えばだが、育児・介護をしていると、研究はもちろん、教育活動においても支援が必要な時が多々ある。研究・技術補助者は、研究費を獲得していくことで対応できることもあるが、教育補助者は研究費ではもちろん賄えない。今後研究・実験だけでなく、教育補助者も対象にしてもらえると大変ありがたい。
- ・半年単位での利用である点。様々な理由があつてのこととは理解しているが、半年後以降にも仕事を続けてもらえるかどうか分からないという条件の下では、自身の研究成果により直結する作業であっても、長期にわたり継続する必要があることを依頼しづらい。仕事を覚えてもらい、慣れて軌道に乗ったら利用期間の終わりがもう目の前に迫っているということになりそうで、わたし自身も今回の利用ではそうした仕事の依頼を断念した。せめて一年単位にさせていただいたら大変ありがたい。
- ・補助者を探すのはいつも非常に困難である。今回は、教

務掛等に協力してもらい、学内バイトの掲示や学生向けに一斉メールをだして募集し、面接して決定した。募集が多かったことから、潜在的にこのような補助をしたい学生はいることは分かった。ただし、一人で企画して探すのは大変な労力がかかるので、マッチングを行うところをサポートしていただける(HP でアルバイト掲示の設置など)と非常にありがたい。

- ・この制度を利用できる人数を増やしてほしい。

4. この制度の募集情報の入手方法(※複数回答あり)

| 区分 | 人数 |
|------------|----|
| センターからのメール | 3 |
| 部局事務からのメール | 19 |
| センターHP | 3 |
| 指導教官からの情報 | 3 |
| 知人からの情報 | 5 |
| 合計 | 33 |

5. その他

- ・待機乳児保育室について。後期だけでなく通年で開室できるようにしていただくと、子供の出産を控えた方はとても安心できると思う。
- ・本部だけではなく、宇治地区や桂地区での保育園が、期間限定でもいいので設置されるといいと思う。この制度を利用している女性研究者間の交流の場があれば良いと思う。

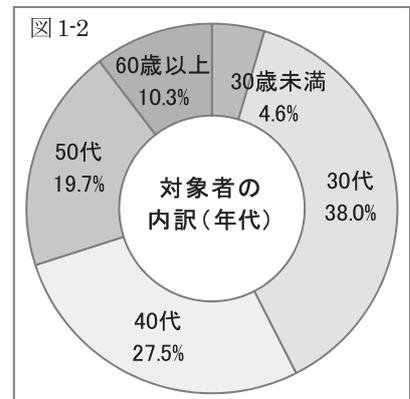
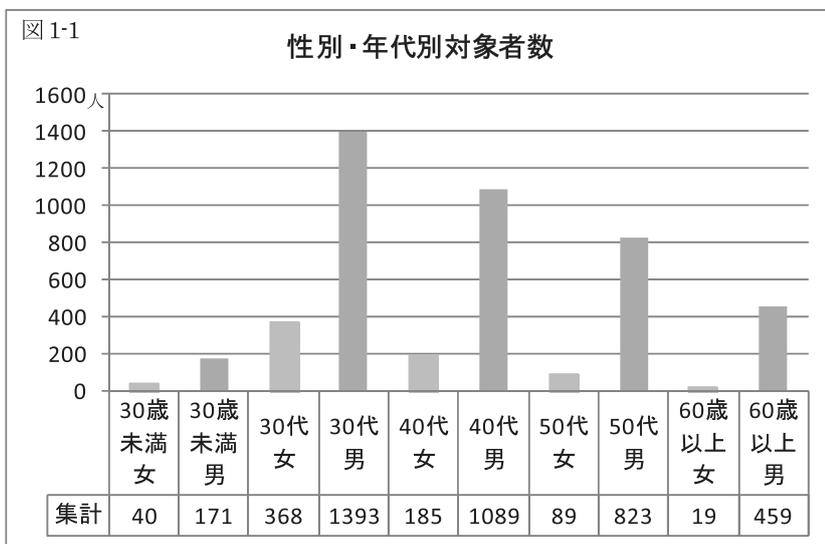
京都大学教員・研究員の生活時間に関するアンケート調査報告

本調査は、男女共同参画の取り組みの一環として総長から提案され、男女共同参画推進室及び女性研究者支援センターが実施しました。



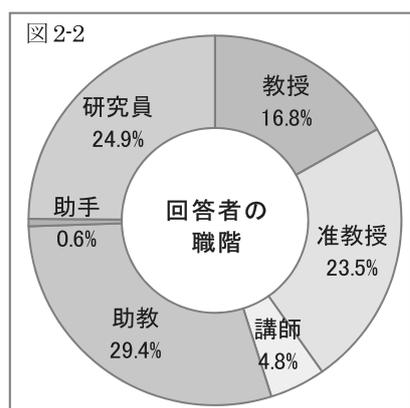
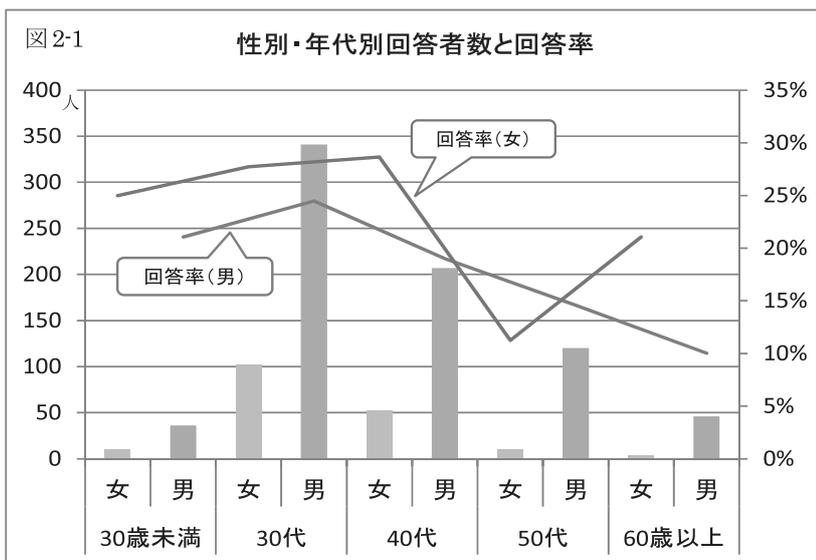
実施期間 2011年12月1日(木)～12月30日(金)
 対象 京都大学の教員・研究員 (2011年12月1日現在)
 女性 701名、男性3,935名、計 4,636名
 方法 本調査の趣旨とURLを記載したメールを送信し、WEBにて回答
 回答率 929名が回答 (回答率20.0%)

1. 対象者について : 本学で雇用される男女研究者を対象にしました



対象者の内訳では、30歳代が38.0%、40歳代が27.5%であり、50歳未満が70.1%を占める。男女比では、男性84.9%、女性15.1%である。

2. 回答者について: 回答率は、男女では女性、年代では30歳代～40歳代でやや高い傾向があります。



回答者の男女比は、男性80.7%、女性19.3%である。職階では、助教29.4%、研究員24.9%である。

性別・年代別に回答率を見ると、40歳代女性の回答率が28.6%と最も高く、次いで、30歳代女性の27.7%、30歳未満女性の25.0%が続く。男女の合計で回答率を見た場合は、30歳代が25.2%と最も高くなる。最も回答率が低かったのは、60歳以上男性の10.0%で、50歳代女性の11.2%がそれに続く。

3. 生活時間の配分について

図 3-1 時間を費やしたいにも関わらず不十分(3つ選択)

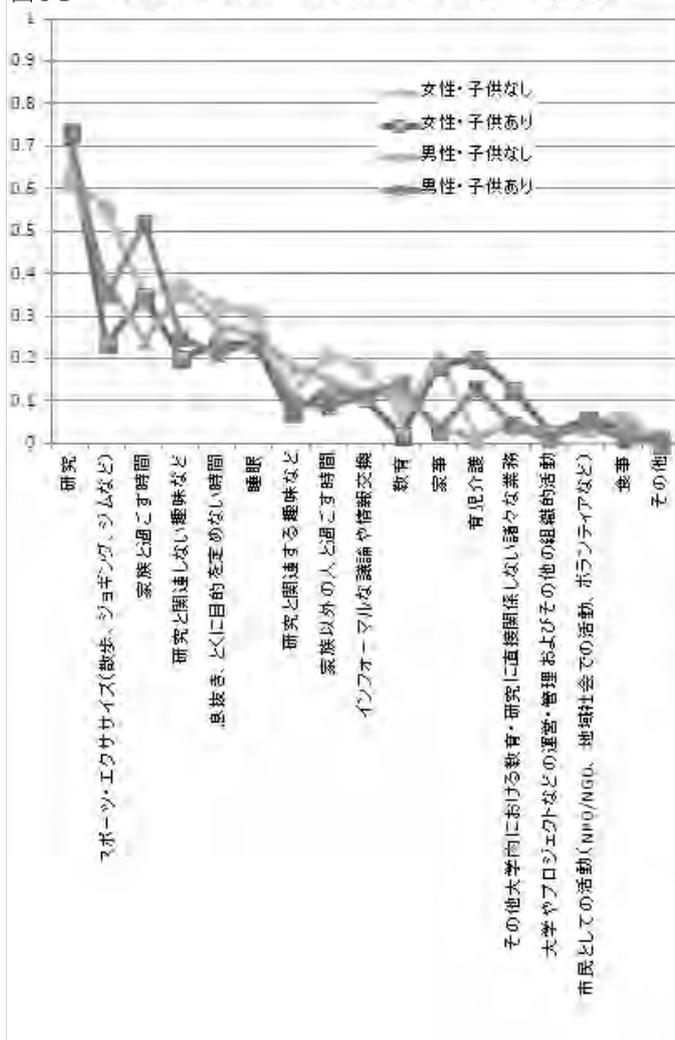


図 3-2 その結果生じたと思われる影響

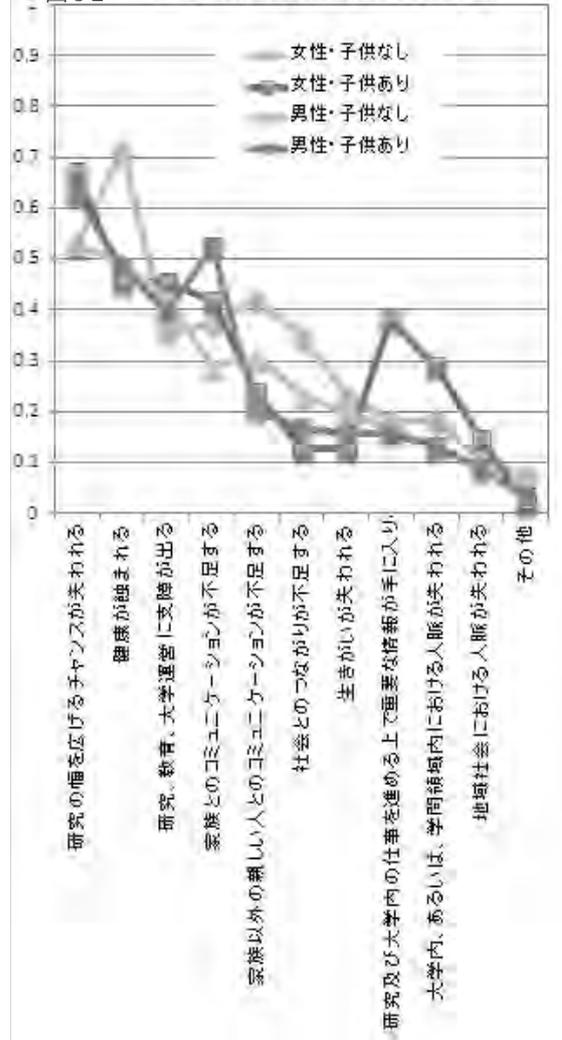
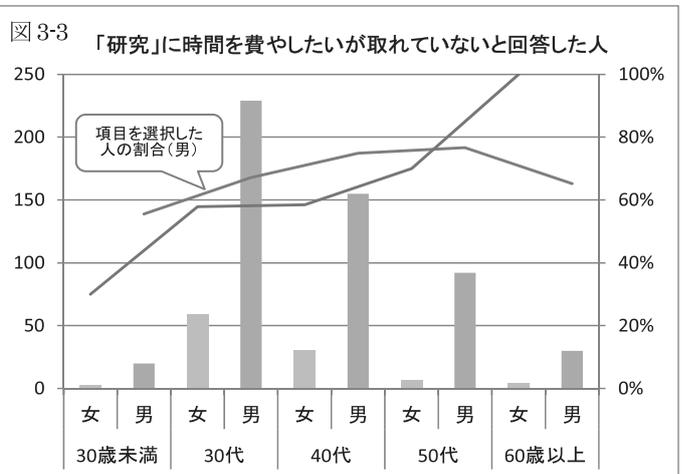
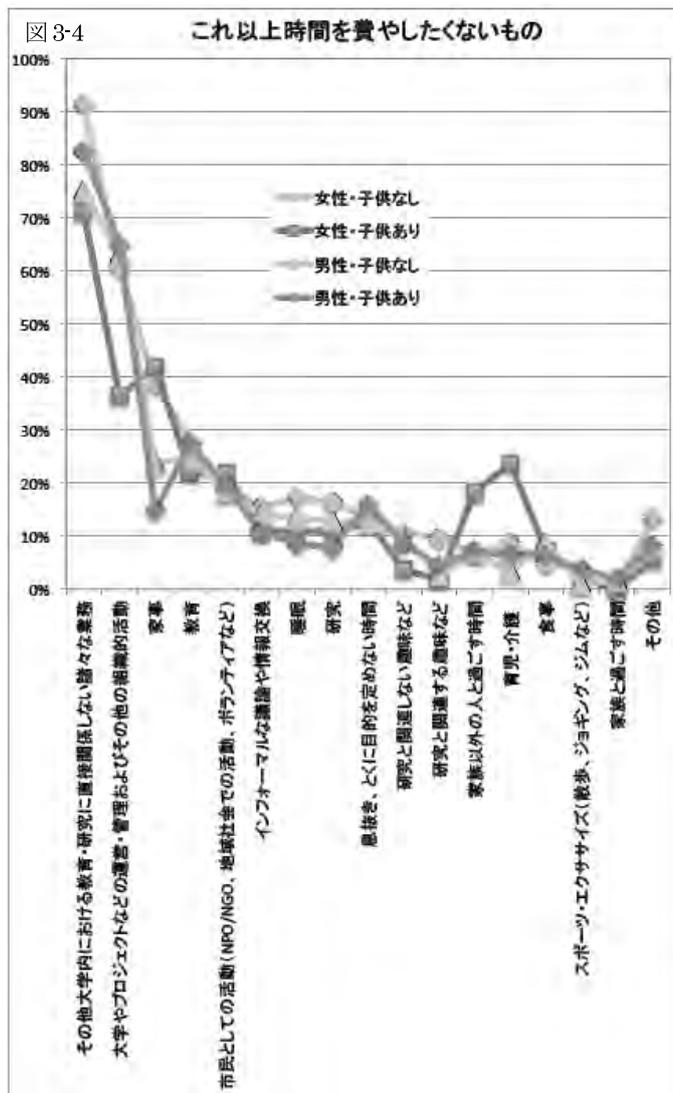


図 3-1.と図 3-2 は、現在、時間を費やしたいにもかかわらず、充分時間の取れていない活動（3つまでの複数回答）についてまとめたものである。男女および養育中の子どもの有無を基準に回答を4カテゴリーに分けてみると、すべてのカテゴリーにおいて研究時間の確保が最大の関心事であることとともに、子育て中の研究者は、男女ともに家事や育児・介護の時間が足りないと感じている。さらに女性の子育て研究者の場合は情報交換や研究教育に直接関係しない大学業務などに十分に時間を割くことができないことに不安を感じている。子育て期の研究者、とくに女性研究者は、研究・教育と家事・育児の時間のやりくりを追われながら、余暇やスポーツを通じた健康管理や、人的ネットワークや情報確保を圧縮せざるを得ない実態が示されている。

図 3-3 が示すように、研究時間を確保したいと考えている回答率で、男性が女性をわずかながら上回る傾向もこうした女性研究者のタイトな時間配分を考慮して読み取る必要があるだろう。またこの表では、性別にかかわらず、年代が高くなるにつれ、研究時間の確保が思うようにできていない傾向が強くなる。



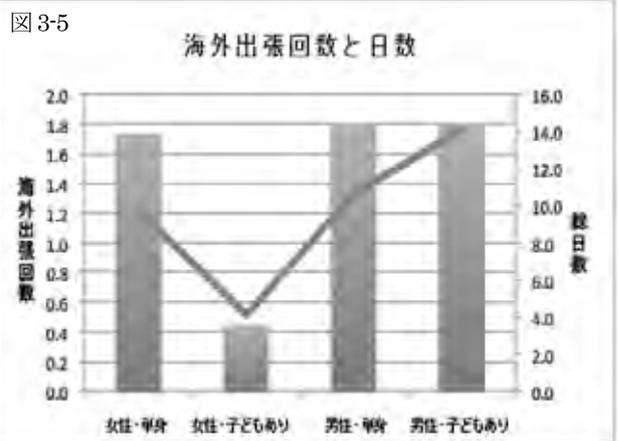
なっていることも示されている。



一方、現在、時間を費やしている活動のなかで、これ以上時間を費やしたくない、あるいは少なくしたいと思っている活動(3つまでの複数回答)を示すのが図3-4である。

すべてのカテゴリーで、「大学内における教育・研究に直接関係しない諸々の業務」が1位、「大学やプロジェクトなどの運営・管理およびその他の組織的活動」が2位で、圧倒的に多い。

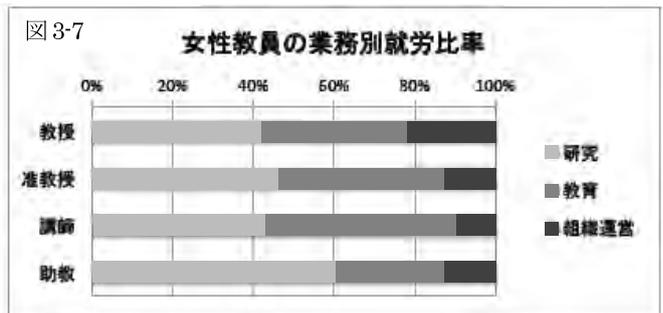
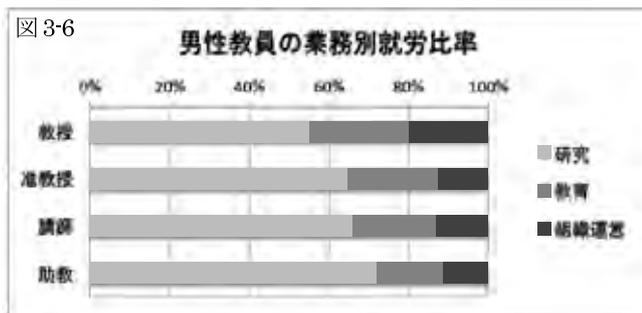
注目されるのは、子育て期の女性研究者の回答が、家事・育児時間を増やしたい(図3-1)比率と減らしたい比率(図3-4)の両方で突出していることである。相当の時間を育児・家事に費やしながらまだ足りない、もう少し仕事や自分のための時間も欲しいという二つの方向のなかで苦慮している女性研究者の実像が示されている。

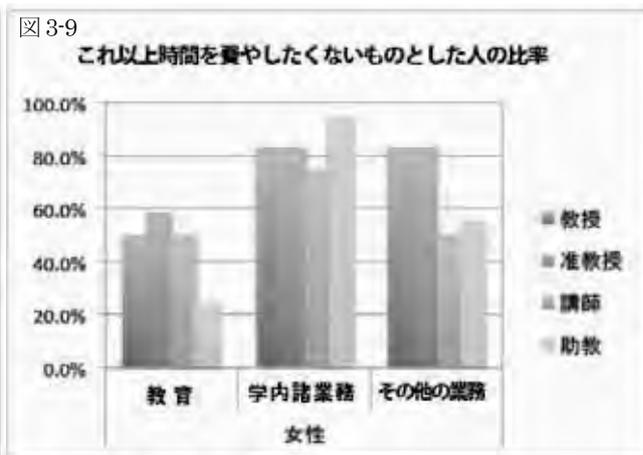
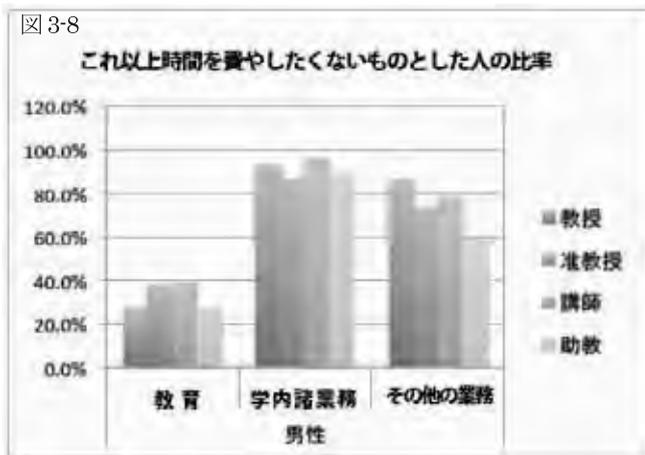


女性研究者の状況を示す回答のもう一つの事例として図3-5は、調査期間に先立つ一年間の海外出張回数と日数を示すものである。

子どものいる女性研究者の出張回数と総日数が少ない一方、子育て中の男性研究者にはこの傾向はみられない。子育てや介護の責任や分担において、後述のように意識の面では男女の分担が定着しつつあるものの、実態としては女性により強い負担がかかっていることを示している。

では、仕事の内容別にみた時間配分には男女間の差があるだろうか。研究と教育の境界は必ずしも明確でなく、分野や部局の性格(大学院、研究所・センター)によっても多様なケースがありこの比較は容易ではないが、図3-6～図3-9は男女別、職階別に整理した回答である。女性研究者のほうが、時間配分における教育の比重が若干高く、「これ以上増やしたくない」仕事においても、教育がやや高くなる傾向がある。女性研究者のタイトな時間配分のなかでも、教育に熱心に取り組んでいることが示されている。





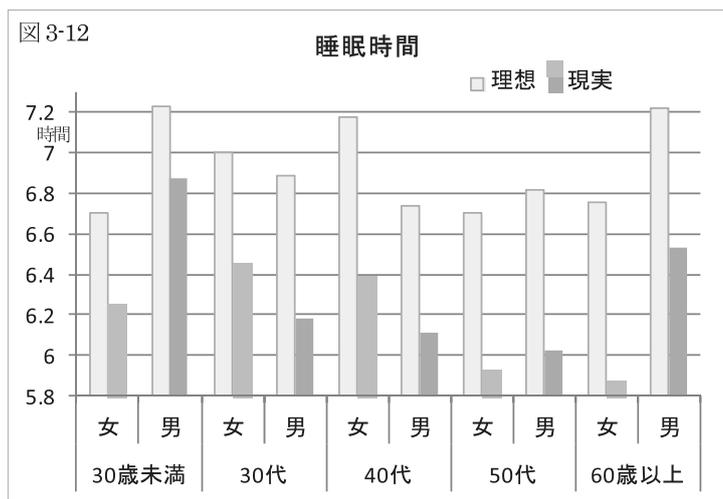
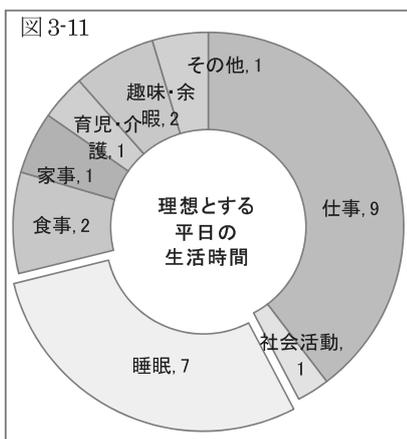
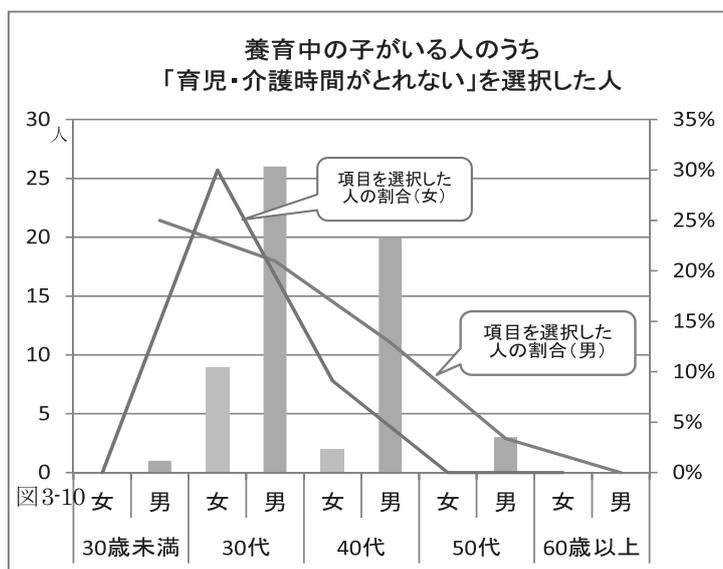
最後に、本学の男女研究者のワークライフバランスについての回答をまとめておく。

図 3-10 は養育中の子どもがいる男女研究者のうち、「育児・介護時間がとれない」と回答した比率である。30代の男女、30歳未満の男性に回答率が上がる傾向が示されている。年代によって多少の相違があるが、男性研究者の多くが、「育児・介護時間がとれない」、すなわちもっと育児や介護に時間を配分したいと考えていることが示されている。

この点は、図 3-11 に示す全回答者の平均値としての「理想の生活時間」にも表れており、仕事と育児・介護・家事・余暇や趣味をバランスよく配した理想が示された。

では現実はどうだろうか。図 3-12 が示す睡眠時間の「理想」と「現実」は、その一つの姿を示すものだろう。すべての年代の男女研究者とも、現実睡眠時間は理想睡眠時間を下回っている。とくに 30代から 50代の研究者はその差が大きい。

本アンケートで明らかになったことは、男女研究者ともに研究を重視し、育児や介護にも積極的に関わろうとする点において共通していることである。また、研究、教育、大学運営、プロジェクトなど多くの仕事のなかで、男女研究者とも睡眠時間を削る毎日を過ごしている。そのなかで子育て期については、意識としては男女ともに育児や家事への参加が定着してきているものの、実態としては女性の負担がまだ大きいことが示された。男女間のよりよい分担とともに、男女研究者がともにワークライフバランスを実現できる環境整備が必要とされている。



資 料

京都大学女性研究者支援センター関係者名簿

2013.4.1 現在

| 役職 | 氏名 | 所属・職 |
|----------------------------|--------|------------------|
| センター長 | 稲葉 カヨ | 生命科学研究科・教授 |
| 女性研究者支援推進室長 | 伊藤 公雄 | 文学研究科・教授 |
| 特任教授 | 犬塚 典子 | 女性研究者支援センター・特任教授 |
| 運営委員会 | | |
| 1号委員(センター長) | 稲葉 カヨ | 生命科学研究科・教授 |
| 2号委員(センター特任教授) | 犬塚 典子 | 女性研究者支援センター・特任教授 |
| 3号委員(女性研究者支援推進室長) | 伊藤 公雄 | 文学研究科・教授 |
| 3号委員(広報事業ワーキンググループ主査) | 山末 英嗣 | エネルギー科学研究科・助教 |
| 3号委員(相談事業ワーキンググループ主査) | 西村 いくこ | 理学研究科・教授 |
| 3号委員(育児・介護支援事業ワーキンググループ主査) | 山肩 洋子 | 情報学研究科・准教授 |
| 3号委員(病児保育担当) | 富樫 かおり | 医学研究科・教授 |
| 3号委員(病児保育事業ワーキンググループ主査) | 足立 壯一 | 医学研究科・教授 |
| 3号委員(就労形態検討ワーキンググループ主査) | 押川 文子 | 地域研究統合情報センター・教授 |
| 3号委員(社会連携事業ワーキンググループ主査) | 鈴木 晶子 | 教育学研究科・教授 |
| 広報事業ワーキンググループ | | |
| 主査 | 山末 英嗣 | エネルギー科学研究科・助教 |
| 推進員 | 村山 留美子 | 工学研究科・助教 |
| 相談事業ワーキンググループ | | |
| 主査 | 西村 いくこ | 理学研究科・教授 |
| 推進員 | 高橋 淑子 | 理学研究科・教授 |
| 育児・介護支援事業ワーキンググループ | | |
| 主査 | 山肩 洋子 | 情報学研究科・准教授 |
| 推進員 | 富樫 かおり | 医学研究科・教授 |
| 推進員 | 喜多 一 | 学術情報メディアセンター・教授 |
| 推進員 | 岩崎 奈緒子 | 総合博物館・教授 |
| 推進員 | 神吉 紀世子 | 工学研究科・教授 |
| 推進員 | 鈴木 和代 | 医学研究科・助教 |
| 病児保育事業ワーキンググループ | | |
| 主査 | 足立 壯一 | 医学研究科・教授 |
| 推進員 | 富樫 かおり | 医学研究科・教授 |
| 推進員 | 土井 拓 | 医学部附属病院・助教 |
| 推進員 | 栗屋 智就 | 医学部附属病院・助教 |
| 推進員 | 長尾 美紀 | 医学部附属病院・助教 |
| 推進員 | 辻岡 まゆみ | 医学部附属病院・看護師長 |
| 推進員 | 山中 寛恵 | 医学部附属病院・看護師長 |

| 役職 | 氏名 | 所属・職 |
|-----------------|--------|--------------------|
| 推進員 | 千葉 正勝 | 医学部附属病院総務・課長 |
| 推進員 | 隈村 綾子 | 医学部附属病院地域ネットワーク医療部 |
| 推進員 | 川崎 宏 | 研究国際部研究推進課・課長 |
| 就労形態検討ワーキンググループ | | |
| 主査 | 押川 文子 | 地域研究統合情報センター・教授 |
| 推進員 | 佐藤 亨 | 情報学研究科・教授 |
| 推進員 | 鈴木 眞知子 | 医学研究科・教授 |
| 推進員 | 横山 美夏 | 法学研究科・教授 |
| 推進員 | 喜多 恵子 | 農学研究科・教授 |
| 社会連携事業ワーキンググループ | | |
| 主査 | 鈴木 晶子 | 教育学研究科・教授 |
| 推進員 | 松下 佳代 | 高等教育研究開発推進センター・教授 |
| 推進員 | 久家 慶子 | 理学研究科・准教授 |

女性研究者支援センター運営委員会、推進室会議議事

■運営委員会議題と資料

第 30 回運営委員会 2013 年 7 月 22 日(月)

議題 1. 「京都大学女性研究者支援センター組織内規」の改正について

資料 1. 京都大学女性研究者支援センター組織内規改正案

- 参考 1. 京都大学女性研究者支援センター組織内規改正案(見直し)
2. 女性研究者支援センター新体制図
 3. 女性研究者支援センター運営委員会内規
 4. 女性研究者支援センター運営委員会名簿

■推進室会議議題と資料

第 71 回推進室会議 2013 年 4 月 8 日(月) 11:00～11:30

【議題】

1. 病児保育室の利用における事前登録について
2. WG の改編について
3. 待機乳児保育室の愛称について

【報告】

1. 着任者の紹介
2. センター移転について
3. センター要項の改定(H25.3.27 付 事務組織規定の改正による)
4. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. 病児保育室の利用における事前登録について
2. WG の改編について
3. 新施設間取り
4. 国際女性デー日仏シンポジウム出張報告
5. 東京大学(JST「女子中高生理系進路選択支援」事業)「数学の魅力2ー女子中高生のためにー」出張報告
6. 京都大学女性研究者支援センター要項(平成 25 年 3 月 27 日総長裁定)

第 72 回推進室会議 2013 年 5 月 13 日(月) 11:00～12:20

【議題】

1. WG の改編について
2. シンポジウムの開催について
3. 介護ミニ研究会の開催について
4. 自己主張トレーニング講座の見直しについて
5. 女性教員・院生の交流会について
6. 女子高生・車座フォーラム 2013 の日程について
7. 教員・研究員の生活時間アンケート調査報告(案)について

【報告】

1. 橘会館への移転
2. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. WG の改編について

2. シンポジウム シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン7
3. 介護に関する企画案
4. 相談事業 WG 資料 (H25 年度の企画)
5. 教員と院生との交流会【企画案】
6. 教員・研究員の生活時間に関するアンケート調査報告書(案)
7. 経済産業省・日本総合研究所共催「ダイバーシティ経営企業100選」シンポジウム出張報告
8. 第110回日本内科学会「男女共同参画企画公開シンポジウム」出張報告
9. 第8回女子中高生のための関西科学塾のポスター
10. ニュースレター50号
11. おむかえ保育利用規定

第73回推進室会議 2013年6月10日(月) 11:00~11:45

【議題】

1. WGの改編について

【報告】

1. 育児クーポンの実施検討
2. 平成25年度2期 研究・実験補助者雇用制度の利用者募集について
3. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. 平成25年度2期 研究・実験補助者雇用制度利用者募集要項
2. 京都大学女性研究者支援センター組織内規
(参考資料:京都大学女性研究者支援センター要項、同運営委員会内規)
3. シンポジウム シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン7のポスター

第74回推進室会議 2013年7月8日(月) 11:00~12:25

【報告】

1. WGの改編について
2. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. シンポジウム シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン7のポスター
2. 介護のつどいのポスター
3. 保育園待機乳児保育室のポスター
4. 各WGの構成員

第75回推進室会議 2013年9月9日(月) 11:00~11:45

【報告】

1. 熟議について
2. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. 第5回九州・沖縄アイランド女性研究者支援シンポジウム in 福岡参加報告
2. ニュースレター「たちばな」第51号
3. 女子高生・車座フォーラム2013のポスター

第76回推進室会議 2013年10月21日(月) 11:00~11:30

【報告】

1. 平成26年度全学共通科目、ポケットゼミの提供について
2. 女性教員懇話会第64回研究会「大学改革期における女性支援の現状と今後を考える」に協力

3. 平成 26 年 4 月のセンターと男女共同参画推進室の統合に向けての調整について
4. 病児保育室と病院小児科を兼任する小児科医配置について
5. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. ニュースレター「たちばな」第 52 号

第 77 回推進室会議 2013 年 11 月 11 日(月) 11:00～11:30

【報告】

1. 思修館2期工事について
2. おむかえ保育について
3. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. たちばな賞推薦募集のポスター

第 78 回推進室会議 2013 年 12 月 9 日(月) 11:00～11:55

【議題】

1. 平成 26 年度 1 期研究実験補助者雇用制度の利用者募集について

【報告】

1. 平成 26 年 4 月からの体制について
2. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. 平成 26 年度第 1 期 研究・実験補助者雇用制度利用者募集要項
2. 神戸大学男女共同参画推進室・国際シンポジウム参加報告
3. 女性研究者支援センター相談事業ストレスマネジメント講座(案)
4. ニュースレター「たちばな」53 号

第 79 回推進室会議 2014 年 1 月 20 日(月) 11:00～11:50

【報告】

1. 学術研究支援室(URA)の冊子「Research Activities (H26.5 刊行予定)」に協力
2. 学術研究支援室(URA)と協力して女子高校生向け冊子(H26.5 刊行予定)を作成
3. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. 平成 25 年度活動報告書目次(案)
2. 内閣府シンポジウム「WEPs が変える仕事の未来」参加報告
3. 東京大学「女子高校生のための東大説明会 2013」参加報告
4. ニュースレター「たちばな」54 号
5. ストレスマネジメント講座のポスター(案)
6. 介護講演会について

第 80 回推進室会議 2014 年 2 月 10 日(月) 11:00～12:00

【議題】

1. 平成 26 年 1 期補助者雇用制度の利用者決定
2. おむかえ保育の実施について
3. シンポジウムの実施について

【報告】

1. 平成 26 年度予算について
2. 平成 26 年度全学共通科目、ポケットゼミについて

3. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. 平成 26 年 1 期補助者雇用制度の利用者決定（案）
2. おむかえ保育実施要領（案）
3. シンポジウム（案）
4. 平成 26 年度の講義について
5. 報告書：各 WG 活動報告
6. 介護講演会のポスター
7. ストレスマネジメント講座のポスター
8. たちばな賞表彰式ポスター文面

京都大学女性研究者支援センター活動日誌

(2013年4月～2014年3月)

- 4月1日(月) 支援員1名着任
- 4月8日(月) 第71回女性研究者支援推進室会議
- 4月9日(火) 「性差を科学する1」開講、講師:伊藤公雄
- 4月12日(金) 情報環境機構講習会受講
- 4月13日(土) 第110回日本内科学会「男女共同参画企画公開シンポジウム」に参加:犬塚典子
- 4月16日(火) 第1回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」ポケゼミの目的について、ジェンダー研究の歴史と意義:伊藤公雄
- 4月23日(火) 第2回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」動物の性差と性淘汰:奥田 昇
- 4月30日(火) 第3回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」動物の子育てと雌雄の対立:奥田 昇
- 5月7日(火) 第4回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」ジェンダーと文化人類学:速水洋子
- 5月10日(金) ニュースレター「たちばな」第50号発行
- 5月13日(月) 第72回女性研究者支援推進室会議
- 5月14日(火) 第5回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」性の決定メカニズムについて:塩田浩平
- 5月21日(火) 第6回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」身体の性と脳の性(1):瀬木(西田)恵里
- 5月23日(木) 第29回就労支援事業ワーキンググループ会議
- 5月27日(月) センター建替えのため、橘会館に移転
- ～28日(火)
- 5月28日(火) 第7回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」身体の性と脳の性(2)ディスカッション:瀬木(西田)恵里
- 6月3日(月) 平成25年度2期 就労支援事業による支援希望者募集開始
- 6月4日(火) 第8回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」脳の発達と性差:栗屋智就
- 6月9日(日) 第8回女子中高生のための関西科学塾<A>を共催
- 6月10日(月) 第73回女性研究者支援推進室会議
- 6月11日(火) 第9回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」セクシュアリティと文化人類学:田中雅一
- 6月12日(水) ハラスメント窓口相談員のための研修を受講:犬塚典子
- 6月25日(火) 第10回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」ジェンダーと教育:犬塚典子
- 7月2日(火) 第11回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」科学政策における男女共同参画:犬塚典子
- 7月8日(月) 第74回女性研究者支援推進室会議
- 7月9日(火) 第12回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」中央アジアの女性解放運動:帯谷知可
- 7月13日(土) 京大病院オープンホスピタルにポスター参加
- 7月16日(火) 第13回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」アフリカ女性の生き方から学ぶ:近藤 史
- 7月17日(水) 第30回就労支援事業ワーキンググループ会議
- 7月19日(金) シンポジウム(シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン第7回)ー京都で研究する!～外国人研究者が語る
京都大学での経験～「International researchers talk about their experiences at Kyoto university」ー
講師:Jane SINGER、Supawan JOONWICHIE
- 7月22日(月) 第30回女性研究者支援センター運営委員会
メンタルヘルス講習を受講
- 7月23日(火) 第14回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」総合討論:伊藤公雄
- 7月27日(土) 介護講座ー介護のつどい
- 7月30日(火) 第15回ポケットゼミ「ジェンダーと科学」まとめ:伊藤公雄
- 8月1日(木) ニュースレター「たちばな」第51号発行
- 8月8日(木) 東北大学女子学生入学100周年記念シンポジウムに参加:稲葉カヨ
- 9月2日(月) 平成25年度保育園入園待機乳児保育室を開室
- 9月5日(木) 女性研究者支援センター組織内規を改定し、4ワーキンググループでの事業推進を行うこととなった

- 9月7日(土) 第5回九州・沖縄アイランド女性研究者支援シンポジウムに参加:犬塚典子
- 9月9日(月) 第75回女性研究者支援推進室会議
男女共同参画推進室にてベビーシッター利用育児支援事業を開始し、その広報を行った
- 9月13日(金) 病児保育室の保育士1名退職
- 9月14日(土) 京都大学ジュニアキャンパスに、センターポケゼミ受講者による中学生向けゼミ「大学生と語るジェンダー(「男らしさ」や「女らしさ」などの社会的性別)を提供
- 9月20日(金) ニュースレター「たちばな」第52号発行
- 9月23日(月・祝) 第8回女子中高生のための関西科学塾を共催
- 10月1日(火) 国立女性教育会館「国際研修プログラム」参加者がセンターを見学
第1回「性差を科学する(2)」オリエンテーション:伊藤公雄
- 10月4日(金) KUINS(京都大学学術情報ネットワークシステム)利用者負担金検討委員会に出席
- 10月8日(火) 第2回「性差を科学する(2)」動物の行動・性淘汰と性的二型:森 哲
- 10月20日(日) 第8回女子中高生のための関西科学塾<C>を共催
- 10月21日(月) 第76回女性研究者支援推進室会議
- 10月22日(火) 第3回「性差を科学する(2)」爬虫類の性と繁殖:疋田 勉
- 10月29日(火) 第4回「性差を科学する(2)」比較認知科学:チンパンジーとヒトと性差:林 美里
待機乳児保育室利用者懇談会
- 11月5日(火) 第5回「性差を科学する(2)」植物における性の多様性と進化:川北 篤
- 11月9日(土) 第8回女子中高生のための関西科学塾<D>を共催
- 11月11日(月) 第77回女性研究者支援推進室会議
- 11月12日(火) 第6回「性差を科学する(2)」魚類の性転換:奥田 昇
第5回日中韓女性科学技術者指導者フォーラムに参加:稲葉カヨ
- 11月14日(木) 第31回就労支援事業ワーキンググループ会議
- 11月15日(金) ニュースレター「たちばな」第53号発行
- 11月17日(日) 第8回女子中高生のための関西科学塾<E>を共催
- 11月19日(火) 第7回「性差を科学する(2)」魚類における子育てと性役割:奥田 昇
- 11月26日(火) 第8回「性差を科学する(2)」脳の発達の性差:栗屋智就
- 12月3日(火) 第9回「性差を科学する(2)」免疫反応、免疫疾患から見た性差:稲葉カヨ
人権に関する研修会「セクシュアルハラスメントの判例」に参加:犬塚典子
- 12月5日(木) 神戸大学シンポジウム「Women in Science and Education」に参加:犬塚典子
- 12月6日(金) 九州大学より、理事他3名が来室
- 12月9日(月) 第78回女性研究者支援推進室会議
- 12月10日(火) 第10回「性差を科学する(2)」女性に多い摂食障害について医学的、医療人類学的視点から:林 晶子
女性教員懇話会第64回研究会「大学改革期における女性支援の現状と今後を考える」に協力
- 12月13日(金) 平成26年度1期 就労支援事業による支援希望者募集開始
- 12月15日(日) 女子高生・車座フォーラム2013
- 12月16日(月) 内閣府シンポジウム「WEPsが変える仕事の未来」に参加:犬塚典子
- 12月17日(火) 第11回「性差を科学する(2)」
子どもの発達の性差についてー自閉症スペクトラム児を通して考えるー:加藤寿宏
- 12月22日(日) 東京大学「女子高生のための東大説明会2013」に参加:犬塚典子
- 1月7日(火) 第12回「性差を科学する(2)」子宮頸癌からヒトの性の進化を探る:小西郁生
- 1月10日(金) ブリストル大学より2名が来室
- 1月14日(火) 第13回「性差を科学する(2)」インターセックスの診断と治療～婦人科医の立場から～:菅沼信彦
病児保育室にて、インフルエンザウィルス流行期の特別対応を開始
- 1月15日(水) ニュースレター「たちばな」第54号発行

- 1月20日(月) 第79回女性研究者支援推進室会議
- 1月21日(火) 第14回「性差を科学する(2)」子宮をMR画像で見る:富樫かおり
- 1月23日(木) 産業医巡視
- 1月28日(火) 第15回「性差を科学する(2)」まとめー性差を科学する:伊藤公雄
- 1月30日(木) 第32回就労支援事業ワーキンググループ会議
- 2月10日(月) 第80回女性研究者支援推進室会議
- 2月25日(火) ニュースレター「たちばな」第55発行
- 3月1日(土) 介護講演会ー介護する家族にとってのターニングポイントー講師:川口有美子
- 3月3日(月) 京都大学優秀女性研究者賞「たちばな賞」表彰式と受賞者による研究発表会
- 3月7日(金) ストレスマネジメント講座ーワーク・エンゲイジメントに注目した個人と組織の活性化・より健康でより高いパフォーマンスに向けてー講師:島津明人
- 3月10日(月) 第31回女性研究者支援センター運営委員会、第81回女性研究者支援推進室会議
- 3月15日(土) 第8回女子中高生のための関西科学塾<F>を共催
~16日(日)
- 3月21日(金) 病児保育室の床補修
~23日(日)



12月6日

稲葉 副学長(左)と菊川 九州大学理事(右)



1月10日

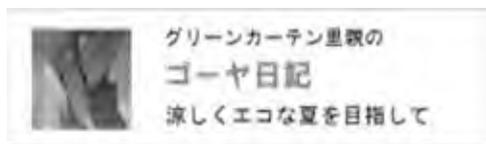
ブリストル大学の研究者と懇談

環境への取組「Green プロジェクト」

京都大学環境科学センターによる「グリーンカーテン里親募集～涼しくエコな夏を目指しませんか？～(H25)」に応募し、女性研究者支援センターでゴーヤを育てました。



■女性研究者支援センターホームページには、里親「ゴーヤ支援室」の奮闘の日々を掲載しました。



昨年度に続いて、京都大学環境科学センターによる「グリーンカーテン里親募集～涼しくエコな夏を目指しませんか？～」に応募しました。5月下旬にセンター建替え工事のための引越しがあり、ゴーヤ里親を一度はあきらめかけたのですが、環境科学センターの皆様のはげましとご支援のおかげで、里

親になることを決心しました。思修館からいただいたふうせんかずらのフウちゃんとともに、女性研究者支援センター広報部長「ゴーヤ三郎&四郎」は、立派なグリーンカーテンに成長し、センターを厳しい日差しから守ってくれました。

また、今年度からは、収穫数を掲示してきました。全部で 77 個のゴーヤを収穫することができました。



6/6
(木)



引越し後の片付けが一段落したので、里親

としてゴーヤたちを迎えに行ってきました。環境科学センターでは、ゴーヤの苗、腐葉土、肥料、プランター、ネットなど、育てるために必要な一式を提供してくださったので、早速、植え付けました。「ゴーヤたち、女性研究者支援センターによこそ！」

6/13
(木)



ゴーヤの成長は早い。弟の四郎(右)はネットにつかまり立ちができるようになりました。一足先につかまり立ちした

お兄ちゃんの三郎(左)は、立派なゴーヤになるように、芯止め(先端を切る)をしました。三郎の成長を願ってのこととは言え、里親の心境は複雑です。

6/19
(水)



お隣の思修館の先生方に移植ごてをお貸した縁で、ふうせんかずらのフウちゃんがセンターにやって来ました。玄関前で職員の出勤を待っていたフウちゃん。新しい仲間が増えて、ゴーヤ支援室メンバーも三郎&四郎も大喜びです。思修館の皆様、フウちゃんを大切に育てます。ありがとうございました。

6/21
(金)



2日続いた雨のおかげか、すごいスピードで成長中の三郎と四郎。二人同時に花も咲き、また週明

けが楽しみになってきました。それにしても、しっかりまっすぐに立つ三郎(左)に比べて、頭でっかちになってバランスがうまく取れない弟の四郎(右)が何とも可愛く・・・とにかくこのまま二人揃って元気に育てほしい、と母は強く思います。

7/1
(月)



7月に入って更に伸び盛りのお兄ちゃん三郎は、しっかりとネットに沿ってグリーンカーテンになろうとしています。弟四郎もツルを伸ばしながら頑張ってネットにつかまり、ふうせんかずらのフウちゃんも少しずつですが、追いつこうとしているようです。またこの一週間で大きく成長するのが楽しみです

7/8
(月)



週が空けて少しスリムな弟の四郎も、すっかりお兄ちゃんの三郎と同じ背丈になりました。三郎・四郎・ふうちゃんの3きょうだいが仲良く並んでいる姿に、毎日癒されています。

7/16
(火)



わずか1週間で、二人とも窓の上まで背が伸びました。そして何と弟の四郎が2つも実をつけました。6センチと3センチの小さな実ですが、きちんとゴーヤの形をしています。葉っぱも増えて、グリーンカーテンらしくなってきた二人からますます目が離せません。

7/22
(月)



毎日厳しい暑さにも負けず、三郎・四郎・フウちゃんの3人は元気にスクスク育っています。いつの

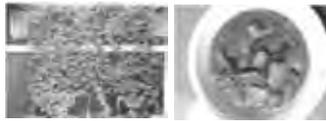
間にかフウちゃんもネットに背が届くようになりましたが、可愛い花が咲くのはもう少し先でしょうか。これからまだまだ楽しみがいっぱいです。

7/26
(金)



待ちに待った初収穫の結果です。実は2つでそれぞれ9cmと10cmでした。今は他にも5~6個の実がなっている状態ですが、まだまだ小さい実です。立派なゴーヤを収穫する日を楽しみにしながら、せっせと頑張ってます。

7/31
(水)



今日も10cmほどのゴーヤを3つ収穫しました。

先週収穫したゴーヤは、オクラやズッキーニ、ナス等と一緒に夏野菜カレーにしてみました。少量ながらもしっかりと苦味が存在をアピールしていました。8月にはもっと葉っぱも増えて、大きなゴーヤが育つよう頑張ります！

8/5
(月)



先週収穫したゴーヤは、冷蔵庫にあった色々なものと一緒にチャンプルになりました。

- ・少量の水と一緒にレンジでチン
(苦味が和らぎます。)
- ・野菜、ひき肉、エビと一緒にいためます。
- ・みりん、しょうゆ、ゴマ油で味付けすれば完成。

三郎、四郎、ふうちゃんが、夏休み明けにどのくらい成長しているか楽しみです。

8/6
(火)



待望のふうちゃんの実(左)がなりました。お隣の思修館「廣志房」で育てているふうちゃんのきょうだいたち(右)は、たくさん実をつけているので、心配していました。これで安心です。

8/15
(木)



夏休み明けで、久しぶりに会うゴーヤ達。葉っぱが増えて、本格的なグリーンカーテンになっています。今日は小さな可愛い実を3つ収穫しました。暑さに負けそうな毎日ですが、すくすく育つゴーヤ達を見ると本当になごみます。

8/28
(木)



この頃は少し目を離すと、すぐに赤くなってしまふゴ

ーヤ達。葉っぱもいつの間にか隣の木まで伸びて、仲良く一体化しています。フウちゃんもゴーヤ達に隠れてはいますが、とても大きく伸びて実もたくさんなって可愛い盛りです。

9/5
(木)



この頃のゴーヤは、大きくなる前にすぐに赤くな

って破裂してしまうことが多くなりました。なかなか立派なゴーヤは育ってくれないのですが、相変わらず葉っぱはとても元気です。フウちゃんもかなり高い所まで伸びて、たくさん実をつけています。夏が終わるまであと少し、みんなで楽しみたいと思います。

9/12
(木)



相変わらず小さくて可愛い実がたくさん

の三郎と四郎ですが、この頃少しお疲れ気味の様子。そんなゴーヤ達に代わって大活躍なのが、フウちゃんです。いつの間にかカーテンの1番上まで伸びたフウちゃん、立派な3人きょうだいに育ちました。

9/19
(木)



長い夏の間中頑張ったゴーヤ達の葉っぱも、だんだんと黄色くなってきました。ゴーヤとフウちゃん

の可愛いツーショットも、そろそろ見納めかも・・と思うと寂しくなってきました。

10/3
(木)



10月になり、朝晩の気温が下がってきました。そしてグリーンカーテンもその大役を終える時が来ました。寂しいですが、いよいよゴーヤ達とお別れです。片付けをしていると、枯れた葉っぱの中から小さい実がたくさん出てきて、最後までその可愛さに癒されました。

ご指導くださった環境科学センターの皆様、ありがとうございました。

また来年、必ず里親になります。よろしくお願ひします^^

グリーンカーテン里親のゴーヤ日記

京都大学教員数

(平成25年5月1日現在)

| 区分 | 役員 | 教授 | | | 准教授 | | | 講師 | | | 助教 | | | 助手 | | | 合計 | | |
|-----------------|----|-----|----|-------|-----|----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|----|-----|----|-------|-----|-------|
| | | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 総長 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 0 | 1 | |
| 理事・監事(非常勤含む) | 9 | | | | | | | | | | | | | | | 9 | 0 | 9 | |
| 附属図書館 | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | 0 | 1 | 1 | |
| 文学研究科 | | 43 | 9 | 52 | 24 | 2 | 26 | 1 | 1 | 3 | | 3 | | | 71 | 11 | 82 | | |
| 教育学研究科 | | 13 | 3 | 16 | 8 | 6 | 14 | | | | 1 | 2 | 3 | | 22 | 11 | 33 | | |
| 法学研究科 | | 45 | 4 | 49 | 13 | 5 | 18 | 1 | 1 | 2 | 5 | 4 | 9 | 1 | 1 | 2 | 65 | 15 | 80 |
| 経済学研究科 | | 19 | 1 | 20 | 11 | 1 | 12 | 2 | 3 | 5 | 1 | | 1 | | 33 | 5 | 38 | | |
| 理学研究科 | | 82 | 2 | 84 | 68 | 8 | 76 | 14 | 1 | 15 | 75 | 6 | 81 | | 239 | 17 | 256 | | |
| 医学研究科 | | 77 | 8 | 85 | 51 | 7 | 58 | 47 | 8 | 55 | 34 | 20 | 54 | | 209 | 43 | 252 | | |
| 医学部附属病院 | | 4 | | 4 | 13 | 2 | 15 | 8 | 2 | 10 | 128 | 15 | 143 | | 153 | 19 | 172 | | |
| 薬学研究科 | | 13 | | 13 | 14 | 3 | 17 | 1 | 1 | 2 | 13 | 1 | 14 | | 41 | 5 | 46 | | |
| 工学研究科 | | 131 | 1 | 132 | 113 | 2 | 115 | 26 | 1 | 27 | 125 | 6 | 131 | | 395 | 10 | 405 | | |
| 農学研究科 | | 62 | 3 | 65 | 47 | 2 | 49 | 8 | 2 | 10 | 67 | 8 | 75 | | 184 | 15 | 199 | | |
| 人間・環境学研究科 | | 60 | 7 | 67 | 27 | 3 | 30 | | 1 | 1 | 17 | 3 | 20 | | 104 | 14 | 118 | | |
| エネルギー科学研究科 | | 19 | | 19 | 17 | | 17 | | | | 14 | | 14 | | 50 | 0 | 50 | | |
| アジア・アフリカ地域研究研究科 | | 14 | | 14 | 10 | 2 | 12 | | | | 3 | 1 | 4 | | 27 | 3 | 30 | | |
| 情報学研究科 | | 35 | | 35 | 19 | 2 | 21 | 11 | | 11 | 32 | 1 | 33 | | 97 | 3 | 100 | | |
| 生命科学研究科 | | 16 | 1 | 17 | 9 | | 9 | 3 | | 3 | 17 | 3 | 20 | | 45 | 4 | 49 | | |
| 総合生存学館 | | 4 | | 4 | 1 | | 1 | | | | | | | | 5 | 0 | 5 | | |
| 地球環境学堂 | | 17 | | 17 | 14 | 3 | 17 | | | | 10 | 3 | 13 | | 41 | 6 | 47 | | |
| 公共政策連携研究部 | | 9 | | 9 | | | | | | | | | | | 9 | 0 | 9 | | |
| 経営管理研究部 | | 16 | | 16 | 3 | | 3 | 1 | | 1 | | | | | 20 | 0 | 20 | | |
| 化学研究所 | | 28 | | 28 | 18 | 1 | 19 | | | | 34 | 3 | 37 | | 80 | 4 | 84 | | |
| 人文科学研究所 | | 19 | 1 | 20 | 15 | 2 | 17 | | | | 8 | 5 | 13 | 1 | 1 | 43 | 8 | 51 | |
| 再生医科学研究所 | | 8 | 1 | 9 | 7 | 2 | 9 | 2 | | 2 | 9 | 1 | 10 | | 26 | 4 | 30 | | |
| エネルギー理工学研究所 | | 11 | | 11 | 10 | | 10 | 1 | | 1 | 11 | | 11 | | 33 | 0 | 33 | | |
| 生存圏研究所 | | 12 | | 12 | 9 | | 9 | 1 | | 1 | 12 | 2 | 14 | | 34 | 2 | 36 | | |
| 防災研究所 | | 30 | | 30 | 30 | 1 | 31 | | | | 26 | 1 | 27 | | 86 | 2 | 88 | | |
| 基礎物理学研究所 | | 8 | | 8 | 8 | | 8 | | | | 3 | | 3 | | 19 | 0 | 19 | | |
| ウイルス研究所 | | 11 | 1 | 12 | 9 | | 9 | 1 | | 1 | 13 | 4 | 17 | | 34 | 5 | 39 | | |
| 経済研究所 | | 14 | 1 | 15 | 5 | | 5 | | | | 2 | | 2 | | 21 | 1 | 22 | | |
| 数理解析研究所 | | 13 | | 13 | 11 | | 11 | 3 | | 3 | 13 | | 13 | | 40 | 0 | 40 | | |
| 原子炉実験所 | | 17 | 1 | 18 | 19 | 2 | 21 | 1 | | 1 | 28 | 4 | 32 | | 65 | 7 | 72 | | |
| 霊長類研究所 | | 12 | | 12 | 11 | | 11 | | | | 7 | 4 | 11 | | 30 | 4 | 34 | | |
| 東南アジア研究所 | | 7 | 3 | 10 | 7 | | 7 | | | | 2 | 2 | 4 | | 16 | 5 | 21 | | |
| iPS細胞研究所 | | 9 | | 9 | 5 | | 5 | 4 | | 4 | | | | | 18 | 0 | 18 | | |
| 学術情報メディアセンター | | 7 | | 7 | 7 | | 7 | | | | 6 | | 6 | | 20 | 0 | 20 | | |
| 放射線生物研究センター | | 3 | | 3 | 3 | | 3 | 1 | | 1 | 1 | | 1 | | 8 | 0 | 8 | | |
| 生態学研究センター | | 6 | | 6 | 5 | 1 | 6 | | | | | | | | 11 | 1 | 12 | | |
| 地域研究統合情報センター | | 4 | 1 | 5 | 3 | 2 | 5 | | | | 3 | | 3 | | 10 | 3 | 13 | | |
| 野生動物研究センター | | 2 | 1 | 3 | 2 | | 2 | | | | | | | | 4 | 1 | 5 | | |
| 高等教育研究開発推進センター | | 6 | 1 | 7 | 6 | 1 | 7 | | | | | | | | 12 | 2 | 14 | | |
| 総合博物館 | | 2 | 1 | 3 | 2 | | 2 | 1 | | 1 | 1 | | 1 | | 6 | 1 | 7 | | |
| 低温物質科学研究センター | | 3 | | 3 | 2 | | 2 | | | | 2 | | 2 | 1 | 1 | 8 | 0 | 8 | |
| フィールド科学教育研究センター | | 4 | 1 | 5 | 7 | | 7 | 2 | | 2 | 6 | 3 | 9 | | 19 | 4 | 23 | | |
| こころの未来研究センター | | 4 | 1 | 5 | | | | | | | | | | | 4 | 1 | 5 | | |
| 文化財総合研究センター | | | | | | | | | | | 4 | | 4 | | 4 | 0 | 4 | | |
| 国際高等教育院 | | 20 | 2 | 22 | 4 | 1 | 5 | | | | | | | | 24 | 3 | 27 | | |
| 環境安全保健機構 | | 3 | | 3 | 5 | | 5 | | | | 6 | 2 | 8 | | 14 | 2 | 16 | | |
| 国際交流推進機構 | | 2 | 2 | 4 | 2 | 2 | 4 | | | | 1 | | 1 | | 5 | 4 | 9 | | |
| 情報環境機構 | | 3 | 1 | 4 | | | | | | | | 1 | 1 | | 3 | 2 | 5 | | |
| 産官学連携本部 | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | 1 | 0 | 1 | | |
| 物質-細胞統合システム拠点 | | 7 | 2 | 9 | | | | | | | | | | | 7 | 2 | 9 | | |
| カウンセリングセンター | | 2 | | 2 | | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | | | | | 3 | 2 | 5 | | |
| 大学文書館 | | 1 | | 1 | | | | | | | 2 | | 2 | | 3 | 0 | 3 | | |
| 学際融合教育研究推進センター | | 1 | | 1 | 1 | | 1 | 2 | | 2 | | | | | 4 | 0 | 4 | | |
| 合計 | 10 | 958 | 60 | 1,018 | 676 | 65 | 741 | 143 | 21 | 164 | 745 | 105 | 850 | 3 | 1 | 4 | 2,535 | 252 | 2,787 |

京都大学学生数

学部学生数
(平成24年5月1日現在)

| 区分 | 学生 | | | 聴講生 | | | 科目等履修生 | | | 合計 | | |
|----------|--------|-------|--------|-----|----|----|--------|----|-----|--------|-------|--------|
| | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 総合人間学部 | 415 | 172 | 587 | | | | 7 | 9 | 16 | 422 | 181 | 603 |
| 文学部 | 567 | 440 | 1,007 | 39 | 19 | 58 | 13 | 8 | 21 | 619 | 467 | 1,086 |
| 教育学部 | 164 | 119 | 283 | 6 | 2 | 8 | 6 | 8 | 14 | 176 | 129 | 305 |
| 法学部 | 1,164 | 401 | 1,565 | 2 | 2 | 4 | 1 | | 1 | 1,167 | 403 | 1,570 |
| 経済学部 | 974 | 212 | 1,186 | 8 | 5 | 13 | 3 | | 3 | 985 | 217 | 1,202 |
| 理学部 | 1,247 | 141 | 1,388 | | | | 9 | | 9 | 1,256 | 141 | 1,397 |
| 医学部(6年制) | 564 | 117 | 681 | | | | | | | 564 | 117 | 681 |
| 医学部(4年制) | 171 | 461 | 632 | | | | | | | 171 | 461 | 632 |
| 薬学部(6年制) | 85 | 102 | 187 | | | | | | | 85 | 102 | 187 |
| 薬学部(4年制) | 167 | 51 | 218 | | | | | | | 167 | 51 | 218 |
| 工学部 | 3,982 | 362 | 4,344 | 3 | | 3 | 2 | 1 | 3 | 3,987 | 363 | 4,350 |
| 農学部 | 925 | 418 | 1,343 | | | | 9 | 2 | 11 | 934 | 420 | 1,354 |
| 計 | 10,425 | 2,996 | 13,421 | 58 | 28 | 86 | 50 | 28 | 78 | 10,533 | 3,052 | 13,585 |
| | (112) | (74) | (186) | | | | (1) | | (1) | (113) | (74) | (187) |

(注)()内は、外国人留学生数(留学ビザ留学生)で内数

大学院学生数
(平成24年5月1日現在)

| 区分 | 修士課程 | | | 博士(後期)課程 | | | 専門職学位課程 | | | 聴講生 | | | 科目等履修生 | | | 合計 | | |
|-----------------|-------|-------|-------|----------|-------|-------|---------|------|------|-----|----|----|--------|---|-----|-------|-------|---------|
| | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 文学研究科 | 159 | 94 | 253 | 143 | 77 | 220 | | | | 17 | 12 | 29 | | | | 319 | 183 | 502 |
| 教育学研究科 | 42 | 47 | 89 | 50 | 48 | 98 | | | | | | | 4 | 2 | 6 | 96 | 97 | 193 |
| 法学研究科 | 22 | 9 | 31 | 40 | 28 | 68 | 292 | 89 | 381 | 3 | | 3 | 3 | 2 | 5 | 360 | 128 | 488 |
| 経済学研究科 | 85 | 42 | 127 | 97 | 30 | 127 | | | | 5 | 1 | 6 | 3 | 1 | 4 | 190 | 74 | 264 |
| 理学研究科 | 564 | 92 | 656 | 424 | 88 | 512 | | | | | | | 3 | | 3 | 991 | 180 | 1,171 |
| 医学研究科 | | | | 501 | 165 | 666 | | | | | | | | | | 501 | 165 | 666 |
| | 84 | 98 | 182 | 62 | 79 | 141 | 26 | 30 | 56 | | | | 1 | | 1 | 173 | 207 | 380 |
| 薬学研究科 | | | | 14 | 4 | 18 | | | | | | | | | | 14 | 4 | 18 |
| | 92 | 34 | 126 | 59 | 18 | 77 | | | | | | | | | | 151 | 52 | 203 |
| 工学研究科 | 1,326 | 162 | 1,488 | 476 | 91 | 567 | | | | | | | | | | 1,802 | 253 | 2,055 |
| 農学研究科 | 408 | 220 | 628 | 184 | 90 | 274 | | | | | | | 1 | | 1 | 593 | 310 | 903 |
| 人間・環境学研究科 | 173 | 137 | 310 | 172 | 148 | 320 | | | | | | | | | | 345 | 285 | 630 |
| エネルギー科学研究科 | 258 | 17 | 275 | 77 | 13 | 90 | | | | | | | | | | 335 | 30 | 365 |
| アジア・アフリカ地域研究研究科 | | | | 74 | 82 | 156 | | | | | | | 2 | 1 | 3 | 76 | 83 | 159 |
| 情報学研究科 | 394 | 39 | 433 | 125 | 29 | 154 | | | | | | | 1 | | 1 | 520 | 68 | 588 |
| 生命科学研究科 | 89 | 71 | 160 | 69 | 48 | 117 | | | | | | | | | | 158 | 119 | 277 |
| 総合生存学館 | | | | 7 | 3 | 10 | | | | | | | | | | 7 | 3 | 10 |
| 地球環境学舎 | 48 | 40 | 88 | 31 | 36 | 67 | | | | | | | | | | 79 | 76 | 155 |
| 公共政策教育部 | | | | | | | 74 | 19 | 93 | 2 | | 2 | | | | 76 | 19 | 95 |
| 経営管理教育部 | | | | | | | 123 | 75 | 198 | | | | 3 | 3 | 123 | 78 | 201 | |
| 計 | 3,744 | 1,102 | 4,846 | 2,605 | 1,077 | 3,682 | 515 | 213 | 728 | 27 | 13 | 40 | 18 | 9 | 27 | 6,909 | 2,414 | 9,323 |
| | (219) | (204) | (423) | (420) | (286) | (706) | (27) | (56) | (83) | | | | | | | (666) | (546) | (1,212) |

(注1)医学研究科・薬学研究科の博士(後期)課程の上段は博士課程(4年制)

(注2)アジア・アフリカ地域研究研究科、総合生存学館は一貫制博士課程

(注3)()内は、外国人留学生数(留学ビザ留学生)で内数。

(分析データ : 本学ホームページ 広報課 2013年5月1日)

京都大学の女性研究者・女子学生の状況

1. 教員数の経年変化と女性比率

(分析データ：京都大学概要 2013)

2004年までは、保田その氏の作成データ（京都大学女性教員懇話会 2005年度ニュースレターNo.2）による

2013年5月1日現在の京都大学の教員数(助手4名を含む)は、全体で2,777名である。そのうち女性教員は全体の9.1%、数にしてわずか252名である。2006年は7.3%だったので、この7年間で1.8%増加している。女性教員数が目立って増加の傾向を見せてきたのは、2000年頃からである。図1に1952年以来的女性教員の推移を示す。



図1：1952年以来的女性教員の推移

職階別に男女比を見ると、女性は総数が少ないのでどのポストでもわずかだが、その中でも、教授ポストの女性比率が特に少なく、5.9%しかない。准教授ポストでは8.8%、講師、助教・助手は12%が女性である(図2)。

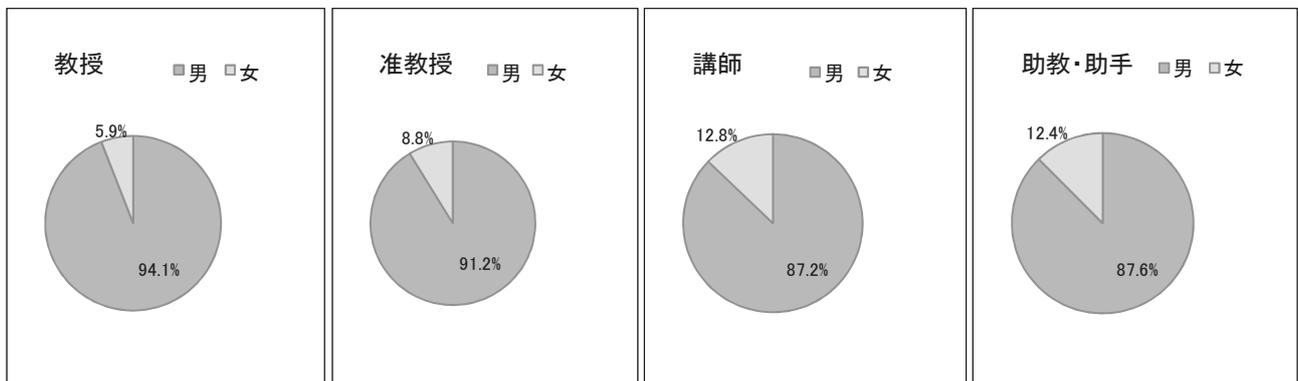


図2 教員の職階毎の男女比 (2013年5月1日現在)

図3の職階分布からわかるように、男性では教授(38%)が最も多く、女性では助教・助手(42%)が最も多い。

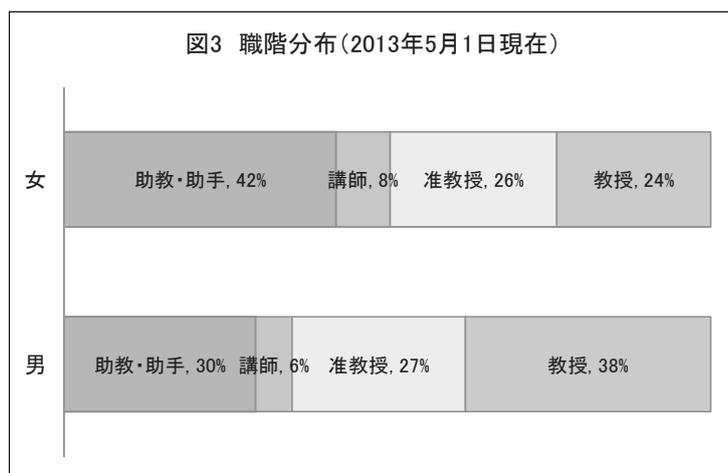


表1に男女別教員数(「定員」)を示す。女性がない部局は載せていないが、総合計は総教員数である。

表1 男女別教員数(「定員」)と女性比率(部局別)

| 部局 | 男 | 女 | 計 | 女性比率 |
|-----------------|-------|-----|-------|--------|
| 附属図書館 | 0 | 1 | 1 | 100.0% |
| 国際交流推進機構 | 5 | 4 | 9 | 44.4% |
| 情報環境機構 | 3 | 2 | 5 | 40.0% |
| カウンセリングセンター | 3 | 2 | 5 | 40.0% |
| 教育学研究科 | 22 | 11 | 33 | 33.3% |
| 東南アジア研究所 | 16 | 5 | 21 | 23.8% |
| 地域研究統合情報センター | 10 | 3 | 13 | 23.1% |
| 物質-細胞統合システム拠点 | 7 | 2 | 9 | 22.2% |
| 野生動物研究センター | 4 | 1 | 5 | 20.0% |
| こころの未来研究センター | 4 | 1 | 5 | 20.0% |
| 法学研究科 | 65 | 15 | 80 | 18.8% |
| フィールド科学教育研究センター | 19 | 4 | 23 | 17.4% |
| 医学研究科 | 209 | 43 | 252 | 17.1% |
| 人文科学研究所 | 43 | 8 | 51 | 15.7% |
| 高等教育研究開発推進センター | 12 | 2 | 14 | 14.3% |
| 総合博物館 | 6 | 1 | 7 | 14.3% |
| 文学研究科 | 71 | 11 | 82 | 13.4% |
| 再生医科学研究所 | 26 | 4 | 30 | 13.3% |
| 経済学研究科 | 33 | 5 | 38 | 13.2% |
| ウイルス研究所 | 34 | 5 | 39 | 12.8% |
| 地球環境学堂 | 41 | 6 | 47 | 12.8% |
| 環境安全保健機構 | 14 | 2 | 16 | 12.5% |
| 人間・環境学研究科 | 104 | 14 | 118 | 11.9% |
| 霊長類研究所 | 30 | 4 | 34 | 11.8% |
| 国際高等教育院 | 24 | 3 | 27 | 11.1% |
| 医学部附属病院 | 153 | 19 | 172 | 11.0% |
| 薬学研究科 | 41 | 5 | 46 | 10.9% |
| アジア・アフリカ地域研究研究科 | 27 | 3 | 30 | 10.0% |
| 原子炉実験所 | 65 | 7 | 72 | 9.7% |
| 生態学研究センター | 11 | 1 | 12 | 8.3% |
| 生命科学研究科 | 45 | 4 | 49 | 8.2% |
| 農学研究科 | 184 | 15 | 199 | 7.5% |
| 理学研究科 | 239 | 17 | 256 | 6.6% |
| 生存圏研究所 | 34 | 2 | 36 | 5.6% |
| 化学研究所 | 80 | 4 | 84 | 4.8% |
| 経済研究所 | 21 | 1 | 22 | 4.5% |
| 情報学研究科 | 97 | 3 | 100 | 3.0% |
| 工学研究科 | 395 | 10 | 405 | 2.5% |
| 防災研究所 | 86 | 2 | 88 | 2.3% |
| 総合計 | 2,525 | 252 | 2,777 | 9.1% |

全体平均
9.1%

2. 女性研究者の雇用形態

(分析データ：総務部資料 2013年5月1日)

表2に示すように、本学には女性研究者が約794人いる。プロジェクトなどの雇用でない、いわゆる“定員”の教員は255人、残り539人が種々のプロジェクトなどで雇用されている任期付きの研究者である。表2にその職種、職階分布を示した。表2で常勤というのは、勤務形態は定員と同じだが雇用形態が例えば、准教授(産官学連携)というように職名に財源の由来が付いている任期付きのポストを示している。非常勤というのは、勤務形態が非常勤で雇用の財源はいろいろである。例えば「最先端研究」などである。ポストと呼ばれて、学位をとっても定員のポストには就けないで、任期付きの研究員などのポストに就いている潜在的な女性研究者が、1.5倍も存在している。

表2 女性研究者の雇用形態

| 学内の雇用形態 | | 人数 | % |
|---------|-------|-----|-------|
| 定員 | 教授 | 60 | 7.6 |
| | 准教授 | 66 | 8.3 |
| | 講師 | 21 | 2.6 |
| | 助教・助手 | 108 | 13.6 |
| | 合計 | 255 | 32.1 |
| 常勤 | 教授 | 3 | 0.4 |
| | 准教授 | 29 | 3.7 |
| | 講師 | 7 | 0.9 |
| | 助教 | 68 | 8.6 |
| | 研究員 | 148 | 18.6 |
| | 合計 | 255 | 32.1 |
| 非常勤 | 研究員 | 221 | 27.8 |
| | 医員 | 59 | 7.4 |
| | 教員 | 4 | 0.5 |
| | 合計 | 284 | 35.8 |
| 総合計 | | 794 | 100.0 |



3. 女性教員の部局別・職階別分布

表3に全部局の職階別女性教員数(2013年5月1日現在)を示す。

(分析データ：総務部資料 2013年5月1日)

表3: 部局別職階別女性教員数(2013年5月1日現在、総務部より)

| 部局 | 定員 | | | | 合計 | 常勤 | | | | | 合計 | 非常勤 | | | 合計 | 総合計 |
|-----------------|----|-----|----|----------|-----|----|-----|----|----|-----|-----|-----|----|----|-----|-----|
| | 教授 | 准教授 | 講師 | 助教 助手 | | 教授 | 准教授 | 講師 | 助教 | 研究員 | | 研究員 | 医員 | 教員 | | |
| 医学研究科 | 8 | 7 | 8 | 20 | 43 | 0 | 12 | 1 | 10 | 19 | 42 | 42 | 0 | 0 | 42 | 127 |
| 医学部附属病院 | 0 | 2 | 2 | 16 | 20 | 0 | 0 | 1 | 18 | 2 | 21 | 9 | 59 | 0 | 68 | 109 |
| iPS細胞研究所 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 40 | 42 | 6 | 0 | 0 | 6 | 48 |
| 物質-細胞統合システム拠点 | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 1 | 6 | 15 | 23 | 12 | 0 | 0 | 12 | 37 |
| 工学研究科 | 1 | 2 | 1 | 6 | 10 | 0 | 2 | 0 | 1 | 10 | 13 | 12 | 0 | 0 | 12 | 35 |
| 農学研究科 | 3 | 2 | 2 | 8 | 15 | 0 | 1 | 0 | 2 | 5 | 8 | 8 | 0 | 0 | 8 | 31 |
| 理学研究科 | 2 | 8 | 1 | 6 | 17 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 3 | 10 | 0 | 0 | 10 | 30 |
| 学際融合教育研究推進センター | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 1 | 8 | 4 | 17 | 13 | 0 | 0 | 13 | 30 |
| 人間・環境学研究科 | 7 | 3 | 1 | 3 | 14 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 5 | 2 | 0 | 0 | 2 | 21 |
| 教育学研究科 | 3 | 6 | 0 | 2 | 11 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 10 | 0 | 0 | 10 | 21 |
| 霊長類研究所 | 0 | 0 | 0 | 4 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 12 | 0 | 1 | 13 | 18 |
| 東南アジア研究所 | 3 | 0 | 0 | 2 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 4 | 6 | 0 | 0 | 6 | 15 |
| 化学研究所 | 0 | 1 | 0 | 3 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 6 | 5 | 0 | 0 | 5 | 15 |
| 法学研究科 | 4 | 5 | 1 | 5 | 15 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 15 |
| 地球環境学堂 | 0 | 3 | 0 | 3 | 6 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 | 6 | 0 | 0 | 6 | 14 |
| 産官学連携本部 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 5 | 7 | 7 | 0 | 0 | 7 | 14 |
| 生命科学研究科 | 1 | 0 | 0 | 3 | 4 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 7 | 0 | 0 | 7 | 13 |
| 文学研究科 | 9 | 2 | 0 | 0 | 11 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 12 |
| 人文科学研究科 | 1 | 2 | 0 | 6 | 9 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 3 | 12 |
| ウイルス研究所 | 1 | 0 | 0 | 4 | 5 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 6 | 0 | 0 | 6 | 12 |
| 生存圏研究所 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 3 | 6 | 0 | 0 | 6 | 11 |
| 薬学研究科 | 0 | 3 | 1 | 1 | 5 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 3 | 3 | 0 | 0 | 3 | 11 |
| 白眉センター | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 9 | 0 | 11 | 0 | 0 | 0 | 0 | 11 |
| 再生医学研究所 | 1 | 2 | 0 | 1 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 4 | 2 | 0 | 0 | 2 | 10 |
| こころの未来研究センター | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 3 | 1 | 5 | 2 | 0 | 0 | 2 | 8 |
| アジア・アフリカ地域研究研究科 | 0 | 2 | 0 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 5 | 8 |
| 野生動物研究センター | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 2 | 3 | 0 | 1 | 4 | 7 |
| 経営管理研究部 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | 4 | 1 | 0 | 2 | 3 | 7 |
| 原子炉実験所 | 1 | 2 | 0 | 4 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 7 |
| 防災研究所 | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 4 | 1 | 0 | 0 | 1 | 7 |
| 国際交流推進機構 | 2 | 3 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 |
| 国際高等教育院 | 2 | 1 | 0 | 0 | 3 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 |
| 福井謙一記念研究センター | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 |
| 地域研究統合情報センター | 1 | 2 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 5 |
| エネルギー理工学研究所 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 3 | 0 | 0 | 3 | 5 |
| 経済学研究科 | 1 | 1 | 3 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 |
| フィールド科学教育研究センター | 1 | 0 | 0 | 3 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 5 |
| 生態学研究センター | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 4 | 5 |
| アフリカ地域研究資料センター | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 4 | 0 | 0 | 4 | 5 |
| 情報学研究科 | 0 | 2 | 0 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 放射線生物研究センター | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 3 | 3 |
| 経済研究所 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| 総合博物館 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| 高等教育研究開発推進センター | 1 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 情報環境機構 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 基礎物理学研究所 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| エネルギー科学研究科 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| 総合生存学館 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| カウンセリングセンター | 0 | 1 | 1 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 環境安全保健機構 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 数理解析研究所 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 微生物科学寄附研究部門 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 附属図書館 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 女性研究者支援センター | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 学術情報メディアセンター | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 合計 | 60 | 66 | 21 | 108 | 255 | 3 | 29 | 7 | 68 | 148 | 255 | 221 | 59 | 4 | 284 | 794 |

4. 女子学生の状況

(分析データ：京都大学概要 2013)

2013年5月1日現在の京都大学の学部生数、大学院生数、女性比率を表4と表5に示す。1946年からの女子学生数とその比率は図5にある。

学部学生の女性比率は全体で22.5%と、教員と比較するとかなり高い。医学部(4年制)では、72.9%、薬学部(6年制)では54.5%、文学部、教育学部は、約40%が女子学生である。工学部は教員と同じく低く、女性比率8.3%である。大学院では、修士課程から博士課程に進むに従って、女性比率が、22.7%から29.3%へと高くなる。しかし、図6に示したように教員への道は狭いパイになっている。

表4 学部学生数と女性比率

| | 学部生数計 | 女性% |
|----------|-----------------|------|
| 総合人間学部 | 603 | 30.0 |
| 文学部 | 1,086 | 43.0 |
| 教育学部 | 305 | 42.3 |
| 法学部 | 1,570 | 25.7 |
| 経済学部 | 1,202 | 18.1 |
| 理学部 | 1,397 | 10.1 |
| 医学部(6年制) | 681 | 17.2 |
| 医学部(4年制) | 632 | 72.9 |
| 薬学部(6年制) | 187 | 54.5 |
| 薬学部(4年制) | 218 | 23.4 |
| 工学部 | 4,350 | 8.3 |
| 農学部 | 1,354 | 31.0 |
| 計 | 13,585 (187) | 22.5 |

注) ()内は、外国人留学生数(留学ビザ留学生)で内数

表5 大学院生数と女性比率

| | 修士課程 | 女性% | 博士課程 | 女性% |
|-----------------|----------------|------|----------------|------|
| 文学研究科 | 253 | 37.2 | 220 | 35.0 |
| 教育学研究科 | 89 | 52.8 | 98 | 49.0 |
| 法学研究科 | 31 | 29.0 | 68 | 41.2 |
| 経済学研究科 | 127 | 33.1 | 127 | 23.6 |
| 理学研究科 | 656 | 14.0 | 512 | 17.2 |
| 医学研究科 | | | 666 | 24.8 |
| | 182 | 53.8 | 141 | 56.0 |
| 薬学研究科 | | | 18 | 22.2 |
| | 126 | 27.0 | 77 | 23.4 |
| 工学研究科 | 1,488 | 10.9 | 567 | 16.0 |
| 農学研究科 | 628 | 35.0 | 274 | 32.8 |
| 人間・環境学研究科 | 310 | 44.2 | 320 | 46.3 |
| エネルギー科学研究科 | 275 | 6.2 | 90 | 14.4 |
| アジア・アフリカ地域研究研究科 | | | 156 | 52.6 |
| 情報学研究科 | 433 | 9.0 | 154 | 18.8 |
| 生命科学研究科 | 160 | 44.4 | 117 | 41.0 |
| 総合生存学館 | | | 10 | 30.0 |
| 地球環境学舎 | 88 | 45.5 | 67 | 53.7 |
| 計 | 4,846 (423) | 22.7 | 3,682 (706) | 29.3 |

(注1)医学研究科博士(後期)課程の上段は博士課程(4年制)

(注2)アジア・アフリカ地域研究研究科、総合生存学館は一貫制博士課程

(注3) ()内は、外国人留学生数(留学ビザ留学生)で内数

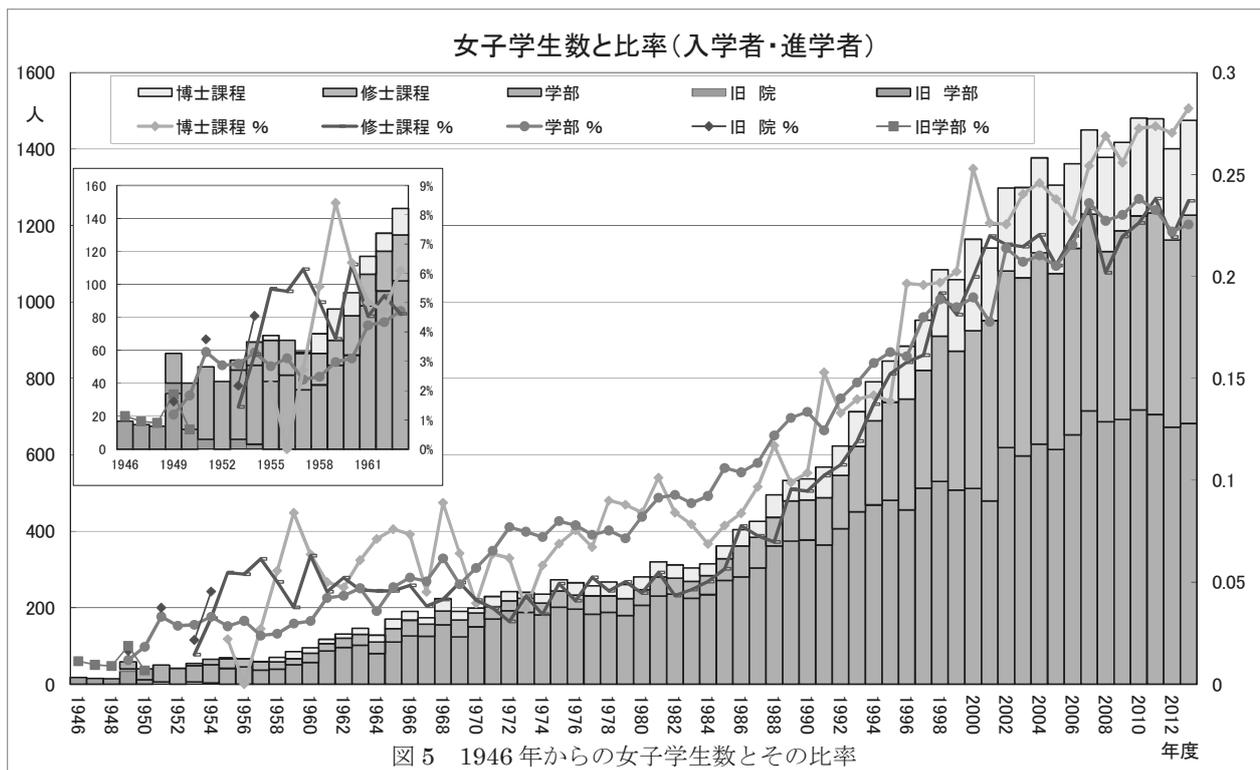


図5 1946年からの女子学生数とその比率

図6 女性の比率の流れ



※ 2.「女性研究者の雇用形態」(表 2、図 4)、3.「女性教員の部局別・職階別分布」(表 3)は、総務部(2013年5月1日現在)より作成。その他は、京都大学概要 2013(2013年5月1日現在)より作成。総務部データと京都大学概要では、集計上の事情によって女性研究者総数で数名の違いがある。また、作図にあたり四捨五入している。

平成25年度 京都大学女性研究者支援センター報告書

発行日 平成26年3月

発行所 京都大学女性研究者支援センター

© 京都大学女性研究者支援センター

